
甲斐田紫乃
Shino Kaida
大魔王は笑わない!?
～起きてください、魔王サマ～
B's-LOG文庫

B's-LOG BUNKO

大魔王は笑わない!!
～起きてください、魔王サマ～

甲斐田紫乃
Shino Kaida

B's-LOG 文庫

B's-LOG BUNKO

大魔王は笑わない!!

～起きてください、魔王サマ～

甲斐田紫乃
Shino Kaida

B's-LOG文庫

Contents

008 第一章 奴らは空と鍋からやって来た

069 第二章 襲来の大聖女

104 第三章 偉大なる帰還

148 第四章 さざめきに呪いあれ

194 第五章 復活の大魔王

246 終　章 戦いはこれからだ

252 あとがき


バスティアン・レスタック・ド・フォルキデ
フォルキデ王国の第二王子。
その神々しい雰囲気から、
男女を問わず絶大な人気を誇る。
だが本性は……？
ベルナデット・ド・シャルトリューズ
その鋭い目つきと不気味な笑い声から
「呪殺令嬢」と呼ばれている。
だが本人は、いたって穏やかな性格で
争いを好まない。
大魔王は笑わない!?
～起きてください、魔王サマ～
登場人物紹介


ネメシロ
風を司る四天王。
過去の魔王を知る唯一の魔物。
気位が高く傲慢だが、面倒見はよい。
ウシュク
水を司る四天王。
魔王に対して厚い忠誠心を持つ。
温厚で誠実だが、
倫理観はもちろん魔物基準。
アマトル
地を司る四天王。
元は魔王の魔剣だった。
千年前の出来事を誰よりも悔やんでいる。

イラスト／吟

昔々、あるところに、不思議なお姫様がいました。
お姫様は神様にお祈りして、たくさんの奇跡を起こすことができました。
奇跡で人々を助けるうちに、やがてお姫様は、みんなに聖女様と呼ばれるようになりました。
ところがある時、悪魔の王がやってきて、聖女様をさらい、お城に閉じ込めてしまいました。
魔王と共に、たくさんの悪魔たちが大暴れして、人々は困り果てました。
でも聖女様は、諦めずに、お城の中でお祈りを続けます。
「神様、どうか苦しむ人を救う力を、私にお貸しください」
すると、清らかな光がぱっと聖女様を包み込み、お城の外へと連れ出しました。
悪魔たちは、聖女様を捕まえようと襲いかかりました。
けれども不思議な光が守ってくれたので、聖女様は怪我ひとつしません。
そして聖女様は、ついにその光で、悪魔の王をやっつけました。
王がやられたので、悪魔たちはちりぢりになって、地の果てに逃げていきました。
それから聖女様は、世界中の人々を助け、幸せに暮らしました

『フォルキデ童話集・聖女様のお話』より

第一章　奴らは空と鍋からやって来た

フォルキデ王国の王宮、黄金宮（ル・パレドール）の煌（きら）びやかな大ホール。
冬の寒さを感じさせない、華（はな）やかなパーティー会場にて。
「――こんばんは」
後ろからかけられた低いしゃがれ声に、ラトゥール伯爵（はくしゃく）夫人は思わず身震（みぶる）いした。
この声は、まさか……。
いや、そんなはずはない。そうであって欲しくない。彼女はそう願う。
背後（はいご）に冷たい気配を感じながらも、夫人はそっと後ろを振り向き――
「ひっ!!」
悲鳴をあげた。彼女の声に合わせ、その場に居合わせた全員がざわめく。
後ろに立っていたのは、夫人と同じ貴族の、令嬢（れいじょう）。
社交界に身を置くならば知らぬ者はないシャルトリューズ伯の『呪殺（じゅさつ）令嬢』、ベルナデット・ド・シャルトリューズだった。

今宵も彼女は暗く重い雰囲気を纏ったまま、鋭い三白眼でこちらを睨んでいる。
「ご……ごき、ごきげんよう、ベルナデットさん」
一礼して、こちらを見据えているベルナデットの視線に背筋を凍らせつつ、夫人は挨拶した。
「あ、あなたもいらしていたのね。今年の聖誕祭は、ほ、本当に賑やかですこと。ほほほ」
「ええ」
夫人の言葉に、呪殺令嬢はにたり、と微笑む。
「このまま……楽しく、終わればいいですね。ククククク……」
「ひいっ！」
にわかに白い歯を見せて笑うベルナデットに、ついに夫人は耐えきれず、身をのけ反らせてその場を去った。
「に……逃げろーっ！」
夫人が去るのに合わせて、全員が離れていく。
残されたのは、ベルナデットただ一人。
ぽつんと佇んだ彼女は、はたと気付いたように呟く。
「あら？」
彼女は長い睫毛に彩られた目を瞬かせた。
「私……またやってしまったのね」

ベルナデットがついた小さなため息は、誰の耳にも届かなかった。

（……ああ、今夜もいつもと同じことになってしまったわ）

ホールの片隅に立ち、ベルナデットことベルナは一人、パーティーの進行を眺めていた。

彼女がラトゥール伯夫人に挨拶したことで、一時凍りついていたホールは、今や落ち着きを取り戻して賑わっている。

神の御子の降誕の日を祝う国王主催のパーティーには、名だたる貴族が皆列席していた。

流行最先端の夜会服に身を包んだ人々は、笑いさざめき、楽しそうに言葉を交わしている。

一流のオーケストラが奏でる音楽は耳を楽しませ、向こうのテーブルに並べられた豪勢な料理は、ベルナの立っている場所にまで、その芳醇な香りを漂わせていた。

けれども、ベルナはそちらには行けない。

行けばまた、誰かが悲鳴をあげることになるだろう。

（どうして、いつもこうなるのかしら）

答えはわかっているけれど、つい心の中でぼやいてしまう。

ベルナはそっと後ろの窓を見た。窓ガラスには、自身の姿が映っている。

腰まで届くダークブルネットの髪。厚ぼったい前髪の下で光る、大きく鋭い緑色の目。

細く白くひょろ長い身体を包む漆黒のドレスが、その雰囲気をより重苦しいものにしている。

そしてそれを見る自分の顔は、憂鬱さに歪んでいた。

と言っても「憂鬱そうな表情」だとわかってくれる人は、彼女自身を除けば、この会場には誰もいない。

「ほらご覧になって、シャルトリューズ伯のご令嬢。ああやって、窓の向こうに浮かぶ亡霊と話をしてるんですってよ！」

「あ、あんな怒りに満ちた形相で!?　きっとまた、新しく誰かに呪いをかけているんですわね。なんてことっ……」

（ああ、やっぱり！）

なまじ耳がいいせいで、会話が全部聞こえてきてしまう。

違うんです、私は窓を見ていただけなんです……と、遠くで震えている貴婦人二人に弁解したい気持ちでいっぱいになり、彼女は慌てた。

しかし今から誤解を解こうとしたところで、さらに新たな誤解を生むだけだということは、ベルナ自身、これまでの経験からよくわかっている。

先ほどの夫人に対しても、ベルナは、にこやかに挨拶したつもりだった。

穏やかに、礼儀正しい態度をとっているつもりだったのだ。

それなのに緊張のあまり声が掠れ、生まれつきの三白眼がさらに鋭くなってしまい、しかも、うっかり笑ったせいで完全に誤解されてしまった。

ベルナは笑うのが苦手だった。

幼い頃から、どうしても、悪人のような笑い方になってしまうのだ。

（私にも、鈴を転がすような声があればいいのに。あとあまり悪くない目つきと……知らない方々とお話しする時にも緊張しないだけの、勇気も）

今日この時のために、彼女なりに色々とお喋りの話題を用意してきたつもりだったが、その努力はすべて無駄になってしまった。

（お腹が空いたわ……）

空腹を訴える胃の辺りを手で押さえ、ベルナは遠くのテーブルの七面鳥の丸焼きに視線を移す。

「ああ……あ、あれは！」

「どうなさったの、モンローズ侯爵!?」

「ベルナデット嬢のあの挙動……間違いない、今夜の生贄を探しておるのですぞ！　十四年前の植物園で、幼い彼女があの視線で薔薇を睨むのを、私はこの目でしかと見たのです！」

（ち、違います！　七面鳥が食べたいだけなんです！）

彼女の心の叫びは、誰にも届かない。

三歳のベルナが、訪れた王立植物園の薔薇を、触れるだけで枯らせたのは有名な話だ。

当時は健在だった彼女の両親は、事件を揉み消そうと必死に努力したのだが、その場に居合

わせた貴族たちの口を封じることはできなかった。
話に尾鰭がついた結果がこれだ。ちなみに薔薇が枯れた原因は、未だに謎のままだ。
「ううむ。ベルナ嬢のあの動き、さながら獲物に挑みかかる前の肉食獣というところかっ……！」
「まあ！　では今夜、誰かが命を落とすと!?」
「ばっ……馬鹿馬鹿しい、呪いなどあるものかっ！　わしは邸宅に帰らせてもらうっ！」
帰宅者まで出してしまった。
モンローズ侯爵を中心とした一団は、なおも彼女を見て青ざめている。
（ご、ごめんなさい……）
きっと自分の目つきが誤解の原因なのだ。そう思い、ベルナは目を閉じた。
「見て、今回も始まったわ！　ベルナデット嬢の魔界との交信が！」
「あの夏至祭の時には、邪神と会話していたそうですわね……」
「ロートブッフ男爵の家が全焼したのも、その交信で呼び出した邪神の仕業なのでしょう!?」
（あうう、そ、そんな……）
目を開けたものか閉じたものか迷いながら、彼女は泣きだしたくなった。
彼女が『呪殺令嬢』などという異名を得る原因となったのは、三歳の時の事件に加えてもう一つ、二年前の秋に起こった事件だ。

ベルナをいじめていた男爵家令嬢の邸宅が、落雷による火事で丸焼けになったのである。
皆は、落雷の理由をこう話した。「ベルナデット嬢の怒りに触れたせいだ」と――
お陰でベルナはそれ以来、表立った嫌がらせなど一切受けることはなかった。
その代わり、触れてはならない祟り神か何かのような扱いを受けることになってしまった。
だからベルナを噂する者は皆、彼女に呪われないよう、必ず最後に誉め言葉をつけ加える。
「本当にベルナデットさんは、み、身震いするほど麗しくていらっしゃるわね！」
「シャルトリューズ伯も、あのような妹君がいれば安泰だろう！　色々な意味で」
「さすがは『呪殺令嬢』、ファッションも悪魔的で――あ、も、もちろんいい意味でですわよ！」
「『呪殺令嬢』様……お願いです、あの人の浮気相手を呪い殺してやってください……お願いします、ベルナデット様……！」
遠くで拝んでいる人までいる。
（私、呪いをかけたことなんてないし、幽霊を見たことだってないのに）
いたって平凡な、どちらかというと内気なベルナにとって、このような扱いはとても耐えられるものではない。かといって、根深い誤解は簡単に解けはしない。
だから人前に出るのは苦手だし、パーティーの席なんてもっと苦手だ。
たまにこうして出てみても、ご覧の有り様だ。

（今日こそお友達を作ろうと思って、ここまで来たけれど……きっと、今夜も無理なのね）

そう思いながら、ベルナは薄く目を開く。

見えるのは、華やかなる社交の場。彼女には無縁の、遠い世界。

視界の端に、同年代の令嬢たちが集まって、楽しげに何か話し合っているのが見えた。

（私もあそこで皆さんと一緒に過ごせたら、どんなに楽しいかしら）

やるせなさが募り、ふと嘆息した彼女は、目が涙でじわりと滲んでいるのに気がついた。

それを拭うため、彼女はハンカチを取り出そうとして――

「あ、あら？」

ない。ちゃんと持っていたはずの、レースのハンカチがどこにもない。

（まさか、落としたのかしら……）

母の形見の、大切なハンカチである。必死に床に視線を走らせるが、どこにも見当たらない。

「あ……あ、あの」

なんとか近くの人に声をかけ、尋ねようとするのだが。

「ひぃっ、シャルトリューズ伯の！　ごっ、ごきげんよう!!」

話しかけてきたのがベルナだとわかるやいなや、皆すぐに逃げ去ってしまう。

不安に曇る彼女の表情は、他人から見れば、魂を狩る死神の形相だった。

（どうしましょう……私だけでは、きっと見つけられないわ）

彼女の唯一の理解者であり肉親である兄・シャルトリューズ伯は、現在遠い戦地にいる。
「……困ったわ」
ベルナはドレスの裾をぎゅっと握り、俯いた。
彼女の周りにはたくさんの人々がいるのに、誰も彼女と目も合わせようとしない。
ベルナが諦めかけた、その時。
「そこのあなた」
背中から、声をかけられた。
温かみのある、男の人の声。今まで聞いたことのない声だ。
ベルナは慌てて振り返る。
そして――――
「これは、あなたのものですか？」
その瞬間、時が止まったかのように感じた。
彼女の目の前で微笑む青年。彼は、奇跡のように美しかった。
見ているだけで心が温かく安らぐ、春の日差しのような、神々しいまでの優雅さ。
豊かな黄金色の髪と、穏やかなターコイズ色の瞳は、どんな宝石にも勝る輝きを放っている。
均整のとれた身体は背がすらりと高く、高価なベロア地の夜会服がよく似合っていた。
年の頃は、きっとベルナと同じくらいだろう。



けれどベルナには、とても彼が自分と同じ人間だとは思えなかった。
（異国の神話に出てくる、愛の神様みたいだわ――）
押し黙ったまま彼女が頬を赤らめると、青年は軽く首を傾げた。
その動きに合わせて、彼の襟足の長い巻き毛がふわりと揺れ、金色の光を散らす。
呪殺令嬢はその様をぼんやりと見つめ――そこでやっと、探していたハンカチが彼の手の中にあるのに気付いた。
「あ。そ、それ」
「ああ、やはりあなたのものなのですね」
青年の声は、深く心を潤すような響きを伴っている。
「よかった。向こうで見つけたのですが、どなたのものかと思っていたのです」
にっこり笑う青年を見て、ベルナは涙が溢れそうになった。
この世にここまで美しく、ここまで親切な人がいるなんて!!
お礼を言わなくては！　と思う一方、うまく言葉が出てこない。
（こっ……こんなに綺麗な方と話すなんて、き、緊張して）
「ふふ。どうなさいました、そのようなお顔……いえ」
ベルナが心の中でもがいている間に、青年は彼女の手を取り、そっとハンカチを握らせた。
「すみません、突然声をおかけして。驚かせてしまいましたね」

彼は柔らかく笑った。ベルナはさらに焦った。と――

「――ん？」

間近でベルナの顔を見た青年は、ふと笑顔を曇らせる。

「え、あ」

そのままじっとこちらの顔を見ている青年に、ベルナは心底焦った。

（もしかして、また睨んでいると誤解されたのでは！）

早くお礼を言うべきだ。それも、笑顔と共に。

「あ、あ、ありが」

青年の放つ輝きに目を瞬かせつつ、なんとかベルナは声を絞り出す。が――

「あら殿下！　こんなところにいらっしゃいましたのね！」

黄色い声がそれを掻き消した。

気付けば青年の背後を囲むように、貴族の娘たちが立っている。

（……殿下!?）

ベルナがびくりと身を竦ませる一方で、青年はベルナから離れると、令嬢たちの方を向いた。

「ごきげんよう、皆さん。今宵もようこそお越しくださいました」

「バスティアン殿下に会えるとなれば、私たちはどこへでも参上いたしましてよ！」

「ええ！　ああ、今日も本当にお美しいですわ……」

賑やかな会話の輪の向こうで、ベルナは一人、ぶるぶる震えていた。
(あの方が……バスティアン殿下……!)
普段社交の場に顔を出せないベルナでも、さすがに王子の名前くらいは知っている。
容貌麗しく、賢明にして穏やかであり、篤い信仰心を持つ人物。
今や貴族だけでなく、国民からも絶大な人気と信頼を得ている、時代の寵児。
それがこの国の第二王子、バスティアン・レスタック・ド・フォルキデである。
「今夜は私たちとお話ししてくださいますわよね?」
「ありがとうございます。せっかくのお誘いですが、あいにく他の方々にもご挨拶申し上げねばなりませんので……」
柔らかに断る所作も美しく、令嬢たちは吐息と共に落胆した。
「また今度、ゆっくりお話しさせてください。それでは」
そう告げると、王子はその場を去って行く。
(私、殿下に話しかけていただけたのだわ)
その背をぼんやりと、ベルナは見送った。
(それだけでなく、落し物を拾っていただけたり……少しだけどお話しもできたわ)
彼女はぎゅっと手の中のハンカチを握る。
(そ、それなのに私、きちんとお礼も言えなかったなんて……)

「あーら皆様、ごきげんいかがかしら？」
「まあ、カロリーヌさん！」
そこへ現れたのは大貴族・ロートシルト侯爵家の息女、カロリーヌだった。
陽光を紡いだような金髪を輝かせ、咲き誇る薔薇のように美しく着飾った彼女の登場に、周囲の令嬢たちは途端に色めき立つ。
「ふふっ。皆様、バスティアン殿下にご挨拶なさってましたの？」
「ええ。でも、殿下はお忙しいご様子で……」
「ああら！　それは残念でしたわね」
扇子で口元を隠しながらも、カロリーヌ嬢は、そのやや険のある美貌に微笑みを浮かべる。
「私は先ほど、殿下とゆっくりお話しさせていただいたところですのよ！　まあ、殊更にお伝えすべきことでもございませんけれど」
「ええっ！　すごいですわ、さすがカロリーヌさん！」
「羨ましいですわー……」
自身を取り巻く令嬢たちの羨望の声と眼差しに、カロリーヌはふふんと愉悦の声を漏らす。
「いえ、私が誇ることではございませんのよ。それもこれもただ単に、我がロートシルト侯爵家の地位と名誉と人望と財産と人徳とが、ちょーっと他のお家の方々より優秀だということで、殿下に懇意にしていただけているというだけですわ！」

と、そこで言葉を切ったカロリーヌは、やおら視線をベルナデットに向ける。
「ああらっ！　ベルナデットさんもいらしてたんですのねっ！」
「はっ……！　か、カロリーヌ、さん」
わざとらしく驚いてみせるカロリーヌに突然声をかけられ、ベルナはびくりと震える。
「ベルナデットさんはお元気でしたの？　あなたは社交の場に全然おいでにならないから、私心配してましたのよぉ？」
「え……あ……」
鼻高々な状態のまま、カロリーヌはベルナに言い放つ。
「あなたもお聞きになったと思いますけれど、私先ほどバスティアン殿下とじっくりお話しさせていただきましたの！　そう言えば、次の休日には散策をご一緒する予定でしたわね。それだけでなく私……ああっと、これ以上は申し上げられないのでしたわ！　ごめんなさいね」
ぺらぺらと早口に語り終えた後、目を閉じてみせたカロリーヌは、ちらりと薄く目を開けてベルナの次の言葉を待つ。
「いつもながらすごいわカロリーヌさん。あの呪殺、いえ、ベルナデットさんに、臆さず声をおかけになるなんて」
「ええ。高貴な方だからこそかしら」
取り巻きの令嬢たちは、会話の行く末を、固唾を呑んで見守っている。

「あ……」
当のベルナは、しばし目を瞬かせた。
「……え？」
「くっ!?」
ベルナの呻きに、カロリーヌ嬢は大仰に後ずさった。
「む、無反応!?　う、うう羨ましくなどない、ということですの!?」
「あ……いえ、私は」
「きいぃっ！　毎回毎回、どうしてあなただけ……ふっ、不愉快ですわ！　失礼！」
「あっ、カロリーヌ嬢！」
「待ってくださいまし！」
ぷりぷりしながら去って行くカロリーヌを、令嬢たちは慌てて追いかけていく。
ベルナデットはそれをただ見送るだけだった。
（ああ……なんてことかしら！）
彼女は深く頭を垂れた。
（せめてきちんと、『もう一度お話しください』とお願いするべきだったわ）
普段あまり人と話さない生活を送っているベルナは、早口でまくしたてられると時々相手の発言内容が聞き取れなくなることがある。

きょとんとしたのち、眉をしかめた彼女の顔は――悪鬼の形相に見えたことだろう。

（カロリーヌさんは、私の噂を気にせず話しかけてきてくださる、とても親切な方なのに……いつも怒らせてしまっているわ）

と、彼女は思っていた。

（誤解を重ねて、他の方のご親切に無礼で返してばかりだなんて）

ベルナはがっくりと肩を落とす。

（最悪だわ、私）

彼女の沈んだ面持ちを、うっかり見た人々がどよめいているのも、今は気にならない。

ベルナはただがっかりして、その場を去ったのだった。

「はぁ……」

吐いた息が白く染まり、中空に溶けて消えていく。

ここは王宮の中庭。彼女の他には、誰もいない。

パーティーの喧騒を離れたベルナは、噴水の石段に腰かけ、ため息をつくばかりだった。

雪は積もっていないとはいえ、真冬の夜の冷気は容赦なく肌を刺す。

けれどもその寒さも、今のベルナには心地よく思えた。

「父様、母様、ごめんなさい……」

低く呟くように、今は亡き父と母を呼ぶ。

「このままでは私、お家の再興どころか……結婚も、いえ、お友達すらできそうにないわ」

戦地で兄が戦っている分、自分は自分にできることをしなければ。

シャルトリューズ家の再興のために――

その思いで、彼女は今日、このパーティーにやって来たのだ。

かつて栄華を極めながら、没落してしまったシャルトリューズ伯爵家――きっかけは、十三年前の革命だった。

暴政を敷いた先代の国王と、その弟にして現国王であるアンリ9世との間に起こった確執。

それは重税と言論統制に反発した市民たちと、門閥貴族の重用に業を煮やした一部の貴族たちを巻き込んで、国を揺るがす大きなものとなっていった。

当時のシャルトリューズ伯、つまりベルナの父は、現国王を支持した貴族の一人だった。

ただ、彼は利権など気にせず、純粋に市民たちの窮状を嘆き、戦いを決意した人物だった。

つまり貴族として、真の意味で高潔な人物だったのだ。

しかし高潔な人物が、常に報われる世の中ではない。

彼は国王と戦った。たとえ私財を――爵位と愛する家族以外の、すべてを失おうとも。

最終的に王と王妃が処刑台に送られることで革命は成り、国中が喜びに沸いた。

だが、その陰でひっそりとある名家が没落し、心労で当主夫妻が亡くなったことを悲しむ者は、あまりにも少なかった――――

「私ももう十七歳だもの。どなたかと結婚して、少しでもお家の役に立てればいいのだけれど」

一体誰が、『呪殺令嬢』を花嫁に選ぶというのだろうか。

「せめてお友達を作って、色々なお話をして……兄様のご栄進の役に立てればいいのだけど」

貴族にとって最も重要なのは情報だ。そしてそれを最も手に入れやすい場所は、パーティーやサロンなどの社交の場なのだ。

「どうすれば、私、うまくできるのかしら……」

どうしたら、誤解をされずに済むのだろう？

「まずは、笑顔よね」

ベルナは噴水を覗き込んだ。丸い月が照らす水面に、不気味な表情の少女が映り込む。

それにめげずに、彼女はちょっと笑顔の練習をすることにした。

「クックックック……クックックック……」

吊り上がった口の端から、深淵より響くかのような軋んだ笑い声が漏れる。

「……まるで駄目だわ」

「寒くありませんか？」

「ひえっ!?」
水面に映る自分の陰鬱な顔の横に、突如、神々しいまでに美しい顔が並ぶ。
思わず悲鳴をあげたベルナの隣に立っているのは、変わらぬ微笑みを浮かべた、バスティアン殿下だった。
「でっ、……で、殿下」
(う、嘘……殿下が、どうしてこんなところに!?)
緊張の極致に達したベルナは、まごついて口をぱくぱくさせた。
「ははは。すみません、また驚かせてしまいましたね？」
「い、う、あ、い、いいえ」
ぶんぶんと首を横に振ったベルナを見て、バスティアンはさらににこりと笑ってみせた。
「あの、よろしければ――隣に座っても？」
「えっ、あ、は、はい」
今度は勢いよくこくこくと首を縦に振るベルナ。
王子は懐から大きめのハンカチを取り出すと、恭しくそれを石段の上に広げた。
「あなたはこちらへどうぞ。直に座っては、お身体が冷えてしまうでしょう」
そう言って、彼はハンカチのすぐ隣の位置に座る。
(まあ！　……本当に、殿下はお優しい方だわ)

彼の気遣いにほとんど感涙しそうになりつつも、ベルナはハンカチの上に腰を落ち着けた。
「あっ、あ、あああああ、ありがとうございます」
「いいえ、どういたしまして」
（やっと、お礼が言えたわ……一応）
ベルナはそっと安堵の息を漏らした。
バスティアンは微笑んだまま、彼女を見ている。
「ところでベルナデット嬢は、なぜ一人でこの中庭に？」
「えっ」
――なんて答えればよいのだろう。
「え、あ、わ、わた……」
「私は少し休憩したくてここへ来ました。人々が集まる場所は、賑やかで楽しいですが、気疲れもするものですからね。今夜は、よく眠れそうです」
そう言って、殿下はふふと笑う。
（やっぱり人を惹きつける方は、それだけ大変でいらっしゃるのね）
ベルナはそんなことを考えた。
「そう、眠ると言えば」
と、バスティアンは語り続ける。

「実は私、おかしな夢をよく見るのですよ」
「……おかしな、夢？」
突然の彼の言葉に、ベルナははたと聞き返す。
「ええ。幼い頃から繰り返し、よく見ている夢なのですが――見知らぬ荒れ果てた大地で、ある人物と対面している夢なのです」
バスティアンはベルナから視線を逸らし、空を見上げた。
「夢の中で見るその人物の姿は、初めは芥子粒のように小さく、顔を確認することもできませんでした。それがここ数カ月になって、なぜか、だんだんとその人物に自分が近づいていく夢に変わったのです。相手の顔立ちも、よく見えるようになりました」
王子の声で語られるその不思議な話に、ベルナは今は緊張も忘れて聞き入っている。
「一昨日には、ついに私はその人物と、目の前で対面しました。一目見ただけで、忘れられないその顔……昔会ったことがあるようで、覚えのないその顔の主が一体誰なのか。私はしばらく、頭を悩ませていました。――ですが」
「きゃっ！」
突然、バスティアンがベルナの手を握り、こちらをじっと見つめた。
彼の美貌が、彼女の鼻先に近づく。
（ええっ、で、殿下！　いきなり……！）

間近に感じる彼の温もり、息遣い。
今までにない事態に、ベルナの心臓は痛いほどに高鳴り、口から飛び出そうだ。
そんな彼女の様子に構わぬままに、バスティアンは語り続ける。
「今日やっと、わかりました。私の夢に登場していたのは——あなたです。ベルナデット嬢」
「で、殿下……」
ベルナの絞り切られた声帯から染み出た声は、古びたドアのように軋んでいる。
けれどもバスティアンの青い瞳は、ベルナの瞳を射たままだ。
「ああ、あなたのその表情。夢の中で見たものと同じだ」
目を細めたままそんなことを言われ、ベルナの頬は真っ赤になった。
(急にこんなことになって、私、なんと申し上げたらよいのやら……)
ベルナが口をぱくぱくしている間に、バスティアンは、そっと顔を伏せた。
「……思えばあの声は、このことを予期してのことだったのでしょう」
「え?」
「ああ、驚かないで聞いてくださいね」
彼はにっこりと笑った。
「不思議なことは重なるとでも申しましょうか……昨日、王宮の聖堂で祈りを捧げていた時、どこからか声が聞こえたものですから。遙か高き天より届くような、厳かな声が」

少しだけ恥ずかしそうに言うバスティアンに、ベルナは静かに見惚れてしまった。
――バスティアン殿下は、革命後には珍しい、敬虔な神の信徒としても知られている。
革命前、先代の王族と共に暴利を貪っていた教会組織や、僧侶階級の姿を見た人々は皆、すっかり神への信仰心を失ってしまったのだ。
聖誕祭を祝うことすら、年々本来の意味を忘れられ、単なる行事と化している。
今では王子が聖堂に足を運んでいるというだけで、噂の的になるほどだ。
（……殿下に聞こえたのは、神様のお声かしら。聖典の中の出来事のようだけれど）
ベルナがそんなことを考えている間に、バスティアンは首を傾げ、再び彼女に問いかけた。
「その声が――私に、なんと告げたと思いますか？」
「え？　わっ、わかりません」
王子の顔がどこかいたずらっぽく微笑んでいるように見えて、おどおどと首を振るベルナ。
バスティアンは、そんな彼女の耳元に、そっと口を近づけた。
「声はこう告げました。『夢に現れた少女は、お前の運命の相手だ』と」
彼は囁く。
「っ……！」
ベルナの心臓は大きく跳ね上がり、彼女は耳まで真っ赤になった。
その隙にバスティアンは自分の指をベルナの指に絡め、身を近づける。

「私も驚きました。一体どういうことなのかと――すると声は、こう続けたのです」
耳元で囁かれる、甘い声。目を潤ませたベルナには、もう呻くことすらできない。
ただ彼女は、以前に読んだ恋愛小説の一節を、頭の片隅に思い浮かべては消していた。
（そ、そんな。私に、こんな、小説みたいなこと、起こりっこないわ）
運命の相手。ロマンティックな言葉。一生聞くことすら叶わないと思っていた言葉――
胸をときめかせる声音は、どぎまぎするベルナを置いて響く。
「――『運命の相手を、すぐさま探し出せ。それはお前のすぐ傍にいる。そして』」
バスティアンは一瞬俯いた。
「『見つけ出した暁には』」
彼は面を上げる。その目に射られたベルナは、時が止まったかのように感じた。
（暁、には――？）
彼はゆっくり、こう続けた。
「『この世から消し去れ』、と」
バスティアンの表情が、冷たく変わった。
「えっ……!?」
一瞬、耳を疑う。
だがそんな暇すら与えられず――白い閃光が、ベルナの目を灼いた！

続いて引き裂かれるような激しい痛みが、握られたままの彼女の手を襲う。
「きゃあああっ！」
悲鳴をあげてのけぞるベルナ。
彼女は反射的にバスティアンの手を振りほどき、身を離した。
「う、い、痛たた……」
月明かりに照らし見るその手には、火傷に似た傷ができている。
ちょうどバスティアンの手が触れていた場所が、赤く腫れている――――
（これは……な、何が起きたの？）
ベルナの胸は、今度は恐怖で高鳴っていた。
恐る恐るバスティアンを見れば、彼は一定の距離を保ったまま、じっと様子を窺っている。
その手からは、先ほどの閃光が夜の闇を裂いて、今なお花火の煌めきのように発されていた。
「……ふふ。なるほど、これはこれは」
そう言う彼は微笑んでいる。
だがその微笑みは今までとは違う、不敵なものだった。
「この閃光――人を守るための力だ、と聞いていたが」
その口調も、不遜なまでに尊大な響きを伴っている。
「これを食らって痛がるのなら、やはりベルナデット……お前」

彼は光を纏ったままの手を、すっとベルナの方に向ける。
「お前、人間ではないな？」
「な……!?」
ベルナはわけがわからなかった。王子は何を言っているのだろう？
（わっ、わた、私……またいつものように、誤解させてしまったのかしら？　殿下を怒らせてしまったのかしら？）
ばくばくと震える心臓の鼓動だけが、彼女の鼓膜を揺さぶっている。
「これは意外だ。抵抗してこないのか？　夢の中では、あれほど荒ぶっていたというのに」
「ゆ、夢……？」
「先ほど言っただろう、私の夢だ。お前は毎晩私の夢に現れては、奇怪な魔物を率いて国々を蹂躙して回っていたじゃないか」
そう言うバスティアンは、どうやら冗談めかしているつもりのようだが、その鋭い目に宿る光は、何かしらの強い確証と、使命感を帯びているように見えた。
戸惑うベルナの顔を覗き、彼はやや酷薄な笑みを浮かべる。
「……ああ、こちらを睨め上げ、呪うかのようなその表情――やはり夢と同じだな」
「あう、ち、ちが」
ベルナは手を振り、慌てて否定した。

決して彼女は睨んでいるのではない。むしろ怖がっているのだが。
ベルナに構わず、バスティアンは手の中に宿す光を激しくする。
「だが夢の中だけでなく、本当にお前がこの世界を滅ぼすつもりなら、私は神託に従わねばならない」
彼は腕を大きく振り上げた。
「『この力で、魔王を討て』……という神託に、な！」
叫びと共に、バスティアンは光を放つ！
引き絞られた矢のようにまっすぐに、光はベルナに向かって飛んでくる。
抜き身の刃を向けられたかのように、ベルナの背はぞっと粟立つ。
彼女は本能的に理解した。あれが直撃したなら、命はない。
「……っ、あ……！」
足が竦み、動けそうもない。ベルナはぎゅっと目を瞑り――――
「何っ！」
しかしその時、バスティアンの驚愕の声が、ベルナの耳に届く。
次いで彼女は、奇妙な浮遊感に襲われた。
彼女の身体は勝手に宙に浮き、ふわりと光を避ける。
光の渦が真横を掠め飛ぶのを、ベルナは夢でも見る心地で見つめていた。

「お前……！」
バスティアンが、きっとベルナを見据える。
「既に仲間がいたのか!?」
いや、彼の視線はベルナの真後ろの空間に向けられていた。
ベルナも首だけで振り返る。そこには――
「違うな。仲間、ではない」
低い声でそう語る、男がいた。その姿は夜闇に黒く溶け、確認することができない。
「我はこの者の配下だ。……一応な」
「配下……!?」
男の言葉に、バスティアンは一瞬たじろぐ。ベルナもまた、突然の展開を未だに呑み込めずにいる。が――
「ふっ」
軽い気迫の声と共に、男の身体が宙に浮かぶ。ベルナの身体も、彼女の周囲をぐるぐると回る空気の渦に巻き上げられる形で空高く浮かび始めた。
「何っ……！　こんな技を使うとは、お前は……」
「覚えておけ」
バスティアンの言葉を遮って、謎の男は高らかに宣言した。

「貴様の命は必ず我らが貰い受ける。その日を震えて待つがいい――――『聖女』よ！」
瞬間、風が黒いうねりとなってバスティアンに襲いかかる。
彼が体勢を立て直した頃には――ベルナも、そして謎の男の姿もなかった。
「……逃げた、のか」
バスティアンは一人そう呟いた。
光の消えた彼自身の手を、じっと――困惑したように見つめながら。

静かな聖誕祭の夜。
家々に灯る明かりはオレンジ色の光となって眼下の街に散らばり、その光景はさながら宝石箱のようだ。
「ああ、き……綺麗な夜景だわ……」
呆けた言葉が、ベルナの口から漏れ出た。
頬を打つ風の冷たさと激しさは、先ほど中庭で感じた以上のものだ。
気がつけば、彼女は王宮の屋根の上にへたり込んでいた。
（わ、わ、私、いつの間にこんなところに……？）
恐怖と寒さでベルナの肩はがたがた震える。

「おい」
「きゃあ！」
声をかけられ、ベルナはびくっと振り返った。
見上げた先に立っていたのは、さっき彼女の命を救った謎の男だ。
先ほどは暗がりだったのでよく見えなかった彼の姿は、今は月光に照らされている。
男の見た目は、二十代後半といったところだろう。
黒く長い髪、黒い瞳、黒く裾の長い異国風の服と、奇妙な黒ずくめの格好だ。
やや顔色が悪いが、怜悧さと厳格さを併せ持つ、美しい顔立ちであることに変わりはない。
だがベルナの目を引いたのは、彼の顔立ちではなかった。
（この人の、足――）
長い裾から覗く彼の両足は、人間のそれではなく――黒い羽毛と鉤爪のついた、鳥の足だった。王宮の黄金の屋根を踏みしめ、しっかと立っている。
（あ、ええと……そういえば、道化師さんは竹馬に乗っているから、た、たぶん……）
鳥の足の形をした竹馬かもしれない、とベルナは必死に現実逃避している。
「貴様、呆けるのは後だ。名を名乗れ」
そんな彼女の動揺に構わず、黒ずくめの男は詰問するかのように彼女に尋ねた。
自分が先に名乗れ――など、ベルナに言えるはずはない。



「っ！　あっ、あの、あ……」
「アノアというのか」
「い、いえ！　べ、ベルナデット……ド・シャルトリューズ……です」
「ふん、腑抜けた名だ」
男はさらりと悪口を言った。
「それで貴様、我のことを覚えているか？」
「え？」
ベルナは思わず目をぱちくりさせた。覚えているか、と言われても——完全に初対面だ。
「すみません。わ、わかりません」
「……チッ」
思い切り舌打ちされ、ベルナは身を竦めた。
「まあいい。いつまでもここで立ち話をしているわけにもいかぬ。貴様、家はどこにある？」
「え、家……ですか」
「そうだ。ここから方向を指さすだけでいい、早くしろ。追って来られては困る」
有無を言わさぬ口調で黒ずくめは言う。
しかしこの寒風吹きすさぶ屋根の上から、一体どうやって自分の家を探せばいいのか。
戸惑うベルナだったが——運よく月明かりの下に、通い慣れた教会の高い尖塔を見つけた。

そしてその二ブロックほど先にちらりと見える、ぼろぼろの屋根も。
「あ、あそこ……です」
「そうか。では行くぞ」
事もなげにそう言うと、黒ずくめは再び気迫を発した。
その身体の周囲を空気の渦が包み始める。同時にベルナもその渦に包まれ――
「きゃっ、きゃあああ！」
悲鳴と共に、彼女は空を飛んでいた。

「あうううう……」
「貴様、いつまでそこに隠れているつもりだ」
無事に帰ってきた我が家で、ベルナデットは震えていた。
あちこちにクモの巣ができたエントランスの柱の陰にしゃがみ込み、彼女は様子を見ている。
かつては白亜の御殿、至大なる芸術品との誉れ高きシャルトリューズ邸は、今や近所でも有名なボロ屋敷だ。言うまでもなく、維持費が工面できなかったせいである。
しかしベルナにとっては生まれ育ち慣れ親しんだ家、たとえお手伝いも雇えずたった一人であろうとも、心休まる唯一の場所だった。

無事にここまで帰ってこられた、そのことはいい。
（で……で、でもこの方は、一体どなたなの!?）
謎の技術を用い、王宮の屋根からこの家の玄関先まで一瞬で彼女を移動させた謎の黒ずくめは、立ち去るでも近寄るでもなく、ただ彼女をじっと睨んでいる。
傲岸なその佇まいは、温厚なベルナを著しく恐怖させた。
「やれやれ。本当に此奴か？　いや、彼奴らの到着を待つより他ないか」
ぶつぶつと呟きつつも、彼はベルナから視線を外さない。
（ど、どうしましょう……！　わ、私、こういう時どうすればいいのか……）
ベルナはここまでの経緯を必死に頭で整理した。
パーティーに行ったら、理由は不明だが、突然バスティアン王子に殺されかけた。
そこへこの人物が現れ、自分を助けてくれた。
（――助けてくれた……？）
しかもこの人物は、現在彼女の家に上がっているのだ。
（はっ！　そうだわ。よくわからないけれど、この方は私の恩人で……お客様なのだわ）
最近は『幽霊屋敷』とまで渾名されるこの家に、お客が来るなど何年ぶりのことであろうか。
（とっ、父様もよく仰っていたわ。いかなる人物であろうと、お客人には最高のおもてなしをするのが、貴族たる者の務めだと……！）

脳裏に浮かぶ父の姿が、彼女に勇気を与えた。
彼女は震える足をなんとか動かして、柱の陰から歩み出る。
突然目の前にやって来た彼女の姿に、黒ずくめは眉をひそめた。
が、ベルナはそれに構わずに、精一杯の力で恭しくお辞儀した。
「ど、ど、どどどうも、は、はずかしめ――いえ！　初めまして！」
「はぁ？」
彼の開口一番の苛立った返事に、いきなりくじけそうになるも、ベルナは必死に言葉を紡ぐ。
「たっ、助けてくださりありがとうございます。何もおもてなしはできませんが、よろしければ内臓のスープでもいかがですか？　ちょうどいい肉が手に入りましたの、ククク……」
愛想笑いを浮かべる彼女の顔は、さながら幽鬼だった。
一般人ならば即座に悲鳴をあげて逃げ出しそうなところを、しかし、黒ずくめは一蹴する。
「要らぬ。我に食事は必要ない」
「そっ、そうですか！　それでは準備をいたしますので、お待ちくださいな！」
「おい。要らんと言うに……」
脱兎のごとき素早さで、ベルナはエントランスから台所へと駆けていく。
「わかったぞ。馬鹿者だな、彼奴は」
苦虫を噛み潰した表情で言うと、彼はばりばりと頭を掻きむしった。

「え、ええと。まずは、火、火をつけなくちゃ……」

手が震えてまともに動かせない中、彼女は客人を立派にもてなそうと必死だった。

というより、そうして何かに意識を向けていないと、気絶してしまいそうだったのだが。

（今朝作ったスープが残っていてよかったわ。うちには、他に、何もないもの……）

市場で手に入れた豚の内臓（格安）を使った、限りなく水に近いスープだけが、今この屋敷にある食事だった。

ベルナはスープ鍋の傍に近づく。火をくべようとして――ふと、異変に気付いた。

「……あら？」

おかしい。まだ火も入れていないのに、鍋の底から、スープに泡が立っている。

戸惑う間にも、スープに立つ泡の勢いはどんどん激しくなり、ぼこぼこと音を立て始めた。

「な、何かしら、怖い……」

今日はおかしなことがよく起こる日だ――

などと、彼女が考える暇もない。

一瞬の静寂の後、スープが噴水のような勢いで噴き上がり、天井を濡らす。

あっという間の出来事に、ベルナは言葉もなかった。

そしてその水流の中から現れたのは――一本の腕。

鋼鉄製の籠手をつけた、腕だ。
（な……何が起こっているの……!?）
ベルナは台所の床にへたり込む。
やがて水流が弱まると同時に、まるで穴から這い出るように、もう片方の腕も現れる。
そして頭、肩……胸と、それはゆっくりと姿を見せた。
鍋から出てきたのは、古めかしい騎士のような鎧を身に纏った、若い男だった。
その背には、分厚い刃と禍々しい装飾を持つ、一振りの大剣を負っている。
水草のような深緑色の髪をしとどに濡らし、俯いた彼の顔の造作は、ベルナの方から確認することはできない。
（鍋から……!?　この方、どうやって……なんで……？）
ベルナは混乱する。
昔、この屋敷を廃屋だと勘違いした浮浪者が、勝手に一階に住みついていたことならあった。
けれどもこの状況は、それよりずっと異常だ。
「あ……あ」
思わず、ベルナの口から呻きが漏れた。と――
「……ん？」
ベルナの声に、男が反応した。彼はテーブルの上から、まっすぐにベルナを見下ろす。

男の顔は精悍で、しかし奇妙なまでに整っていた。少し不気味で、作り物じみている。
茶色いガラス玉のような目に見据えられたまま、ベルナは動けず、ただじっとしていた。
やがて男のその目が、徐々に大きく見開かれていき――
「へ、陛下!!」
よく通る声で、男は叫んだ。
彼は喜色満面でテーブルから飛び降り、ベルナの前に跪く。
そして彼女の手を取り、その甲に素早く口づけた。
「え、あの、あ……」
唇の柔らかな感触に、みるみるうちに顔を真っ赤にするベルナ。
だがそれに構わず、男は彼女の手を取ったまま、こう言い放った。
「魔王陛下！　ご復活、おめでとうございます!!」

「――え？」
ベルナがようやく返答したのは、男が深々と頭を下げてから三十秒ほど経ってからだった。
「あ、あの……ええと」
「参上が遅れ、まことに申し訳ございません。再びお仕えできる日を、このウシュクめは心待

ちにしておりました!!　早くわたくしの上に跨って、尻を鞭でピシピシ叩いてくださいね！」
「え、いえ、あの……」
「そうだ、アマトル殿も一緒なのですよ、ほら！」
そう言って、鎧男・ウシュクは、背負った大剣を台所の床にぽいと投げた。
抜き身のその剣は、けたたましい金属音を立て床に転がった瞬間、銀色の光に包まれ――
「魔王様―っ！」
大剣は細身の少年へと姿を変え、子どもの声で言葉を発した。
少女にすら見える可憐な外見のその少年は、銀色の短い髪をランプの明かりに煌めかせ、どこか無機質な鉄色の瞳を輝かせて、ベルナに飛びついてきた。
身に纏った革製のぴったりした服と、胸元の大きな紫色の宝石が特徴的だった。宝石は三日月型にカットされ、ランプの明かりを鈍く照り返している。
「魔王様！　魔王様っ、久しぶりだね！」
「わ、わっ、あのっ、ちょっと！」
突然抱きつかれ、ベルナはおたおたと腕を振る。
一方でウシュクは、彼らの様子をのほほんと見つめていた。
「アマトル殿は相変わらずですねえ。……おや？　陛下、なんだか縮まれました？　それにどことなくひ弱そうですし……」

「……やっと来たか、貴様ら」
と、ドアを開けて台所に入ってきたのは黒ずくめの男だ。
「あっ、ネメシロ殿！　早かったのですね」
男を見て、ウシュクは朗らかな笑顔のままで言った。
「こちらの世界に『門』を開くのに思いのほか時間がかかったので、わたくしどもは今参上したところなのですよ。あのう、このひょろい感じの方が陛下でいいのですよねぇ？」
「それを聞きたいのは我の方だ。どうなのだ、アマトル」
「もうっ、ウシュク様もネメシロ様も、何を言っているの。アマトルが魔王様の魂の匂いを間違えるわけ、ないでしょ！」
少年・アマトルは、不服そうにぷうっと頬を膨らませた。
そしてやおらベルナの後ろに回り、彼女の顔を仲間たちに指し示す。
「それに、お顔はほら、前と変わらないよ。こんなに禍々しくて恐ろしいよ！」
「おお、本当だぁ！　面構えだけはご立派なままでいらっしゃる」
「ねっ、アマトルはちゃんとわかってたよ、魔王様！」
しげしげと見知らぬ者どもに見つめられ、ベルナは生きた心地がしない。
（ほ、誉めていただいているわ……でも嬉しくないわ……）
何も言えないベルナを見て、やがて黒ずくめ――ネメシロはふうと息を吐いた。



「呑気なことを言っている場合か。此奴、先ほどまた聖女めに殺されかけていたのだぞ」
「ええっ!?」
その言葉を受け、ウシュクとアマトルは驚きの声をあげる。
アマトルはベルナの手を素早く取ると、血相を変えた。
「まっ、魔王様っ、本当……!? 本当に聖女に殺されかけたの!? ……ああっ、手に怪我してる！ そんなっ、ひどいよ！ 怪我は大丈夫なの!?」
「あわわわわわ」
少年に首をがくがく揺さぶられ、ベルナは言葉も出ない。
彼女はぐらつく脳内で一生懸命考えた。
さっきから目の前で起こっている出来事は、とても常識では考えられないような、奇怪な、奇妙なことばかりだ。
（そ、そう言えばこの方々）
はっと彼女は息を呑んだ。
（先ほどから、魔王とかなんとか仰っているようだけど……）
空を飛ぶ、鍋から現れる、変身する。こんな超常現象、人間に起こせるはずがない。
（まさか、ほっ……本物の悪魔なのかしら!?）
悪魔！ それは彼女の信じる宗教にも登場する、悪しき霊的な存在である。

（そ、そんな！　いくら私の見た目が悪魔じみているとはいえ、本物が来るなんて！　よりによって聖誕祭の日に……！　助けてください、神様！）

彼女は、心の中で必死に神に祈りを捧げた。

「むむっ、陛下が黙ってしまわれましたよ？」

「おおかた我らを恐れているのだろう。やれやれ、ようやく探し出してみれば、こんな腑抜けになっていようとはな」

「でもアマトルは嬉しいよ。やっと魔王様を見つけたんだもの。千年もかかったけれど……」

「せ……千年？」

しんみりとした口調のアマトルの言葉に、ベルナはふと我に返る。

「まったく、こうしていても埒があかぬ。とにかくこの部屋から出るぞ、狭苦しくてかなわん」

「えっ、あっ、ちょっと……きゃあっ！」

ネメシロはむんずとベルナの首根っこを捕らえると、そのまま彼女を引きずって台所を出た。

「ネメシロ様、やめてよ！　魔王様が痛がってるよ！」

「黙れアマトル。こんな記憶を失った半端者の馬鹿者、この扱いでも丁重なほどだ」

結局ベルナは応接間まで、猫の子のように引っ張られていったのだった。

「わっ……と！」

ネメシロに背を押され、ベルナは倒れ込むように応接間の椅子に座る。

その周りをネメシロらが取り囲み、ベルナは居心地の悪いものを感じた。

「さて貴様」

と、ネメシロが口を開いた。

「質問してやる。職業は？　身分は？　家族構成は？　改めて、我らの顔に見覚えは？」

「え、え……？」

「口で答える必要はない」

言うなりネメシロは、ベルナの額にその手をかざす。そしてそのまま、しばらく黙り込んだ。

瞬間、ベルナの背筋に悪寒が走る。

気持ちの悪い虫が胸の内を這い回るような、不快な感覚だ。しかし――――

（う、動こうなんて……思わないほうが、よさそうだわ）

ベルナはただ、小動物のように身を縮こまらせていることしかできない。

「ふむ……」

「どうですか、ネメシロ殿？」

「駄目だ」
ややあってネメシロが答えると、ウシュクはがくりと肩を落とした。
アマトルもしょぼんと眉を曇らす。
「どれだけ心を探っても、ベルナデットだの、伯爵家だの、兄だの、日々の内職だの、此奴の現世の記憶しか現れぬ。忌々しいほどにな」
ネメシロの手が額から離れる。すると胸の中の不快感も消えて、ベルナはほっと息を吐いた。
「どうやら人間の魂にとって、転生とは思った以上に負担の大きいもののようだ」
「そんなーっ。わたくしたちのことも全然覚えてないのですか、陛下!?」
「う、え、あの……」
ウシュクの心底残念そうな視線が、ベルナを射る。
「あ、あの……すみません」
何がなんだかよくわからない彼女には、ただ謝ることしかできなかった。
もしかしたら自分でも知らない間に、大切な何かを忘れてしまったのだろうか。
「魔王様……悲しまないでね」
憂い顔のアマトルは、ベルナに寄り添った。彼の細い腕が肩に回され、彼女はどぎまぎした。
「魔王様はきっと、すぐに記憶を取り戻せるって……アマトルは、知ってるからね！」
「あっ、あの！」

おっかなびっくり、ベルナは聞いてみた。
「……ま、魔王とは、なんですか」
「えっ、『自分とは何か』ということですか？　存外に哲学的ですね、陛下！」
「黙れウシュク。話が進まぬ」
ネメシロははあと嘆息し、ベルナに視線を向けた。
「いいだろう。説明してやる、ベルナデット・ド・シャルトリューズ」
「はっ、はい！」
ベルナは居住まいを正す。その目の前で、ネメシロの口がゆっくりと動き、言葉を紡いだ。
「貴様は、魔王だ」
告げられると同時に、雷鳴が、まるでベルナの受けた衝撃を肩代わりしたかのように響く。
次いで激しい雨が、屋根を打つ音が聞こえ始めた。
（は、はい……？）
呆然としているベルナを諭すかのように、ネメシロは彼女にじっと視線を注ぎながら続ける。
「正確には、魔王の転生体、つまり生まれ変わりだがな。人間どもも、語り継いではいるはずだ。聖女と戦い敗れ去った、魔王の伝説を」
「で、伝説……？」
聖女と魔王の伝説。

（……！　まさか）

そう言われてベルナは、昔読んだ童話をはっと思い出した。

みんなに慕われ、不思議な力でみんなを助ける聖女様の物語。

そして、その力を恐れ城に閉じ込めたものの、結局敗れてしまう魔王の物語。

幼い日、ベルナは思った。

自分も、この聖女様のようにみんなと仲良くなり、みんなの役に立てる人になれたらな、と。

高潔な父の背中を見ていたせいか、ベルナは特にそう強く願っていた。

今の自分の生活が、その願いとかけ離れたところにあるのはよくわかっている。

だがネメシロの口ぶりでは、かけ離れているどころか――

「私が、あのおとぎ話の魔王の……生まれ変わり……？」

「おとぎ話ではない、あれはれっきとした事実だ。千年前のな。そして貴様が転生体だというのもまた、紛れもない事実だ。アマトルが貴様の魂の匂いを嗅ぎつけたのだから」

「そ、そんな！」

ベルナは思わず椅子から立ち上がる。

自分が魔王だなど、とても信じがたい、荒唐無稽な話だ。

（何かの間違いです！　わ、わ、私は善良な一市民ですっ!!）

そう主張したいところだが、彼女の舌は緊張で痺れていた。

「わ、わにゃしふぁぜ」

「そもそも……千年前まで、我ら魔の眷族は、この世のあまねく地に存在してきた」

慌てる彼女を尻目に、ネメシロは静かに語りだした。

「魔物、魔神、悪魔――人からは様々な名で呼ばれた。だが我らの存在する意義はただ一つ。神の摂理に抗い、人を糧にし、生きる。それだけだった。そして力ある魔は人と契約を結んで力を貸し与え、願いを叶えた後、その者の肉体の一部と魂とを対価として得るようになった」

「そうやって得た肉体と魂は、たくさん支配していればいるほど、自慢できるのですよ！」

と、ウシュクが魔界の価値観について補足した。

「かつての貴様も、そうして力を得た人間の一人だった。いや、奴は他の人間とは違っていた。我のみならず、ウシュクを始めとした様々な魔と契約を交わしたのだ。それだけの価値が奴の肉体と魂に、元々備わっていたということだがな……。多くの魔の力がその身に宿るうち、奴の力は人も魔も遙かに凌駕する、強大なものへと変化していった」

黙って話を聞いていたベルナは、ふと自分の手を見た。

信じられるはずがない。あかぎれたこの青白い手に、そんな力が眠っているなんて。

だがそこには、先ほどバスティアンによってつけられた傷跡が、はっきり残っている。

そしてネメシロは、語るのをやめない。

「やがて奴は、その力で我ら魔を束ねた後、人の世の掌握に動きだした。それが奴の望みだ

ったからだ。魔王の名の下に人の世を壊し、蹂躙する――ほとんどの魔が、その動きに乗った。我ら魔の眷族と人との戦は、我らの優位で始まったのだ。しかし……」

そこから先の結末は、物語と同じのようだ。

「……あの聖女さえいなければ、今頃魔王様が、この世を支配していたのに」

アマトルの呟きには、深い憎悪の念が籠もっていた。

「願いの叶う寸前で、奴は聖女の『光』に命を奪われた。『光』は神が魔を討つために聖女に貸し与えた力――あらゆる敵意からその者を守る砦であり、刃だ」

長い戦いの末、魔王は聖女の『光』に敗北したのだ。

「さらに『光』は結界となりこの世を穿ち、我ら魔の眷族すべてを、その内側に封印した。我らは閉ざされた世界――魔界の中で、人に関与することもままならぬまま、長い時を過ごした」

だが、とネメシロは言う。

「やがて愚かにも、人は我らのことを忘れ、『光』のことを忘れ、聖女のことすら、ただの虚構だと断じるようになった。人はもはや自分たちこそがこの世の主だとばかりにのぼせ上がり、神への信仰すら忘れ始めている」

信仰が忘れられ始めていること――国内に限って言えば、それは、ベルナも承知の通りだ。

ベルナもまた、毎日祈りを欠かさず、教会に足しげく通うほど信仰心が篤いからだ。

彼女が通っている教会は荒れ果て、ステンドグラスは革命の際の混乱で割られたまま修理も

されていないし、礼拝に顔を出す人の数は日に日に減っている。
そのせいでベルナの場合、「教会で黒魔術の儀式をしている」と近所で噂になってしまっているほどだ。
それだけではない。科学の技術は、日々様々な国で目覚ましい勢いで発展し、もはや人間の理性で解明できないことなどないらしい——と、ベルナは兄の口から聞いていた。
このまま科学の発展が進めば、魔法や魔物、神様の力は、完全に「なかったこと」にされる日が来るかもしれない。
「ゆえに結界に、穴が開くようになった」
「あ、穴？」
「そうだ」
ベルナの漏らした問いに、ネメシロは鼻を鳴らし答える。
「人が神への信仰を疎かにすれば、神が人に与えし力も弱まるのが道理だ。そして毛先ほどの小さな穴でも、我らのように力ある魔ならば、そこから外界へ抜け出ることができる」
「それで、見つけたんだ。魔王様が転生していることを、アマトルが！」
そう言って、アマトルは腕を伸ばし、きゅっとベルナの腰にしがみついた。
少年の猫の毛のような細い髪が胸の辺りをくすぐり、彼女の心臓は途端に跳ね上がる。
「えっ、あの、ちょっと……！」

「魔王様のここは、アマトルの場所だよ。やっと見つけたんだもの、離さないから」
すりすりと頬ずりをしながら、アマトルは微笑んでいる。
「ねっ、魔王様、誉めてね！　アマトルを。アマトルが魔王様を見つけたんだから、ねっねっ！」
「え、あ、あのう……」
上目づかいに見上げられ、ベルナは顔を赤く染めた。
「誉めてよう……」
アマトルはむくれ顔でぷうっと頬を膨らませる。
それを呆れた顔で見ていたネメシロは、しばらくしてふうと息を吐いてから、結論を述べた。
「――わかったか、ともかくそういうことだ。アマトルが貴様の魂を感知し、貴様の居場所を見つけた。万が一、貴様が完全に力を失っているなら、貴様を殺して転生を繰り返させ、徐々に魔王の力を呼び覚ますしかないかとも思っていたが――」
と、そこでネメシロは言葉を切る。
彼が静かに右手をベルナの方に向けると、その手のひらの中で空気が圧搾されていった。
それに気付いたアマトルは、慌ててぱっとベルナから身を離す。
ネメシロの手の中の空気は凝縮され、唸り――
「きゃっ！」

ごう。生温かい風が吹いた。
饐えた臭いのするその風は、ベルナの頬を撫で、そのまま真後ろに吹き抜けていった。
（何……今の、気持ち悪い風は……？）
ベルナは振り返り、息を呑んだ。
彼女の真後ろ、ちょうど風の吹き抜けていった場所が、黒く薄汚れ——いや、腐敗している。
床と壁、それに調度品の一部と、ベルナの座っていた椅子までもが、まるで何十年も放置されていたかのように、べっとりと腐っていた。鼻をつん、と不快な臭いが突く。
「こ、こ……これは……！」
言葉を失うベルナ。
かたやネメシロは、ベルナの姿を見て、満足そうに笑う。
「ほう……ふむ、やはりな。少しでも見込みがあるなら、話は別だ」
さっきかざした手をぺろりと舐めながら、ネメシロは言った。
「我が力は颶風と腐敗だ。そしてこの魔神ネメシロの力を受けてなお腐らずにおれるのならば——それは、貴様が我よりも強い魔としての力を秘めているという、何よりの証左だ」
我らの術は、より強い力を持つ同族には通じぬのでな、と彼は付け足す。
「え!?　……あ」
ベルナは自分の顔と身体をぺたぺた触って確認する。どこにも異常はない、いつも通りだ。

あの風が通り過ぎた場所は、みんな黒く腐ってしまったというのに。
「やったあ！」
ベルナの様子を見て、アマトルがぴょんと飛び上がる。
「やっぱり魔王様は、魔王様だったんだね！」
「そんな……」
彼女の口から、呆けた言葉が飛び出した。
（本当に私が魔王……そんなこと、あるはずが）
あるはずがない。目の前で起こっていることは、全部手の込んだいたずらだ。
そう思いたいし、きっとこの場に彼女の兄がいたなら、そう叫んでいただろう。だが――
「貴様にはこれから魔王として活動してもらうことになる。一刻も早くその力と意識を復活させるよう、最善を尽くせ」
「わたくしも全力でお助けします。一刻も早く、この世を闇に覆い尽くしましょうね、陛下！」
「アマトルも！　アマトルも、一生懸命頑張るからね！　見ててね！」
「ま、待ってください！」
いよいよ盛り上がる魔物たちを前に、ベルナはなんとか声をあげた。
「……なんだ？　よもや、半端者の分際で我の言を疑っているのではあるまいな」
「いっ、いえ！　そういうつもりでは、というか、あの……」

（どう言えばいいのかしら）

ベルナは悩み、眉根を寄せた。

「ああっ、陛下がすさまじく力んでいらっしゃる！　いよいよニンゲンどもも終わりですねえ」

「ちっ、ちが……！」

「ちが？　血が見たいの、魔王様!?」

目をぱちくりさせるアマトルに、ベルナはゆらゆらと頭を振る。

（この方々が、私のことを絶対に魔王の生まれ変わりで、記憶をなくしているだけだと仰るなら……ここで私が何かの間違いだと言っても、聞き入れていただけないと思うわ）

そう思ったベルナは、ぐっと勇気を振り絞り――

「あっ、あ、あ、あの！」

恐る恐る右手を挙げる。精一杯の虚勢を張って、彼女は一世一代の勝負に出た。

（それなら……父様も、昔よく仰っていたわ！）

やりたくない時は――毅然と断ればいいのだ！

「あのっ、わっ、私！　ま、魔王なんて、や……」

「やりたくない、などというのは通らぬぞ」

「えっ」

ネメシロの一言で、勝負は終了した。

「そ、それって、どうして」
「簡単なことだ。もし貴様が、かつて我と交わした契約を破棄するというなら――」
黒い魔神はベルナの胸元を指す。
「その代価として、今すぐ貴様の心臓を我に渡せ！」
「ええっ!?」
「それが我と貴様が、千年前に交わした契約だ。本来なら貴様が目的を完遂し、生物的な死を迎える際に譲渡されるものだが――契約破棄の場合、対価は破棄の瞬間に渡す決まりだ！」
「でっ、でも、そんなことをしたら私、死……」
「当然、貴様の生命活動は停止する。だがそんなことは、我の関知するところではない」
言うなり彼はベルナの胸の前で、軽く何かを摑むように指を動かした。
「ひゅぃっ!?」
瞬間、彼女の胸が締め付けられる。心理的な意味ではない。物理的にだ。
見えない手が彼女の心臓を圧迫し、鼓動を抑えつけようとしている。
息を吸っても吸いきれず、頭がくらくらする。
もがくベルナを見て、魔神の口元はにいっと弧を描く。
よく見れば、彼の曲げた指の間に、黒い雷光のようなものが奔っていた。
「このまま心臓をもぎ取られたくなかったら、この場で認めろ。『私は魔王です』と」

「ふっ、うっ、くっ」
声が出ない。
「誓うか？」
命の危機だ。問われ、ベルナはこくこくとあらん限りの力で頷いた。
「いいだろう、許す」
ぱっ、とネメシロは手を離す。ベルナの心臓は、正常に動くようになった。
彼女は荒く息をつく。
「ふむ。ウシュク、アマトル。ようやく盟主殿は、使命を『思い出して』くださったようだぞ」
「あ、あうう」
勝ち誇った笑顔のネメシロの前で、ベルナはがっくりとうなだれた。
（さ、最悪だわ……）
確かに自分は目つきも悪く、雰囲気も暗く、笑い方も変だが、それでも『人間』というカテゴリーには入っていると思っていた。それなのに――
「わ、私が魔王になるだなんて」
呪殺の渾名が、噂を超えて本当になってしまう日がやってくるなんて、思いたくもなかった。
（このままだと私……一体、どうなってしまうの？）
この魔物たちの言う通りに、いずれ魔王として覚醒し、この世界を闇で支配するというの

か？

（そんなこと、できっこないわ！）

知らない人と話すことすら難しいのに、魔王になるだなんてできるわけがない。

それにもしそんなことをすれば、きっと今は亡き父母や、戦地の兄が悲しむだろう。

「ううう……」

「いつまで呆けているつもりだ。我の言葉を聞き入れたくなくば、我らを力で従えてみせるがいい。それまでは、この魔神・風のネメシロと……」

「水のウシュクと！」

「地のアマトル」

彼らは三様に、何やらポーズを決めた。

「以上、我ら四天王が、千年前と変わらず貴様を支援してやる。光栄に思うがいい」

「……あの、さ、三人しかいないのでは」

「黙れ。今日は一名欠席しておるのだ」

「申し訳ありません、陛下！　火のギンレー殿は、姉君の結婚式に出ねばならないそうで……後日合流いたします」

魔物も結婚式をするらしい。

（どこで式を挙げるのかしら……）

聖堂でだろうか。ベルナは余計なことを考え、そして……。
（聖堂……そうだわ！）
はたと大切なことに思い至った。
「そ、そういえば！」
「どうした、急に大声で」
「あのっ、さ、先ほどバスティアン殿下が、私を……その、殺そうとなさっていましたが」
彼がその手から発していたのは、白い光。
ベルナの身を灼いた、強烈な『光』――聖女の伝説にあるのと、同じ。
「もっ、もしかして」
ごくりと唾を呑んでから、彼女はネメシロに問う。
「……で、殿下が、魔王を倒した、その聖女様……なのですか？」
そんなわけないだろう、と鼻で笑って否定して欲しい。けれど。
「何を今さら……そうに決まっているだろう」
魔神は呆れ顔で即答した。
「奴は聖女だ。正確には、貴様と同じ転生体で……此度は男になっているようだがな」
「そっ、そんなぁあああ！」
叫び、ベルナはめまいを覚え、がくりと膝をついた。

ある意味、自分が魔王の生まれ変わりだと言われた時より、衝撃が大きかったかもしれない。
――バスティアンはベルナのことを『運命の相手』だと言っていた。
でもそれは、愛し合う運命ではなかった。
殺し合う運命だった。
「貴様、本当に馬鹿だな。聖女めは既にその力を覚醒させ、不倶戴天の敵である貴様を始末しようとしたというわけだ、ついさっきな。わかりきっていたことだろうに」
「ううう……わ、わかりたくありません……」
「陛下のお顔、かつての陛下が怒り狂っていた時の顔にそっくりですよ！　変わらないなぁ」
何か感動している様子のウシュクはさておき、ベルナの目からはらはらと涙が零れ落ちた。
確かにバスティアン殿下の美しさは、普通の人間のそれとは思えないほどだった。
さらに彼は、有名になるほどに信仰心の篤い人物だった。
そして多くの人を惹きつける人望も、王族ということを差し引いてもすさまじいものだった。
当然だ、彼は伝説の聖女の生まれ変わりで、神の使者であり、正義の味方なのだから。
そしてベルナは――
「で、殿下と戦う運命だなんて」
「戦うのではない、抹殺するのだ。奴の魂を魔の力で消滅させれば、聖女の結界は消える。そして結界が消えれば、再びこの世は我ら魔の眷族で満ちる。その時こそ、我らの野望が果たさ

れるのだ！」
「魔王様！　ネメシロ様！　大変だよ!!」
と、そこでしばらく黙っていたアマトルが声をあげた。
「近づいてきたよ！　……千年前に覚えた、あいつの魂の匂いがする!!」
「何っ！　……ちっ、我の結界を破るほどに、力を覚醒させていたとはな……」
悔しそうにネメシロは舌打ちする。
ただ一人ベルナだけは状況が理解できず、彼女は傍らのウシュクにそっと尋ねた。
「あのう、あいつとは……？」
「決まっているではないですか、陛下！」
ウシュクは朗らかに言った。
「聖女ですよ！　生意気にも聖女めが、殴り込みに来たのです」
「ええっ!?」
ベルナが戸惑うのも束の間。屋敷の扉が開け放たれる音が、はっきりと耳に届いた。

第二章　襲来の大聖女



――ネメシロの口から、ベルナが衝撃の事実を聞かされていた、ちょうどその頃。

バスティアンは異様な屋敷の前に立っていた。

かつては瀟洒な佇まいだったのだろうそれは、今や見るも無残に荒れ果てている。

激しい雨と雷鳴のせいもあり、その姿はどこまでも不気味で、怨霊だの生ける屍だのが、すぐにでも飛び出してきそうな有り様だ。

しかし彼はこの先に進まねばならない。自分でそう決めたのだ。

（……夢の中のことだけなら、ここまではしなかっただろうが）

シャルトリューズ邸の門前で、外套を着込んだ彼は眉間に皺を寄せ、じっと己の手を見つめた。

（あんなことがあった後では――もはや、私に課せられた運命と思うしかないな）

バスティアンはこれまでの出来事を回想する。

幼い頃から何度も見てきた夢の変化……そして、昨日の大聖堂での出来事。

いかに彼が熱心な神の信徒でも、聖堂で謎の声が聞こえた時は、さすがに自分の耳を疑った。しかし、声に呼応するように、突然不思議な力――稲光のような純白の『光』を自在に操れるようになったとなれば、どれほど信じがたいことであっても、信じるしかない。

（それでなくとも、思い当たる節は……）

そこまで考えて、バスティアンは思考を切り替えた。

彼は思い出す。あの日、声は彼にこう告げた。

『――夢の中の少女を探せ。この者は、人の世を乱す魔物を率いる魔王である。そして信徒バスティアンよ、汝こそ、その『光』を以って魔を討ち、人を守る、唯一の存在なのだ――』

聖女と魔王の昔話は、バスティアンもよく知っていた。

（まさか私が聖女の役回りで――噂の『呪殺令嬢』が、魔王だったとはな）

有名な『呪殺令嬢』とは初対面だったが、彼女は、バスティアンの想像以上の存在だった。

王宮で出会ったシャルトリューズ伯の令嬢は、夢と同じように眼光鋭く、威圧するかのようにこちらを見据えていた。

しかも彼女は、まるで冷血動物のようにその表情を緩めなかった。

バスティアンがいかに微笑み、甘く囁こうと、その目に怒気を孕ませていくだけで、一向に態度を崩そうとしなかったのだ。

（……あれだけやって、にこりともされなかったのは初めてだ）

そう思うと、少し悔しくもあった。
彼が今まで社交界での地位を築くために使ってきた手練手管である柔和な笑顔、「素敵な王子」としての仮面が一切通用しないとは……さすがは魔王といったところか、と彼は思う。
（ともあれ私は、神託に従おう）
彼はゆっくりと門に手を伸ばす。
ベルナデットは、突然暗闇に現れた男と共に、颶風を残して姿を消した。
あれは紛れもない宣戦布告だ。それに――
（神託がなかったとしても、私は自らの為すべきことを為すだけだ）
仮にこれ以上彼女らを放っておいて、フォルキデ王国内に被害を出したとなれば、それこそこの国の王子の名折れだ。
相手は魔物。その気になればきっと、彼らは世界中を蹂躙することができるはず。
（その割には、ベルナデット本人が手を出してこなかったのが気になるが……）
いや、その違和感を確かめるためにも、ここで屋敷に突入しなくては。
そのためにこそ、密かに王宮を抜け出し、シャルトリューズ邸を探し出したのだから。
――門に手を触れて、彼は強い不快感に襲われる。
目をこらせば、門のみならず屋敷全体を、漆黒の鎖のような何かがぐるりと囲んでいた。
ただの人間なら、近づいただけでその瘴気にあてられ、昏倒してしまうことだろう。

（……なるほど。さすがは魔王の根城だ）

だが、と彼は笑う。

そしてそっと目を閉じ、胸元の十字架――神の恩寵を表す信仰のシンボルを手繰り寄せ、祈りを捧げた。――魔を討つための力を貸し与え給え、と。



――数分後、シャルトリューズ邸内。

「どっ、ど、ど、どうしましょう」

あいにく施錠していなかった屋敷の玄関を突破され、魔王ベルナは慌てに慌てる。

「落ち着け、愚か者！」

そんな主君を一喝すると、風のネメシロはにやりと冷酷な笑みを浮かべた。

「聖女め。己の力に驕り、我らの居城に自ら足を踏み入れたのは、彼奴自身の最大の不幸だな」

「ええ、ネメシロ殿！　速やかに死を与えてやることだけが、奴へのせめてもの慰めですね！」

「最後の一撃はアマトルにちょうだい。思いっきり惨たらしくしてやるんだ」

怨敵の襲来という事態にあって、四天王たちはあくまで好戦的だ。

彼らは口々に恐ろしい言を吐くと、応接間に散らばった。

ネメシロとウシュクは唯一の出入り口の扉を挟むように立ち、アマトルは奥に佇むベルナを護衛するように、彼女の前に立った。

「魔王様、安心してね！　魔王様は必ずアマトルが守るし、聖女は必ず抹殺するからね！」

「い、いえ、あの……！」

「魔王、貴様は黙っていろよ」

ベルナの反駁を、ネメシロが封殺する。

「貴様がどう思っていようと、聖女が我らの宿敵であることに違いはない。せいぜいそこに突っ立っているがいい。我らを妨害すれば――わかっていような」

「ううっ！」

邪魔をすれば契約破棄と見なし、心臓を奪う――そういう彼の意図を汲んだベルナは、涙を堪えて口をつぐむ。彼女が黙ったのを見届けると、ネメシロはウシュクと視線を交わした。

「……いいな、ウシュク」

「ええ、ネメシロ殿」

軽く答え、ウキウキと親指を立てるウシュク。

「扉が開いたら即座に、聖女を攻め討つのですね」

「そうだ。いかに聖女が『光』を扱えるといっても、奴はまだ目覚めたてだ」

「つぼみのうちに毒水を浴びれば、どんな花でも咲けませんものねえ」

「卵のうちに潰してしまえば、どんな鳥でも歌えないということだ」
ガラス玉のような目を輝かせて言うウシュクと、酷薄な笑みを浮かべるネメシロ。
彼らの姿に、ベルナはぞくっと背筋を凍らせる。
（わ、私、どうするべきなのかしら……！）
彼女は悩んだ。
人としてあるべき道を考えるなら、この場合、彼女は魔物たちに屈するべきではない。
このまま彼らを放っておけば、尊い人命が失われてしまうかもしれないのだから。
しかしその尊い人命は、ベルナを殺しにやってきたのだ。
手の甲で今なお痛む、火傷のような大きな傷跡が、その事実を告げている。
（た、確か世の中には「正当防衛」というものがあるとか……け、けれどこのまま殿下が殺されてしまえば、世界が、魔王が、ううう……）
そもそも沈思黙考型のベルナには、これ以上思考の巡りを速くすることはできなかった。
唸りを上げて考え込む彼女の表情を振り返り見て、アマトルは、無邪気に微笑んだ。
「――来るぞ」
低いネメシロの声に、全員の意識が扉に集中する。
僅かの間を置いて――ドアノブががちゃりと音を立てた。
その瞬間、ネメシロとウシュクが動く！

「死ねッ！」
叫びと共にネメシロの掌中で黒い風が唸り、ウシュクが口から青い光を放つ。
颶風が壁ごと応接間の扉を吹き飛ばす。
放たれた光線は猛烈な熱を纏ったまま、扉の向こうに立っていた人物を包み込んだ。
ベルナは顔を手で覆う。
「やった！」
アマトルが言う。しかし。荒れ狂う風と青い光が消え去ると、そこには――
「けっこうなご挨拶だな」
無傷のまま佇む、外套姿の彼がいた。
フードを目深に被ってはいるが、その声で正体はベルナにもはっきりわかる。
「で、殿下……」
震える声でベルナが言うと、バスティアンは素早く外套を脱ぎ捨てた。
彼は先ほど会った時よりはやや質素な服装に着替えているものの、その容貌は、今なおこの世のものとは思えぬほどに美しい。ぼろぼろの屋敷にいるのが、何かの冗談のようだ。
だが彼の表情は硬く、視線は先ほどベルナに襲いかかった時のように、鋭いものだった。
その胸にぶらさげた青銅製の十字架が、応接間の明かりを受けて鈍く煌めく。
「どうした、これだけか」

彼の声音は冷たい。
「これだけのことしかできないと言うなら、さっきのように尻尾を巻いて逃げた方が、まだましだったのではないか？」
彼は巻き毛をいじりながら、挑発する口調でネメシロたちに言い放つ。
四天王たちの攻撃が見かけ倒しでなかったということは、吹き飛ばされあちこち腐食した壁、丸く焼け焦げた跡のある床が示している。
普通の人間なら、きっと死んでいたことだろう。普通の人間なら――
「くっ……！」
「あれっ、おかしいですねえ。あの光を浴びたら、全身の水分が瞬時にフットーして爆発して絶命するはずなのに」
額に青筋を浮かばせるネメシロと対照的に、ウシュクは焦げた床とバスティアンを交互に見て首を傾げている。そして。
「聖女の奴……まさか、またあの〝力〟を使えるの？」
アマトルはぎりりと奥歯を噛みしめて、呟いていた。
（何がどうなっているのかしら……殿下は、ご、ご無事のようだけれど……）
今一つ事態を呑み込めないベルナを置いて、おもむろにバスティアンが再び口を開く。
「……まあいい。お前たちの考えはこれではっきりした。『聖女』の私を討ち、過去の因縁に

決着をつけようというのだろう？」
「ほう。それを知っているならば話は早い」
対するネメシロも、負けじと声を張り上げる。
「わざわざ我らの元へ来るとは、まさに蛮勇だな！　聖女の転生体よ、貴様は今日、この地で果てるのだ。我ら四天王の力、そしてここにいる……」
彼はベルナを指す。
「ここにいる我らが盟主、偉大なる魔王の手によってな！」
「なっ」
バスティアンは、目を僅かに見開いた。
「ベルナデット……やはり、お前は魔王としての意識に目覚めているのか!?」
「え、あ、わ、私は……」
涙目になりながら、必死に声をあげようとするベルナ。だが。
「なるほど。……お前のその表情が、答えということか」
（ご、誤解されてしまっているわ！）
慌てれば慌てるほど、ベルナの顔は魔王である証拠を示すかのように険しさを増していく。
「貴様の魂を我らの手で破壊すれば、千年前の貴様が張った結界も消失する。そうすれば再び魔物がこの世に解き放たれ、世界は我らの手中に収まるというわけだ！」

言うなりネメシロはかっかっかと高笑いする。
「恐ろしかろうなぁ！　だが貴様には、もはや死あるのみなのだ！　カァーッカッカッカ！」
（……ネメシロさんの方が魔王に向いていらっしゃるのでは……）
そんなことを思うベルナだったが、ふと殿下の視線が、自分に向けられていることに気付く。
「そうかっ……。お前はその魔物はびこる世で、頂点として君臨することを望んでいるのだな」
「違います！」
慌てて彼女は声をあげた。
「私は、望んでなど……！」
「ふっ……なるほど。望むまでもない、当然のことだと言うのだな」
ベルナの決死の訴えも、どうやら魔王的自信の表れだと思われてしまったようだ。
バスティアンは姿勢を正し、ベルナに言い放つ。
「ベルナデット。私は神託を受け……いや、私の意志でここへ来た。この科学の時代に、魔物だの魔王だのが現れる、というのはとても信じがたい話ではあるが――」
彼はそう言って、両手に『光』を出現させた。先ほどベルナを灼いた、あの閃光だ。
「ここまで来た以上、私はこの力を授かった者として、何よりこの国の王子として、責を果たす。……お前たちを倒し、事を起こす前に消滅させてやる」
低いバスティアンの声に、ベルナは身を竦ませる。

そんな彼女を見て、彼はさらに目つきを鋭くした。
「お前たちの存在は、この世界に、なんの益も生まないからな」
「これはこれは、好戦的だな。一国の王子で、聖女の転生体ともあろう者が」
「ふふん。魔神のくせに、私に慈悲を乞うつもりか？　悪いが臣民でもないお前たちに、施しなどするつもりは毛頭ないぞ」
バスティアンはそう言って、ふっと笑った。
「人は誰でも他人には、仮面を被って接している。私はただ、王子として活動するのに、都合のいい姿をとっているに過ぎないのでな」
「つ、都合のいい……？」
思わず声をあげてしまったベルナに視線を向け、バスティアンは答える。
「柔和で温和な顔で接すれば、どんな相手でも油断するものだ。ベルナデット、お前には通用しなかったようだが、な」
くくくと笑うバスティアン。
彼の笑顔は普段の柔らかなものではなく、穴倉からこちらを覗く蛇か何かのようだった。
（顔を使い分けていらっしゃるのかしら。すごいわ、きっとそれが社交界の常識なのね……）
こんな状況だというのに、ベルナは素直に感心してしまった。
呆気にとられているベルナを置いて、バスティアンはキッと彼女を指さす。

「ベルナデット、そしてその配下に告げる。お前たちが野望を捨て、元いた地へ帰ると誓うなら、私もこれ以上手出しはしない。命の保証もしてやろう。だが拒否するというなら――私が、お前たちを討つ！」

「殿下……！」

バスティアンの目に光るのは、強い使命感。己の為すべきを為そうという、強い意志だ。

そんな彼の態度を見て、ベルナは怖いと思う反面、どこかでこうも考えていた。

（立派だわ……）

あのように正道を生きることが、ベルナにもできたなら。

しかし状況は、そんな彼女の感傷を許しはしなかった。

「――ちっ。ならば！」

バスティアンが行動するより早く、ネメシロが動いた。

彼は鉤爪の足で床を蹴り上げ、中空に身を浮かばせる。そのまま彼は腕を広げた。

ベルナの目に、翼を広げた巨大なカラスの姿がネメシロと重なって見える。

刹那、魔神の前に、黒く饐えた空気の塊が現れた。

「……っ！」

バスティアンの目が、大きく見開かれる。だがそれに構わず、ネメシロは力を解放した！

「喰らえ！」

裂帛の気合を合図に、空気の塊が爆ぜ、吹きすさぶ。
黒い突風は王子を直撃し、彼の姿を掻き消した。
今度こそ、バスティアンは殺されてしまったのではないか!?
風が止み、巻き上がった埃と塵が収まるまで、ベルナは気が気でなかった。が――
「あっ……」
眼前の光景に、ベルナは声を漏らした。
そこに立っていたのは、やはり無傷のバスティアン。
彼は表情一つ変えずに、ぱんぱんと服の埃を払っている。
（よ、よかった）
ベルナは殿下の無事を喜んだ。
しかしその時、応接間のドアと壁の一部が腐り落ち、べしゃりと床に転がる。
（ああ、でも、父様と母様の遺してくださったお屋敷が、どんどん……！）
ベルナは思わずそんなことを思い、ぐすんと鼻を鳴らした。
「ふふんだと!?　何を笑っている！」
途端にバスティアンは苛立った様子で食ってかかる。
「え!?　あ、ち、違いま……」
「くっ！　多数の配下でかかれば、私を倒せるとでも思っているようだな。――ならば！」

一声叫ぶと、バスティアンは諸手で胸の十字架を握り、祈りの体勢をとる。
「神よ！　……この魔物たちを縛る力を、どうか与え給え！」
彼の持つ十字架が、激しい閃光を放つ。
瞬間、彼の眼前に『光』の球が現れた。球は彼の祈りに応え、徐々に大きくなっていく。
「ふっ……無事でいられると思うなよ？」
呟くバスティアンは不敵な態度だ。このままではベルナたちはやられてしまうかもしれない。
「……こうなったら！」
震えるベルナを見て、アマトルが叫んだ。
「魔王様！　アマトルを使って、あいつをやっつけて！」
「え、え!?」
「アマトルは魔王様の剣だったから。今は人の姿だけど、鋼だから『地のアマトル』。……魔王様がアマトルを使って、聖女を討てばいい！」
言うなり銀髪の少年の姿は光に包まれる。
その身はぐにゃりと曲がり、変質し、最初に見た時と同じ、巨大な剣の姿へ変じた。
（っ……！）
ベルナは床に転がる抜き身の大剣を見て、声にならない悲鳴をあげる。
その刃は、斬らずとも殴るだけで相手を殺傷できるのではないかというほど分厚い。

刃渡りは、ベルナに物干し竿を想起させるほどだ。
柄にはアマトルの胸にあったのと同じ三日月型の紫色の石が嵌め込まれ、銀色に輝く刀身には、燃え盛る炎を象ったレリーフが施されていた。
『さあ、魔王様。手に取って！』
剣からアマトルの声がする。
（これはつまり、アマトルさんを使って殿下を斬れ、ということ……私が……!?）
そんなこと、したくない！
「っ、わ、私……」
戸惑うベルナの様子を、バスティアンは祈りの姿勢をとったままじっと見ている。
彼の前で、『光』の球はみるみる膨らんでいる。
「……ちっ」
彼女の逡巡する姿に業を煮やしたか、それまでウシュクと共にバスティアンと睨み合っていたネメシロは、服の長い袖の中でぱちんと指を鳴らした。
空気の渦が小規模の竜巻となって大剣を包み、ベルナに向かってそれをぽいと放り投げる。
「わ、わわっ！」
自分の眼前に飛んできた大剣に、ベルナは反射的に手を伸ばしてしまう。
手にアマトルの柄が触れた瞬間、彼女の身体は、まるで機械仕掛けのようにそれを手に取っ

てしまっていた。

「くっ……！　配下を剣に化けさせ、手をかざしただけでそれを呼び寄せた……だと……!?」

バスティアンが戦慄している様子を見て、ネメシロはにやりと満足そうに笑った。

（軽い……！）

一方、剣を持ち上げたベルナは驚く。

彼女は、とりたてて腕力が強いわけではない。むしろ運動は苦手な方だ。

それなのにアマトルを持ち上げた彼女の手はほとんど重さを感じず、一度も剣を握ったことのない彼女の身体は、すんなりとそれを中段に構えることができた。

しかし今のベルナに、そんなことで余韻に浸っている暇はない。

『さあ、行くよ魔王様！　今のうちに……アマトルが、あいつを抹殺するんだ!!』

「ちょ、待、きゃあああっ！」

大剣に引っ張られる形で、ベルナはバスティアン目がけて突進する！

アマトルは意志を持った剣。

自分だけでは動けないため、持ち手こそ必要だが、一度誰かが手に取れば、後は持ち手の力量に関係なく、周囲に破壊と殺戮を撒き散らすことができる。

達人の放つ突きのような鋭さで、アマトルの刃はみるみるうちに王子に肉薄した。

ベルナの腕は大きく剣を振りかぶり――斜めに振り下ろす。

聖女の『光』の球を避け、切っ先が向かうはバスティアンの首。
（……にっ、逃げてください!!）
刃が王子の首に触れるその刹那、ベルナは声にならない叫びを発し、ぎゅっと目を瞑った。
「やったか!?」
ネメシロが叫ぶ。しかし。
「……馬鹿な奴だ、ベルナデット！」
聞こえたのは、怒りを孕ませたバスティアンの声。ベルナがそれに驚く間もなく――
「きゃああっ！」
アマトルの刃が触れる瞬間。
バスティアンの身体から、白く清らかな『光』が発せられた！
――一歩も動かず、ただ祈りを捧げているだけの、彼の身体から。
『うわあっ！』
音もなく、『光』はアマトル、そして彼を握るベルナを弾き飛ばす。
衝撃でアマトルは床に転がり、ベルナは尻もちをついた。
その彼女の傍に素早く近づき、ネメシロはまた舌打ちする。
「彼奴の『光』――やはり転生した今も、完全なものだったか。どこまでも忌々しい奴よ」
「ひ、『光』……？」

（聖女様の『光』は……こちらを攻撃するためだけのものではなく、聖女様の身を守るためのものでもあるということ――？）

「おおかた、先ほど我らの術を防いだのも……その『光』を用いたからだろう」

「ぐうっ……！　あいつ、まさか本当に力を使いこなしているなんて……！」

ネメシロの言葉を聞き、悔しそうに唸りながら、アマトルは人の姿に戻った。

ベルナは、こちらを睨み据えるバスティアンの姿を見ながら、童話の一節を思い出した。

――悪魔たちは、聖女様を捕まえようと襲いかかりました。

けれども不思議な光が守ってくれたので、聖女様は怪我ひとつしません――

（殿下は、本当に……本物の、聖女様の生まれ変わりなのね）

そう考えると、今まで以上にバスティアンが崇高な、神々しい輝きを放っているように思える。ベルナは、身じろぎ一つできなかった。

その時――

「ベルナデット、お前っ！」

バスティアンが叫んだ。

「配下だけではなく、自らも剣を取って襲いかかってくるとはな！　そこまでお前の……前世からの憎しみは強いというのか!?」

「え、あ……ああっ！」

言われてベルナははっと気付く。
確かにそうだ。アマトルに操られていたとはいえ、傍から見れば、さっき殿下に襲いかかったのは他でもないベルナ自身だ。
「あ、あううう……！」
（な、なんてことをしてしまったの、私！）
ベルナは慌てて訴えた。
「ちっ、違うんです……！　私はっ、殿下のお命を狙ってなど……」
「なっ！　今さら配下にすべてをなすりつけるつもりか、見苦しいぞ魔王!!　だいたいそんな顔で言われて、はいそうですかと信じられるとでも思っているのか！」
緊張のあまり口の端が引きつっていたせいで、不敵な表情だと勘違いされてしまったらしい。
（こ、このままでは……！）
このままではバスティアンの中で、ベルナは極悪魔王だと認定されてしまう！
いや、認定ついでに、魔王云々は関係なく指名手配されることになるかもしれない――この国の第二王子の暗殺を企てた一味の、首謀者として。もしそうなってしまったら。
（シャルトリューズ家は断絶、再興どころか、わ、私のせいで……!!　そんな、どうしましょう!?　父様、母様、兄様、ごめんなさい……！）
最悪の想像を重ね、ベルナは口元を引きつらせたまま、ガクガクと震え始めた。

「くそっ！　震えながら笑うとは、なんて奴だ！　そこまで嘲笑われて、黙っていられるか！」
バスティアンは吐き捨てた。その両手に『光』を最大限に漲らせて。
「いくらお前が魔王であっても――この国の臣民である以上、私が勝手に手をかけてよいものではないのではと……私は甘い考えを持っていた！　だがそれも……もうここまでだ！」
彼は改めて胸の十字架を諸手で握りしめ、祈りの体勢を取る。
「神よ！　……この魔物たちを打ち破る力を、どうか与え給え！」
彼の眼前の『光』の球が弾け、激しい閃光がバスティアンから放たれる！
溢れ出た『光』は、応接間の床、壁を伝い、この部屋全体を明るい清らかさで満たす。
ネメシロたちに傷つけられた床も壁も、その『光』によって浄化されていく。
みるみるうちに、応接間は元の姿を取り戻した。
（す、すごい……）
ベルナは息を呑む。
これが聖女の、神から授けられた真の力。魔の力を無効にするのだ。つまり。
「うっ……！」
光にあてられ、それまでベルナの両脇に立っていたウシュクとアマトルが膝をつく。
次いでそれまで後ろに控えていたネメシロも、がくりと体勢を崩した。ベルナも――
（あ、あら？　な、なぜかしら、急に気分が悪く……！）

こんなに綺麗な光なのに、浴びているだけで、魂を削られているかのように力が抜けていく。
「そうか。聖女の結界か……！」
「くやしい！　アマトルたちだって、本当なら、この程度……!!」
悔しそうなネメシロ、可愛らしい顔を憎悪に歪ませるアマトルに対し、バスティアンは言う。
「怨むなら、お前たちの運命を怨むことだな」
あくまで余裕ありげな口調だが、彼の顔には、汗の珠が浮いていた。
「……はぁあっ！」
バスティアンが一際大きく叫ぶ。その声に応じて、彼の眼前に突如、巨大な光球が現れた。
光球はまたもどんどん膨らみ、大きくなっていく。
今度は、ベルナたちを押し潰してしまいそうな勢いだ！
「おい、魔王！」
どうやら立ち上がることすらできないらしく、頭だけこちらに向けて、ネメシロが叫んだ。
「貴様がなんとかしろ！」
「え、えええっ!?」
「もはやこうなっては、貴様の力に賭けるしかない。死にたくなければ、死んだつもりで貴様の力を解き放ってみせろ！」
「そ、そんなこと言われても……！」

どうすればいいのかなど、わからない。だが戸惑ってばかりいる時間などないのだ。
「おっ、お願いです！　話し合いましょう！」
ベルナはバスティアンに訴えた。
「話し合うことなどない。お前、そうやって私の油断を誘うつもりだな!?」
バスティアンの心は、これまでの戦いのせいですっかり頑なになってしまっていた。
「そ、そうじゃないんですーっ！」
叫ぶベルナ。その間にも、『光』の球はどんどん大きくなっていく。
四天王たちは動けない。ベルナにもどうしようもない。
「これで……」
バスティアンは十字架を握りしめたまま、大きく腕を振り上げた。
「終わりだ！」
彼の振り下ろした手に合わせて、光球が迫る!!
ベルナは頭を抱え、しゃがみ込んだ。
しかしこうすることで、あの『光』から逃れられるはずもない。
光球が近づくだけで、彼女の髪はびりびりと震え、肌はちりちりと熱を感じている。
（あ、ああ、あ）
恐怖のあまりベルナは声も出ない。目を見開き、彼女を灼く聖なる光が迫るのを待つだけだ。

――もうどうしようもない、最期だ。
魔王軍は『聖女』バスティアンの手によって、完全に壊滅するのだ……！
（父様、母様、兄様……！）
ベルナが死を覚悟した――その時。

『――許さないで……』

突如、清らかな――鈴の音のような女性の声が、部屋に響いた。
瞬間、ベルナとバスティアンははっと面を上げる。
「今の声は！」
驚き、バスティアンは構えを解いた。
それと同時に彼の放とうとしていた『光』も、部屋全体を満たしていた『光』も消え失せる。
（ど、どなた……？　……いつか、どこかで聞いたことのあるような……）
天上より届いたようなその声の主を探し、二人は視線を巡らせる。
だがそんな人物は、どこにもいない。
ベルナは背後を顧みるが、四天王たちは倒れ伏したまま、皆一様に怪訝な顔をしている。
（あの声……四天王の皆さんには聞こえていないの？）

「……ちっ」

舌打ちし、バスティアンは辺りを見回すのをやめた。

その表情に僅かな驚きを滲ませたまま、バスティアンはベルナに質問する。

「今のはお前か？　お前を許すなということか？　……ああもちろん、許す気など毛頭ないが」

「ち、違います！　今の声、私の声ではありません！」

睨むバスティアンに、ベルナは急いで抗弁した。

事実ベルナの声は、どちらかというと低めだ。

先ほどの高い、いかにも女性らしい声とは、明らかに声質が違っている。

「だが……！」

口を開こうとしたバスティアン。けれどもその言葉は――

『決して、許さないで……』

再び謎の声に遮られる。二度目に聞こえたそれは、悲しみに震えていた。

それきり声はしんと静まる。しかし――

「これ、はっ……!?」

ぐらり、とバスティアンがよろめき、膝をつく。

「くっ」
彼は小さく呻いた後、激しい頭痛を堪えるように額に手をやった。
「……あの声は、一体……」
苦しそうに目を伏せたまま、彼は呟く。
全身の力が抜けてしまったのか、バスティアンはそのまましばらく動かない。
一方、やっと動けるようになったベルナは、ゆっくり立ち上がり、おずおず声をかけた。
「殿下、……だっ、大丈夫ですか？」
「うるさい」
びくっと身を竦めるベルナを置いて、彼は四天王たちに視線を向けた。
「今の術も、お前たちの仕業か……？」
「なんのことだ？」
「わたくしたちは何もしていませんよぉ。勝手にそっちが倒れたのではないですか」
ベルナと同じく、ようやく動けるようになったらしい四天王たちは、一様に否定する。
それをバスティアンは、射るような眼差しでじっと見据えた。
「……信用はしない。しかし……」
顔面は蒼白になっているが、口調は気丈なまま、彼はゆっくりと体勢を立て直す。
その表情は――一言で表現すれば、戸惑っていた。

自身の額に手をやったまま、バスティアンはベルナたちに言い放つ。
「……今日のところは、ここまでにしておいてやる」
「あれっ、逃げるのですか？」
「逃げる、のではない。見逃してやると言っているのだ」
ウシュクを睨みつけてから、だが、とバスティアンは言葉を繋ぐ。
「決してお前たちの好きにはさせん。……ひとまずこれ以上の追及はしないでおいてやる。しかし今後、もし何か悪事を働けば、その時こそ必ず私がお前たちを止める。忘れるな」
バスティアンはじりじりと後ずさった。
（お、お帰りなの……？）
突然のバスティアンの態度の変化に、ベルナは驚きを禁じ得ない。
（もしかしたら、あの声が原因で――――？）
今のベルナには理解できない。一方でネメシロは冷静に、彼に向かって言い放つ。
「貴様こそ。いずれ我らが貴様の息の根を止めるということを、ゆめゆめ忘れるなよ」
「言ってくれる。私の力に、手も足も出なかったくせにな」
立ち止まったバスティアンは、視点を動かす。
ベルナの目と、彼の青く澄んだ瞳とがかちりと合う。
「じゃあな。魔王ベルナデット」

彼はその目を鋭く光らせた。
「――次に会った時は、お前が死ぬ時だ」
「……！」
息を呑んだベルナを置いて、バスティアンは踵を返し、立ち去った。
その目に浮かんでいたのは、強い警告と、敵意。
（わ、私。殿下と、本当に――）
殺し合う運命になってしまった――
その重みに耐えきれなくなり、ベルナは、ぺたんと床にへたり込んでしまった。

足音が廊下を渡り、屋敷の正面扉が勢いよく閉じられる音が聞こえる。
「去ったか」
ネメシロがぽつりと言うと、アマトルがぱっとベルナの隣に行く。
「魔王様……大丈夫？」
心配そうに、悄然とした顔で問うアマトル。
へたり込み、俯いたベルナは、しかし、何も答えられない。
それをどう受け取ったのか、アマトルは叱られた子どもの表情で、必死にベルナに訴えた。

「魔王様……魔王様、ごめんなさい！　全然役に立てなくて……！　アマトル、本当なら、もっともっと強いはずなんだ！　それなのに、ここに……魔界の外に出たら、なぜか……」

「うーん、そうなんですよねえ」

とそこで、ウシュクが頬を掻きながら口を開く。

「普段のわたくしの力なら、さっきの戦いで建物の一つや二つ、簡単に消し飛んでると思うんですよね。なのに、聖女と戦っていることを差し引いても、本調子が出ないというか……」

「原因は」

ネメシロが鼻を鳴らしながら言った。

「かつての聖女の張った結界だな。あれはおそらく、我々を内側に閉じ込めるだけでなく、外側にも力を及ぼしているのだろう。見えないながらもこの人間の世界に影響し、我らの力を自動的に弱めているのだ。人間たちを魔から守るために、な――ちっ、忌々しい話だ」

でなければ、彼ら四天王の手によって、この世界はとっくに大変なことになっていただろう。彼らは恐ろしい能力を持った魔物なのだ。もしその力が千年前のままならば、ベルナの覚醒を待つまでもない。

魔王に頼らずとも、聖女の手の届かない、どこか遠いところで破壊の限りを尽くし、この世界に自分たちの勢力を広げていくことくらい、わけないはずなのだ。

しかし、今の彼らには、それほどの力はない。

ただの人間にとっては脅威的な力を持っていても、元より『天敵』である聖女に対し、打撃を与えるほどの力は持っていないのだ。

「そっ、そんな！　それじゃアマトルたち、このまま何もできないの!?」

「落ち着け。貴様、あの『計画』を忘れたか？」

ネメシロにじろりと睨まれるアマトル。

しばし彼はきょとんとし、それからやや時を置いて、ぱっと嬉しそうに笑った。

「そっ……そうか、そうだったね！　魔王様っ、安心してね！」

「そうですねえ！　とりあえずアレをなんとかするのが、先決のようですね！」

何事か言いながら、ウシュクもぽんと手を叩く。

アマトルははしゃぎながら、ベルナを励ました。

「魔王様、きっとなんとかしてあげるからね！　だからアマトルのこと……」

「うむ、そうだ。まず我らに必要なのは――――」

講釈を垂れようとしたネメシロ。

だがベルナが俯いたままであることに気付き、はたと眉をひそめる。

「おい魔王。聞いているのか？」

「魔王、様……？」

「っ……!!」

ベルナは――そこで、勢いよく立ち上がった。
彼女の背を撫でようとしていたアマトルが、びくりと手を引っ込める。
それに気付かないまま、ベルナは叫んだ。
「――かっ、帰ってください!!」
こちらを向いた彼女は目を真っ赤に泣き腫らし、今もぽたぽたと涙を零している。
その一言に、はっと息を呑んだアマトルだけでなく、ウシュクもまたぽかんと口を開ける。
ネメシロは眉間に寄せた皺を深くし、ベルナに詰問する。
「貴様、何を言う！　契約を破棄すれば心臓を貰うと言ったはずだ、今さら泣き言は……」
「しっ、心臓なら！」
ベルナは胸を叩いた。
「心臓なら、もっ、持って行ってもいいです！　もっ、もう私は、どうなってもいいですから！」
しゃくり上げながら、摑みかかるようにベルナが詰め寄り、ネメシロは思わず数歩退く。
「こっ、これ、これ以上……殿下にっ、誰かに迷惑をかけるのを、やっ、やめてください！　私、もう、いっ……嫌です！　魔王なんて、やりたくありませんっ……!!」
「魔王様……！」
アマトルの無機質な瞳が、ぶるぶると揺れている。

（私もう嫌……！　これ以上耐えられない!!）

しゃくり上げながら、ベルナは涙を手の甲で拭った。

涙の塩が、『聖女』によってつけられた彼女の火傷を灼く。

その痛みが、ベルナの恐怖をさらに煽った。

（殿下と……誰かと敵対しながら生きるのも！　魔王になるのも！　……誤解されたままで生きることも、もうっ、我慢できない……!!）

これまで感じてきた不安と鬱屈、恐れが、涙となって溢れ出る。

去り際のバスティアンの言動は、ベルナの感情の均衡を崩すのに十分な重さを持っていた。

ショックで頭が揺さぶられ、彼女はとても冷静にはなれなかった。

（きっと、わ、私の今の泣き顔を見ても……）

ぐすっ、と涙で歪んだ視界では、四天王たちの表情もはっきりと見えない。

（世の中の人は、私のこと、ま、魔王っぽいと言うだけなんだわ……!!）

そう思うと、余計に何もかもが嫌に思えた。

「う……」

ベルナはくっと俯いた。そして――――

「うわあああああん!!」

彼女は応接間を駆け出し、廊下を走った。
そして廊下の奥にある物置部屋に入ると、ばたんと閉じこもってしまった。

「あ、ああ……」
応接間に取り残された四天王たちの中で、アマトルだけが、悲しそうにしゃがみ込んだ。
その目には涙がじわりと滲み、細い手足は震えている。
「魔王様、怒ってるんだ……アマトルたちが、弱すぎるから」
「違いますよぉ、アマトル殿！」
呆然と言う彼の肩に、ウシュクがぽんと手を置く。
「あれは『やけっぱち』とかいうやつです、たぶん。前に見たことがあります。それにしても、陛下もあんなに体液を無駄にしなくてもいいと思うんですけどねぇ」
あまり深刻そうでない口調のウシュクの隣で、ネメシロは苛立った様子である。
「ちっ、我の言に逆らいおって！」
彼はガンと鉤爪の足で床を蹴った。
「これだからあの年頃の小娘は手に負えぬのだ！　……狙って彼奴を女に転生させたというなら、神もなかなか侮れぬな……」

「どうするんですかぁー、ネメシロ殿？　本気で陛下の心臓、今すぐいただくおつもりで？」
「馬鹿者。この千年間を、我らがいかに雌伏し過ごしたか……貴様も忘れたわけではあるまい」
フンと鼻を鳴らし、ネメシロはウシュクとアマトルに言う。
「こうなっては、我らも意地だ。まずはなんとしても情報を集め、例のものを探し出さねばな。ウシュク、貴様は明日からこの近辺の見回りをせよ。遠方は我が引き受ける」
「はいっ！」
ぴしっとウシュクが敬礼する。
「アマトル、いちいち魔王の言動に反応するな。記憶を失っている奴に、何を言っても無駄だ」
「でっ、でもアマトルは！」
ネメシロに反論しようと、彼はぱっと立ち上がる。だが彼は、続きを告げられない。
「アマトルは、魔王様に……」
「ふん、主が主なら、配下も配下だな」
そう言って彼は部屋の外に歩を進める。
やりとりを不思議そうに見つめているウシュクも、それに続く。
「……いいかアマトル」
俯いたままの魔剣の化身をちらりと見やり、歩を止め、黒い魔神は言う。
「我らの目的を忘れるな。目的が果たされた時こそ、貴様の願いも果たされる時だ。……貴様

には魔王の監視を命じる。せいぜい奴の傍に侍っているがいい」
彼はそう言って出て行った。それは慰めだったのだろうか。
けれどもアマトルは、同志二人が去って行った後も、ぽつりとそこに佇んだままだった。
「アマトル、は……」
細い指が、己の胸の石を――三日月型の石を、そっと撫でる。
「ただ、魔王様に、誉めて欲しくて……！」
そう呟き、彼はがりっと石に爪を立てた。
「ちくしょう！」
アマトルは吐き捨てる。――しかしその言葉を聞く者は誰一人、いなかった。

第三章　偉大なる帰還

「……。なるほど、この書にも記述はなし、か」

広々とした王宮の図書室。

蒐集された書物がところ狭しと収められたその場所に、バスティアンの声だけが響いていた。

うららかな陽光が室内に燦々と降り注ぎ、彼の淡い黄金の髪を煌めかせている。

――聖誕祭の夜が明けて数日後のこと。

あの夜以来、バスティアンは政務を終えた午後の時間を、図書室で過ごすようになっていた。

千年前の事実――魔王と聖女の戦いについての、歴史的事実を探るためである。

そのために彼はフォルキデ王国を中心とした諸国の千年前の歴史を、手当たり次第に調べていた。……しかし。

（少しでもそれらしい記述があるか、と踏んでいたが）

彼はふうと息を吐く。

（どこにもないな。自然災害だったという形ででも、歴史に残っているのではないかと思っていたのだが……）

そう。歴史には、何も記されていなかったのである。魔王がもたらした災厄も、聖女との戦いも、それを示唆するような内容も。

それどころか、不思議なことに――王国歴七九八年から八〇六年までの期間には、フォルキデを含めた諸国の歴史上で、何も起こっていなかったとされていた。

その期間だけまるで抜け落ちたかのように、一切記述がないのである。年表も空白だ。

歴史家たちの中には、「何もない」この期間を『虚無の八年』と呼ぶ者もいるらしい。

（だがこれは……特筆すべきことが何もなかった、のではないな。残せなかったんだろう）

魔王の軍勢に襲われ、記録を残すどころではなかったのか。

それとも残していた記録が、不都合なものとして消されてしまったのか。

いずれにせよ「何もない」ことが、逆にこの期間に「何かあった」ことを証明している――と、バスティアンは考えた。

（これである意味、確証は得られたな。しかし――）

閲覧室の椅子に腰かけた彼は、ぱたんと手にしていた本を閉じた。

（私が知りたいのは、事実の裏付け以外に、もう一つ）

バスティアンは瞳を閉じる。

思い出すのは、あの聖誕祭の夜。王宮の庭で、ベルナデットと対面した時のこと。
啓示に従い、彼は彼女の手を取り、『光』で彼女を灼いた。
あの時ふと胸に浮かんだのは――――曰く言いがたい違和感だった。
次いで彼女の邸宅で戦闘した時に聞こえた、女性の声――――
聞いただけでバスティアンの戦う意志を削いだ、あの悲しげな声の正体は、一体。
(私が聖堂で聞いた、あの神託とは別の声だった……千年前の聖女と魔王についての歴史的記述を発見できれば、疑問を解く手がかりになるのではないかと思ったのだが)
おとぎ話の記述によれば、聖女は「お姫様」だったらしい。
もし本当にそうなら、どこの国かはわからないが、千年前の聖女は王族だったということだ。
ならば諸国の王家の家系図を探れば、それらしい人物が見つかるかもしれない――と思っていたのだが、うまくいかなかった。
(……私に宿った力が、神から授けられたものなら、私はそれを人々のために使いたい。それは、揺らがない)
今日もまた胸に下げている十字架を手で握り、彼は考える。
(だが前に進むには――決意を得るためには、どうしても私は……)
彼の思考がそこまで及んだ、その時。
「失礼いたします、殿下」

図書室の扉の向こうから声がする。
「……ああ、はい。どうぞ」
途端にバスティアンは、本を睨んでいた鋭い顔から、柔和な「王子」としての顔に戻る。
彼が穏やかに返事をすると扉が開き、現れたのは侍従長だった。
老齢の彼は額の汗を拭ってから、恭しくバスティアンにお辞儀をする。
「殿下、国王陛下がお呼びでございます。その……」
「どうかしましたか？」
侍従長は一瞬言いづらそうに口をまごつかせ、それから話した。
「第一王子……アルベール殿下が、凱旋なさるとのことで……ございます」
「！　兄上が……」
バスティアンの目に警戒の色がちらりと走った。
「……わかりました。では、すぐに参ります」
瞬時に温厚な顔を取り戻し返事をしたバスティアンに、侍従長は安心した様子で下がった。
「そうか」
バスティアンは席を立つ。
「兄上は無事にご帰還、か。本来なら、何よりも喜ばしいことのはずなのだがな」
呟く彼は、憂い顔だ。本を書庫に戻すと、彼は図書室を出た。

——翌日の王宮。

フォルキデ王家の紋章を染め抜いたタペストリーが掛けられた、玉座の間にて。

「国王陛下。ベリス方面軍司令官、アルベール・レインダール・ド・フォルキデ、ただ今帰還いたしました」

「おお！　おお、アルベールよ！　よく戻ってきたな」

跪き、軍人としての挨拶を終えた息子に対し、正装した初老の国王は相好を崩し駆け寄った。

「……父上も、ご健勝のご様子、何よりです」

立ち上がり、今度は息子としての挨拶をするアルベールは、ほんの僅かに口元を歪めていた。

これが彼にとっての最上級の「微笑み」だ。

バスティアンは少し離れたところから、大臣をはじめとした多くの重臣たちと共に、兄と父の様子をじっと見ていた。

フォルキデ王国第一王子・アルベールは、威容と厳格さ、そして軍事的手腕で知られている。

バスティアンより四歳年長の彼は、眼前の父王を見下ろすほどの上背と、軍服のよく似合う頑健な体格を持っていた。

肩まで伸びた黒髪は、髪と同じ色の瞳から放たれる鋭い眼差しと、通った鼻筋とがあいまっ

て、見る者に漆黒の獅子を連想させる。
何より印象深いのが、無数の古傷を刻んだ肌である。
その傷跡は、彼が軍に所属しているということだけでは説明できないほどの数だった。
特に――顔面の真ん中に刻まれた、巨大な傷跡。
王と謁見する兄の顔に、かつて見たのと同じ、右上から左下に向かって斜めに走る古傷の跡を確認して、バスティアンは密かに眉をしかめていた。
「お前の活躍は、既に聞いておる。よくぞ勝って帰って参ったな！　お前はわしの誇りだ」
「……いえ。常に私につき従ってきた、十二万の将兵の労あってこそです」
抑揚なく語るアルベール。彼の口から放たれる声は、古い弦楽器のような響きを持つ。
今回彼の率いた方面軍の勝利によって、フォルキデ王国は長らく悩まされていた、南のベリス半島の領有権を巡る隣国との問題に終止符を打った形になる。
この問題が新王家の嫡子の手で解決したことによって、フォルキデ新王政は、周辺諸国に力を示す結果となった。
革命の前後、混乱に乗じてフォルキデの領土を奪おうとする国との小競り合いが国境で続いていたが、もはやそれも徐々に終息していくことだろう。
アルベール殿下の成功を謗る者は、一人もいなかった。――少なくとも、この場には。
「ところで――」

と、アルベールはふいに視線を巡らせた。
居並ぶ重臣たちの中にバスティアンの姿を見つけ、彼の目は一瞬止まる。
その瞬間――アルベールの無表情な瞳に一瞬だけ、別の色が浮かんだように見えた。
だがそれに対しバスティアンが声をあげるよりも早く、彼の視点は移動する。
「あ、ああ、アルベールよ」
国王は少し焦った声で言った。
「その、セレスタンは、お前の末の弟はだな、ちょうどルグドゥーヌ地方まで慰問に行っておってな。それであの、あれは……」
「母上は」
アルベールの視線が、国王を射る。
「母上は、またご病気ですか」
「え、ああ、うむ……そうだ」
「そうですか。……一刻も早くご全快なさいますように」
煮え切らない父の態度を当然のことのように受け止めると、彼は一歩下がり、深く一礼した。
「父上。申し訳ありませんが、これより軍務省に顔を出さねばなりません。お話はまた後ほど」
「お、おおそうか。うむ、励んでくるがよい」
父の労いに、アルベールは再び深く礼をして――それから、つけ加えて言った。

「退出する前に、父上に贈り物がございます。どうぞ、お受け取りください」
アルベールが後ろに小さく合図をすると、幾人かの軍人が、一抱えもある木製の箱と、台座を運んできた。台座の上に恭しく置かれた木箱に、王は期待の籠もった眼差しを送る。
そして箱の中身が顔を出すよりも早くに、アルベールは踵を返し、玉座の間から立ち去ろうとしていた。
バスティアンはそれを見つけると、素早く動く。
「……兄上！」
アルベールの足が部屋を出る直前、バスティアンは彼の前に躍り出た。
「兄上、凱旋おめでとうございます。市民たちも、安心して暮らせるようになりましょう」
深く頭を下げ、微笑みと共に賛辞を述べる弟を見るアルベールは――まるで無感情だった。
峻厳さを貼り付けた面でも被っているかのように、彼の顔にはなんの動きもない。
「……お前こそ、ご苦労だったな」
ややあってから放たれた一言にバスティアンが少し首を傾げると、兄は続けて言った。
「薄っぺらな交流と歓談で茶を濁し、佞言で欺瞞を塗り固める仕事だ」
社交の場を皮肉って、彼は目をごく僅かに細める。
「俺の仕事に比べれば、さぞ、骨が折れることだろう」
「兄上……」

「失せろ。……俺に近づくな」
アルベールが放った最後の一言は、囁くような小声だったが、しかし、バスティアンの耳には確かに届いた。
言うなり靴を鳴らして去って行く兄の姿を見て、なお、バスティアンは対外的な柔和な表情を崩さずにいた。
（やはり……そうか）
心の中で、彼はそっと呟く。
（許しては、もらえない……か）
バスティアンの表情が崩れ、その目に陰が走った。
と、その時。
「お、おおお！　これは!!」
背後で国王の、そして重臣たちの歓声があがる。バスティアンは振り返り、そして――
「なっ……！」
目に飛び込んできた『贈り物』を見た瞬間――彼の背筋を、うすら寒い何かが駆け抜けた。

「うわあ、このおはなさん、いいにおいね、とうさま！」
『そうだねベルナ。それに、とても綺麗だ』
――ベルナの目に映るのは、真っ白な大輪の薔薇。
辺りに漂う甘い香りと、大好きな父に抱き上げられているのが嬉しくて、ベルナはご機嫌だ。
にこにこしている彼女の耳に、父より年長の貴族たちの話し声が届く。
『ほう、これがミロン男爵が資金提供なさった、新種の薔薇ですかな。名前はなんと？』
『はあ。男爵は〝聖女の微笑み〟、と名付けるつもりだと仰ってましたな』
『聖女の微笑みぃ？　聖女というと、ははっ、おとぎ話から採ったのですかな』
『ははははっ、どうも前時代的だな。陳腐というか、新奇性に欠ける』
『だいたい男爵は――』
背後での会話が、この新種の薔薇を開発した男爵に対する悪口に切り替わる。
それを聞いて、ベルナの父の顔は不愉快そうに歪んだ。子どもに聞かせたい話ではない。
『……ベルナ、そろそろ向こうの薔薇さんも見てみないかい？』
「まって、とうさま」

ベルナはそう言って、そっと目の前の薔薇に、包み込むように触れながら言った。
「とうさま、このおはなさんのなまえ……せいじょのほほえみ、って、おもしろいなまえなの？」
『ん？　どういうことだい、ベルナ？』
「だって、うしろのおじさまたち、わらってらしたから……」
彼女の言葉を聞いた背後の貴族たちは、不機嫌な顔になる。だがベルナは声を張り上げた。
「せいじょさまはすてきだわ！　……だから、このおはなさんも、すてきなのよ！」
むくれるベルナに、父は少し困り顔だ。でもベルナは、素直な感想を言っただけだ。
聖女様は、怖くて悪い魔王をやっつけた、勇敢で素敵な、ベルナの大好きな人物なのだ。
そんな彼女の名前を貰ったことが、どうして面白いことになるのだろう？
そう思うと心の中でむずむずした感情が湧き上がるのだが、まだ三歳のベルナには、うまく言葉にできなかった。
聖女様は――聖女は、ベルナの……ベルナの、なんだというのか？
ベルナが、口をもごもごさせたその時――
『……っ!?』
『う、うわあああ！』
父が息を呑み、次いで背後の貴族たちが悲鳴をあげるのが聞こえた。

「え……？」

ベルナは両手で優しく触れていた薔薇に目を向ける。

純白に輝いてすら見えた薔薇は――――見るも無残に、茶色く枯れていた。

『あ、悪魔だ！　悪魔の仕業だぁあ！』

突然枯れた薔薇が、自分に向けられた大声が、怖くなってベルナは泣きだしてしまった。

『ばっ、薔薇がどんどん枯れていく！』

『シャルトリューズ伯！　おっ、お宅のご令嬢は、一体……!?』

『落ち着いてください！　大きな声を出さないで！』

それからの大騒ぎは、よく覚えていない。

ただ彼女は、あの真っ白な薔薇のことを、綺麗だと思っただけなのだ――――

「……はっ！」

がばっ、とベルナはベッドから身を起こした。

その瞬間、聖堂の塔から鐘の音が響く。

今は朝の七時だ。今まで見ていたのは、夢だったのだ。

（あれは……私が、薔薇を枯らせてしまった時の記憶、かしら）

半身だけ起こした状態で、ベルナはぼうっと考えた。こんな夢を見たのは、初めてだ。

「枯れてしまった原因は、今もわからないけれど」

彼女はひとりごちた。

「あれはもしかして、私の中の魔王の力が……？」

魔王の力が、なんらかの原因で発動して、薔薇を枯らせてしまったのだろうか。

まさか、とも思う。まだ自分自身が魔王の転生体だと、本気で信じているわけではない。できれば何かの間違いであって欲しいと、今も思っている。だが――

「……！　治ってる!?」

ふと自身の手を見て、ベルナは愕然とする。

数日前――あの聖誕祭の夜にバスティアンの『光』で灼かれ、つけられた大きな火傷が、綺麗さっぱり消えていたのである。

（そ、そういえば昨日の夜には、もうほとんど痛まなくなっていたけれど）

普通あれだけの傷は、そう早く治らない。それが、ほんの数日で癒えてしまうということは。

（やはり私には、魔王の力が備わっている……のかしら……！）

疑念が、むくむく確信へ変化する。恐怖を振り払おうと、彼女はぷるぷる頭を振った。

（もし、もしもだけれど、三歳の時の事件が、私に宿る魔王の力のせいで起こったんだとしたら……父様と母様には、とても迷惑をかけてしまったわ）

それに今も、と彼女は考える。

（あの日、私がはしたなく騒いでしまって以来、四天王の方々が……特にネメシロさんが、どこか冷ややかだし……）

ベルナはうなだれ、数日前のことを思い返した。

物置部屋に閉じこもり、しばらくして落ち着きを取り戻して、そっと外に出た時には、廊下で彼女を待っていたのはアマトルだけだった。

その彼も、どこかこちらの機嫌を窺うような、不穏な雰囲気を纏っていた。

――今のベルナはもう、あの時のように捨て鉢な気分ではない。

しかし、あれ以来四天王たちはベルナにつかず離れず、何も言わず、現れたり消えたりを繰り返している。真意がまったく読めないのだ。

（私が本当に魔王なら、これから、うまくやっていけるのかしら……）

ベルナはどよんと俯いた。だが。

（いえ、そんなことばかり考えていても駄目ね。着替えましょう）

思い直し、彼女はベッドを降りる。

しかしその肩はなんだか重く、前途は依然閉ざされたままのように感じていた。

「い、いただきます」
着替え終わったベルナは、がらんとした食堂のテーブルについていた。
目の下の隈も色濃く、もそもそとガチガチのパンを食べつつ、ベルナは思わずため息をつく。
「どうしたの、魔王様!?　何か悲しいことがあったの？」
彼女のため息の音を聞きつけ、それまでテーブルのスプーンをいじって遊んでいたアマトルが、ぱっと傍まで駆けつける。
聖誕祭の夜には落ち込んでいた様子の彼だったが、今はもうかなりその様子は薄れ、こうしてよくベルナの隣に来てくれる。
彼の心配そうな眼差しに、ベルナは、弱々しい（ニタリとした）微笑みを返した。
「あ、いえ、大丈夫、なのですが……」
「どうした、さっさと食え。食わねば動けぬのだろう？　まったく、人間とは不便なものだ」
今朝も窓辺に座るネメシロは、その指に止まった茶色い小鳥をじっと見つめたままで言う。
小鳥はさえずることもなく、大人しく彼の指の上で首を傾げていた。
「あ……あのう、ネメシロさん」
なんだかのどかな光景だわ――などとも思いつつ、ベルナはそっと打ち明ける。

「じっ、実はですね。私の手の傷が……殿下につけられた傷が、今朝見たら全部治っていて」
彼女がそう言うと、ネメシロは一瞬ぴくりとベルナに目を向ける。
が、ややあってから彼はすぐさま視線を元に戻した。彼の指から、小鳥が飛び立つ。
「……ほう、そうか。それで？」
「え？　あ、あの……それで私、やはり自分に魔王の力が宿っていると、その、はっきりわかったというか」
「ええっ！」
横でアマトルが嬉しそうに声をあげた。
「魔王様、やっとわかってくれたの!?　やっとアマトルを信じてくれたんだね！」
「え、あ……！」
ベルナの手を取り、アマトルはにこにこ顔のままぴょんぴょん飛び跳ねる。
「魔王様、魔王様っ！　それならきっと、すぐに力が目覚めるよ！　まずは自覚することが大事だって、ネメシロ様も言ってたもの！　ねえ、ネメシロ様！」
「さてな」
そっけなく答えた魔神は、窓枠に腰かけたままベルナたちに背を向け、両手を広げる。
その広げた指に、様々な種類の小鳥たちが一斉に止まりにきた。
「もう……ネメシロ様、ああして情報集めてばっかりなんだから」

「え？　情報？」
「あっ、なんでもない！」
少し慌てた様子で、アマトルはぱっとベルナの手を離す。
次いで彼は胸を張りながら言った。
「心配いらないよ、魔王様。力が目覚めれば、ネメシロ様だって、あんな言い方しなくなるよ！」
「だといいがな」
ネメシロが鼻を鳴らすと、鳥たちは一斉に空高く飛び立った。
アマトルはそれを見て少し口を尖らせると、ベルナに明るく告げる。
「さあ、ご飯を食べて！　アマトルは、いつだって応援してるんだからね！」
「は、はい……あっ、ありがとうございます」
ベルナが感謝すると、少年はにこっと微笑み――次いで、どこか物足りなさそうな顔をした。
「え？　あ、あの、どうかされました……？」
「ん？　んとねー……えへ、内緒！」
しかしアマトルは、そう言って口を閉ざす。
首を傾げつつ、ベルナがちぎったパンを噛みしめたその時――勢いよく、ドアが開いた。
「はぁーい、ただ今帰りましたー!!」

どかどかと食堂に入って来たのは、相変わらず無駄に元気なウシュクである。
彼はその手に、何やら大きな包みを持っている。
「戻ったか。見回りの成果はあったか」
ネメシロに向かってびっと親指を立ててから、ウシュクはベルナに慇懃に一礼した。
「陛下、おはようございます！　外を見回って参りましたが、ニンゲンどもが間抜け面で蠢いている他は、異常ありませんでした。陛下に仇なそうとする不埒者の姿もありませんでしたよ」
「そ、そうですか」
（わ、私を狙うような方も、いないと思うけれど……）
しかし恭しく頭を下げているウシュクを見ると、お礼を言わないのは失礼という気分になる。
「あ……ありがとうございます」
「問題ありません、陛下！　今のひょろっちい陛下が、かつてのひょろっちくない陛下に戻る日まで、御身をお守りするのがわたくしの使命ですからね！」
快活に笑うウシュクの言葉は他意が籠もっていないぶん、なんだかベルナの心に突き刺さる。
「むう……」
そんなベルナとウシュクを見ながら、何事かアマトルは唸る。
「え？　なんと仰ったのですか、アマトルさん」
「ん、あのね。昔は見回りも大変だったんだよ。魔王様の命を狙う人間は、たくさんいたから」

アマトルの言葉に、ウシュクはあははと笑いながら頭を掻いた。
「ああ、そうでしたねぇ。勇者を志す者や、天界から使命を受けた戦士が一人もいないなんて、いい時代になったものですよ!!」
「そ、そうですね……」
なんと答えてよいかわからず、とりあえずベルナは彼に同意した。
「と、ところでその包みは……？」
「はい。これは貢物です！　魔王陛下に対しての」
「えっ……わ、私に？」
ウシュクから渡された包みを、ベルナはそっとテーブルの上に広げる。出てきたのは――
「こ、これは、おっ、お肉……!!」
「はい！　動物の死肉です！」
大きな骨付きハムの塊だった。
「他にも、練った小麦の粉を焼いたものとか、牛の乳を発酵させたものとか、色々あります」
と言いつつ、ウシュクはふわふわのパンとチーズをベルナの前に並べた。
ベルナは目を輝かせてそれらを見つめ――次いで、はっと息を呑む。
「あっ、もしかしてこれ……まさか！」
「恐れるな。人間から奪ったものではない」

青ざめるベルナに、ネメシロは言う。
「我らが問題を起こし、お前に疑いがかかるようなことがあれば、面倒なことになるのでな。聖女の結界を消失させるまで、人間どもには束の間の平穏をくれてやっているというわけだ」
「はい。ですからわたくし、いくらニンゲンがいようと、決してぶち殺しなどしませんとも！」
ウシュクは胸を張る。
「見回り中に、女のニンゲンが多数呼び止めてきまして。こちらが何もしないうちから、勝手に色々と渡してきたのですよ！　この塩漬け肉は、この建物の隣に住む老婆からのものです」
「ええっ、あのお婆さんから!?　……とても節約家な方なのに……」
ベルナの言う「とても節約家」は、一般で言うところの「どケチ」に相当する。
主人の驚きの言葉に、ウシュクはふふんと得意げな表情を浮かべた。
「きっと『これをやるから命だけは見逃してくれ』という醜い悪あがきなのでしょうね！　わたくし、千年前にそんな輩は大勢見てきました」
「……我ら魔の眷族は、人間を惹きつける姿に化けるものだ。特にウシュクは種族の特性上、魅了の力を持っている。勝手に言い寄られることもあるだろう」
澄ました顔で、ネメシロが訂正した。
「さあ陛下、お召し上がりください！　元気をつけて、次こそは聖女を抹殺しましょうね！」
「え、ええ！　……あ、いえ、抹殺のことは違うけれど……とにかく」

ベルナはいそいそとハムを切り分けた。
「いただきます！」
いつにないがっつきで、ベルナはムシャムシャとハムを口いっぱいに頬張った。
肉は彼女の大好物だ。でも貧乏になって以来、めったに食べられない。
こうして口に運ぶのは、一体いつ以来だろう。
ここ最近のベルナが食べられるのは、決まって格安で取引される動物の臓物だけだったのだ。
ふくよかな肉の旨味とほどよい塩味。
噛むごとにそれらが頭の中を駆け巡る感覚は、夢のような心地よさでベルナを楽しませた。
「クックック……美味しい……フフ、アーッハッハッハ!!」
無我夢中のベルナは、つい大笑いしてしまう。
本来は、食事中に爆笑するなんて無礼なことはしない彼女だが、今ばかりは特別だった。
「魔王様嬉しそう！　いいなあ、アマトルも食事ができる身体だったらよかったのにな」
頬をベルナに寄せ、残念そうに言うアマトルを、ベルナはふと可愛いと思った。だが――
（あっ……！　そうだわ。皆さんがお揃いの今こそ、私の気持ち、お話ししなくては！）
ベルナははたと我に返った。彼女の食事が――不意に、止まる。
「あれ？　魔王様、どうしたの？　食べないの？」
「い、いえ。あの……」

「もしや、毒でも入っていたのですか!?　それならわたくしが今すぐ水の力で胃洗浄を」
「い、いえ！　そうではなく！」
今にも術を使おうとしていたウシュクをとどめ、彼女は恐る恐る言った。
「あの、その……わ、私、皆さんに感謝しているんです」
「魔王様……？」
ぽつぽつと語るベルナを、四天王たちはじっと見やる。
ベルナは怯えながらもどこか気恥ずかしそうに、胸の内を述べた。
「えと、皆さんは私を助けてくださいましたし……お陰さまで、こうして美味しいご飯も食べられますし……本当に感謝しています。だから、あの、この前は……取り乱してしまって、申し訳ありませんでした。……ありがとうございます」
ぺこりと彼女が頭を下げると、アマトルの笑顔がぱっと輝く。
「あ、あの、でもっ！」
ベルナは面を上げ、必死に言った。
「でも、わっ、私、やっぱり魔王なんて無理だと思います！　確かに力はあるのかもしれませんけれど、全然使えないというか……使える自信がない、というか」
「魔王様、そんな……」
「うむむう」

表情を曇らせたアマトルの隣で、ウシュクはとぼけた顔のまま、ネメシロをちらりと見やる。
「……そうか」
と、やがてネメシロは重々しく言った。
「貴様の気持ちはわかった。貴様は、魔王などできぬというのだな」
彼の凍てつくような視線が、ベルナを射る。
（やっぱり、心臓を貰う、と仰るのかしら……！）
ネメシロの次の言葉を、ベルナは死刑宣告を聞く心地で待った。しかし――
「うむ。それならば仕方がない」
そう言って、ネメシロはこほんと咳をした。
「では、やはり我らは魔界に帰ることにしよう」
「……え？」
耳に届いた言葉がしばらく理解できず、ベルナは思考をさまよわせ――
「えぇえええええっ!?」
驚いて思わず叫んだ。
「貴様、うるさいぞ。大声を出すな、やかましい」
「す、すみません。でも……」
ベルナは目をぱちぱちさせてから、彼らをじっと見た。

眉間に皺を寄せたネメシロ、ぼんやりした顔のウシュク、そしてどこか元気のなくなったままのアマトルの表情からは、何も読みとることができない。

（……ひょっとして）

ベルナはおずおずと尋ねた。

「あ、あのう……わ、私に愛想が尽きた、ということですか？」

「馬鹿者。そんなことが理由になるのなら、とっくのとうに帰っておるわ！」

「ああっ、違うよ魔王様！　アマトルは、そんなふうに思っていないからね！」

「そうですよう。いくら惰弱で脆弱でひ弱そうな外見でも、魔王陛下は魔王陛下だと、このウシュクめは強く思っておりますよ」

フォローにならないフォローを聞いて、ベルナはがっくりうなだれた。

ともあれ、彼女が問題なのではないようだ。

「あの聖女めの襲撃以来、我らで話し合ったのだが……やはり聖女に抗するためには、しばし時が必要なのではないかということになってな」

ネメシロは目を伏せながら言った。

「一旦魔界に戻り、好機を待つ。我らが魔界に戻り、姿を見せなくなったとなれば、聖女の奴めも油断するだろうからな。それで、一時我らは貴様の元から去ることを決めたのだ」

「そ、そうですか……」

ベルナは複雑な気持ちでそれを聞いた。
彼らが帰ってしまうというのを聞いて、正直なところ、ベルナは嬉しかった。
四天王たちがいなくなるというのは、ベルナにとっては、この抑圧された環境から解放されることを意味するからだ。怯える必要もなくなるし、殿下と敵対しなくて済むかもしれない。
さらに言うと、魔王復活の日が遠くなるという意味で、世界に平和が訪れるということでもあるのだ。だがそれと共に、彼らがいなくなるのは、誰もいない寂しい生活の再来でもある。
そう思うと、少し悲しい。
（……でも）
やっぱり、嬉しい気持ちの方が強いかもしれない。と、ベルナは思った。
「……ニヤけおって。まったく……」
ネメシロが忌々しそうに呟き、ベルナは慌てて表情を引き締める。
アマトルだけが、ネメシロとベルナの表情を交互に見て、不安そうにしていた。
「ともかく、ベルナデット・ド・シャルトリューズよ。我らは魔界に帰ることにした」
「わ、わかりました」
彼らの急激な心変わりの理由自体は、よくわからない。
だが、どちらにせよベルナの平穏な日常が戻ってくることは間違いない。
「あ、あの」

彼女は、深々と頭を下げながら言った。
「その、い、今まで本当にお世話に……」
「――だが!!」
と、ネメシロは突然声をあげた。びくりと背中を揺らしたベルナは、慌てて頭を上げる。
「我らには心残りが――ただ一つ、心残りがある。それは、此奴のことだ」
言われて一歩前に踏み出したのは、アマトルだった。
彼は胸元の三日月型の石をいじりながら、やや俯きがちにしている。
「……あ、アマトルさんのこと、ですか？」
「そうだ。実は此奴は――千年前から、この人間界で探しているものがあってな。アマトル、説明してやれ」
「うん。……あのね、実はね、魔王様。アマトル、この世界に……忘れ物があるんだ」
忘れ物？
突然飛び出した言葉に、ベルナが目をぱちぱちさせていると、アマトルは続けて語りだす。
「千年前、魔王様と一緒に、戦った時にね。アマトル、聖女の『光』のせいで、身体の一部が壊れてしまったんだ。一部というか……ここ、なんだけれど」
そう言って彼は、今まで指先でいじっていた胸元の石を指さす。
ベルナは彼が指す先を、じっとよく見てみた。

彼の持つ紫色の石は、三日月型に意図的にカットされているものだとベルナは考えていた。
だがよく見ればそれは、若干いびつな形をしていた。
まるで元々は球だったものの一部が、丸く抉られ、欠けてしまったかのような――
「聖女の『光』が柄に命中した時に、宝玉が割れて、欠片が飛んで行ってしまったの。それからすぐにアマトルたちは聖女の結界に押しやられて、魔界に行ってしまったから、失くした欠片がどこに行ったのか、ずっとわからなくて……」
彼はぽつぽつと語る。
「この人間界に来てからも、探していたんだけど、見つからなくて。不安、だったんだ」
「そ、そうだったのですか……」
宝玉が欠けたままというのは、アマトルにとっては、自分の身体の一部を常にどこかに置き忘れたような状態だということだ。
（気が落ち着かなくて……後ろ髪を引かれているような、嫌な気分でしょうね）
これまで彼女に優しく接してくれていた彼の窮状に、ベルナは、素直に心を痛めた。
そんなベルナの俯き顔を見て、アマトルは、ちらりと後ろのネメシロに目配せする。
ネメシロが僅かに首を縦に振り、魔剣は、なぜか気乗りしない様子で――ベルナに告げた。
「でもね、魔王様。……アマトルの欠片がどこにあるか、ついさっき、やっとわかったの」
「え、本当ですか!?　それは、どこに……」

「これを見ろ」
そう言って、ネメシロは懐から何かを取り出す。それは大きな紙。正確には――
「新聞、ですか？」
購読するお金のないベルナにとっては縁遠い存在だが、それはつい最近になってフォルキデの市民の間に出回るようになった、重要な情報源だ。
どうやらこれは、臨時で配られた号外のようである。
「小鳥どもに手に入れさせたものだ。そこの記事を読んでみろ」
ネメシロの指示に従って、ベルナは紙面に視線を走らせる。
（……バスティアン殿下のお兄様が、戦争に勝って戻って来られたのね）
紙面は、第一王子凱旋のニュースに沸いていた。
肥沃なベリス半島に領土を拡大した今、フォルキデはますますの発展をみせることだろう。
（それならきっと近いうちに、兄様も帰って来られるはずだわ！）
シャルトリューズ伯もまた、ベリス方面軍に所属しているのである。
嬉しい知らせに胸を躍らせながら文面を読むうち、ベルナは『古き栄光の獲得者』と題された記事に目を止めた。そこには、このような内容が書かれていた。

――アルベール殿下率いるベリス方面軍は、行軍の最中、半島の遺跡に調査団を派遣した。

ベリス半島は、考古学的に価値ある遺跡が多く残されているものの、長引く獲得戦争のため、未だに十分な調査がなされていなかったのである。

古い神殿の地下に安置されていた石棺の中に、調査団は巨大な宝玉を発見した。

紫色に輝くその宝玉は、大人の握り拳ほども大きく、涙型に切られていることから、人の手によって作り出されたものと推測されている。

その形状から古の美の女神の名を借りて『ウェヌスの涙』と名付けられた宝玉は、殿下の手によって国王陛下に贈呈された。

陛下はご寛大にもこの秘宝を広く公開すべく、近く博物館に宝玉を寄贈される予定である。

またそれに先んじて、高位の貴族のみを集め、宝玉を国宝と定める式典と、これを展示しての戦勝記念の舞踏会が開催される予定も――――

（すごいわ。この世界には、今は忘れられてしまっていた美しいものがたくさんあるのね）

その宝玉は、かつての神殿で一体どのように使われていたのだろう。

ベルナはそんなことを思いながら、記事の横に掲載された宝玉のスケッチに目を移し――

「あ……え!?　あっ、あ、あの、皆さん、こ、これっ！」

彼女は驚愕した。白黒のスケッチでも、形ははっきりわかる。

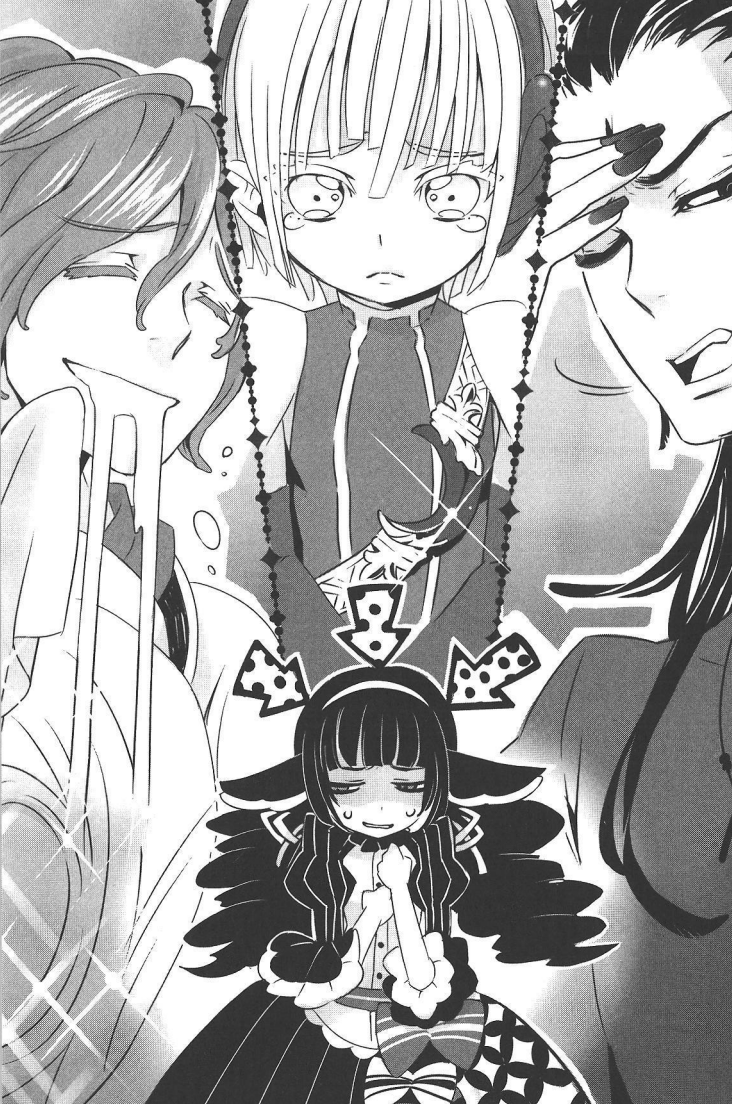
アマトルの胸元の三日月の、ちょうど凹んだ部分に、その宝玉『ウェヌスの涙』はぴったり

収まりそうな――気がした。
「そうだ。それこそ、アマトルの失くした欠片だ」
ネメシロは大きく頷いた。
「人間どもに拾われた後、勝手に涙型に研磨されてしまったようだがな」
「アマトル殿の欠片ともなれば、相当な魔力を持っていますからね。きっとニンゲンどもは、その神殿とやらの中で欠片を使って秘術の研究でもしていたのでしょう」
ウシュクが補足すると、アマトルはベルナに、静かに話した。
「アマトル、これを取り戻したい。取り戻してから……魔界に、帰りたい」
「ゆえに我らは、同志アマトルの訴えを聞き入れ、この唯一の心残りである欠片を回収したい、魔界に帰ろうというのだ」
ネメシロもまた、キリッとした清らげな視線でベルナに言い放った。
「で、でもこれは！」
ベルナは紙面とネメシロたちを交互に見ながら問う。
「あの、これはその……今は王宮の、国王陛下の元にあるのですよね」
「その通りだ」
「ということは、もしかして、あの……」
ベルナは喉をごくりと鳴らした。

「これを王宮から奪うつもり……ということですか？」
「当たり前だ」
「だっ、駄目ですよ!!」
ベルナは声を張り上げた。
「先ほど、そういうことはしないって仰ったばかりではないですか！」
「やれやれ、何を言いだすのかと思えば。いいか、ベルナデット・ド・シャルトリューズ」
ネメシロはずいっ、とベルナに顔を近づけて言う。
「我らが一体何年もの間、魔界に押し込められていたと思う？　千年だ！　その千年の間、アマトルが一体どれほどの苦痛に苛まれていたか、貴様は理解できぬというのか!?」
「そ、それは……」
悲しそうにしているアマトルを見て、ベルナは胸にそっと手をやった。
それを見て、ネメシロは殊更に、はあと息を吐いて言う。
「ああ……哀れなる我らが同志、アマトルよ。我らの主君はどうやら、貴様の苦しみを癒すことよりも、己の保身の方が心配のようだ。欠片さえ手に入れれば我らは魔界に戻ると言っているうえに、あの聖女めにおめおめと計画が露見するほど、我らは愚かではないというのになあ」
「そうですよ。わたくしだってアマトル殿のことが、ええっと、心配で、心配でぇ、もう、カワイソーなあまり涙がだばーって感じですよ」

言うなりウシュクの口から、大量の涎が流れ落ちた。
「……あっ、間違えました。ニンゲンが『泣く』時は、えーっとそうそう、目から水を出すんですよね。はい、だばーっ」
ぞんざいに涎を拭ってから、涙をどばどばと流すウシュクの顔は、相変わらずのんびりとしたままだった。
「ニンゲンの顔真似って苦手なんですよねえ。『情』というのが今一つ理解できなくて」
「……それはともかく」
ネメシロが改めて言う。
「哀れな同志を救ってから、魔界に帰りたい。その我らの意志を貴様は汲むか？　汲まぬか？」
「う……」
「汲むというなら、我らの行動に口出しはするな。我らは王宮に潜入し、宝玉を奪取する。汲まぬというなら、はあ」
と、彼は大げさにため息をつき、頭を振った。
「残念極まりないが、我らは魔界に帰るわけにはいかぬな。哀れなアマトルを、哀れな姿のまま魔界に帰すことなどできぬのだから。ああアマトル、なんと悲しいことよ」
「本当、カワイソーですよ。カワイソー、カワイソー」
今なおだばだばと涙を流し、機械的に可哀相を繰り返すウシュクの隣で、アマトルは、迷子

になった子どものように不安げな顔で、ベルナを見上げていた。
（わ、私は……）
ベルナの心は揺れる。――それを見て取ったのか、ネメシロはさらに言葉を重ねた。
「そういえば。欠片を放っておけば、王宮で何か起こるかもしれんな。どうでもよいことだが」
「え!?」
驚くベルナに、何気ない様子で、ネメシロは言う。
「いや。アマトルの欠片は、当然のことながら魔力を帯びておるだろう。魔術的素養のある者が安置しているとか、誰も触れぬまま埋もれているというならともかく、ただの人間が適当な管理をしているのでは……いつか、何か起こるかもしれんなあ」
「なっ、何かとは……なんですか!?」
「さてな。まあ、軽い魔力の暴走だ。天変地異程度で済むだろう」
「ある朝起きたら、王宮の半分が消滅している、くらいのことは起こるかもですねー」
「そ、そんな！」
ウシュクの言葉に、ベルナは飛び上がる。彼女を横目で見ながら、ネメシロはうそぶいた。
「まあ魔王よ。確かに、欠片は我らが回収せずにそのまま放っておけばよいのかもしれんな？その方が貴様としても好都合だものな。人間どもが苦しむ目に遭った方が、魔王として――」
「まっ、待ってください！」



ベルナの胸が、どきっと高鳴り――彼女の中の、亡き父から受け継いだ優しさが、むくむくと心の中で頭をもたげた。

（危険を未然に防ぎ、困っている人を助けることもできずに、貴族を名乗ることなんてできないと……父様は、よく仰っていたわ……！）

それに、この欠片さえ首尾よく手に入れられれば、彼らは魔界に帰ってくれるのだ。という、打算的な考えも彼女の脳裏をよぎった。

「わ……わかりました」

ベルナは、ゆっくりとそう言い、頷いた。

「そっ、その宝玉……手、手に入れ、ましょう。そうすれば……アマトルさんだって、安心して魔界に帰れますものね」

「魔王様……！」

「うむ。それでこそ、我らの盟主だ」

目を大きく見開いて言うアマトルと対照的に、ネメシロの口元は、ニヤリと歪んでいた。

「いやあ、偉い！　偉いですよ魔王陛下！」

ウシュクもまた、ぱちぱちと手を叩きながら言った。

「これで欠片が元に戻れば、アマトル殿も本来の力を取り戻せますし！　そのアマトル殿を手にすれば、魔」

「フン!!」
ドゴォ！　という鈍い音を立て、ネメシロに殴られたウシュクが、床に突っ伏した。
「だっ、大丈夫ですか!?」
「……ウシュク、貴様は何か勘違いしているようだな。まあいい、ともかくこれで話は決まった。ではベルナデット。王宮に潜入する時は、貴様も『協力』頼んだぞ」
「え……？」
突っ伏したまま動かなくなったウシュクを揺り動かしていたベルナは、はたと首を傾げた。
「そ、それって、どういう……」
「記事の末尾を貴様も読んだだろう。あの宝玉は、博物館とやらに行く前に、王宮で催される舞踏会でも展示されるようなのだ。鳥どもの話によれば、三日後に開催されるらしい」
三日後の舞踏会。きっと、王宮のあの大ホールで行われるのだろうが――
「後は……わかるな」
「ええっと……」
ベルナは一瞬、思考を巡らせ――
「無理無理無理無理！　絶対無理です、絶対っ!!」
「ええい貴様、今さらわめくな！　先ほどの言葉はどうした！」
「そ、それは、アマトルさんが欠片を取り戻せたら、とは思いますけれど！　でも、わっ、私

も王宮に、その、舞踏会に潜入しろ、と仰るのでしょう!?　無理ですよう！　きっとバスティアン殿下に見つかってしまいます！」

「何を言うか！　木を隠すなら森の中というだろう。貴族どもの中に隠れて事を起こすには、貴族である貴様が出向き、それに我らがついて行くのが一番の合理だとなぜわからぬ！」

「わかりたくありませんーっ！」

結局のところ、ベルナは、まんまと嵌められてしまったというわけだ。

涙目で抵抗する彼女の姿を、アマトルはただじっと、見据えていたのだった――――

「はあ、殿下……シャルトリューズ伯爵のご令嬢、ですか？」

「ええ。彼女にも、次の舞踏会への招待状は送られているのでしょうか」

その頃王宮の執務室では、バスティアンが秘書官に確認をとっていた。

珍しい質問を受けた秘書官は、眼鏡をかけてからぱらぱらとリストをめくる。

「そうですね……いえ、お送りしておりません。なにぶん、あの、シャルトリューズ伯のご令嬢は……ええと、有名な方ですから、その、聖誕祭のような大きな催しでもない限りは……」

「なるほど。わかりました、時間を取らせてすみませんでしたね。ありがとうございます」

言いづらそうに口ごもる秘書官に対し、バスティアンは柔らかな微笑みと共に礼を述べる。
（……それならまずは、堂々とあいつらがやって来るという危険性は、一応はないわけだ）
バスティアンはそう考えながら、机の上のカップを手に取った。
（兄上が持ち帰った、あの宝玉……どうも、嫌な予感がする）
カップの中に揺らめくコーヒーの褐色を見つめながら、彼は眉間に皺を寄せた。
玉座の間で、あの紫色の宝玉――今は『ウェヌスの涙』と名付けられたそれを見た時から、バスティアンは、言い知れぬ不安を抱いていた。
宝玉から、魔王たちに対峙した時と同じような、恐ろしい魔力を感じ取ったからである。
すぐに宝物庫に厳重にしまわれてしまったため、詳しく調べることはできなかったが。
彼らとあの宝玉になんらかの繋がりがあるという確証も、彼らがあれを奪いに来るという確証も、今のところない。けれども、用心するに越したことはない。
（なにせ彼女は……ベルナデットは、正真正銘の魔王なのだからな）
今は大人しくしていても、いつ爆発するかわからない、不発弾のような存在なのだから……。
「あの、殿下」
「なんでしょうか？」
バスティアンが柔和な顔に戻って答えると、秘書官は控えめに彼に問いかける。
「もしなんでしたら、その、シャルトリューズ伯のご令嬢にも招待状をお送りしましょうか？」

「……えっ？」

思いもよらない問いかけに、彼はつい真顔に戻ってしまう。

「な、なぜそのような？」

「え……あ、いえ殿下、失礼しました。殿下が特定の女性の招待状をお気になさるなど、めったにないことでしたので」

秘書官はぺこぺこと頭を下げている。どうやら——誤解をさせてしまったようだ。

バスティアンは彼に向かって微笑みを返す。

「気遣い、ありがとう。でも、彼女にはお送りしないままでおきましょう」

彼はカップの中のコーヒーを一口啜ってから、こう続けた。

「……彼女も、きっと喜びませんから」

「は、はぁ」

バスティアン殿下の、今までにないどこか憂うような表情。

秘書官は何も答えられず、そのまま、彼の日々の業務に戻ったのだった。

——シャルトリューズ邸、ベルナの自室にて。

「……ふう」

日課の内職――刺繍をしながら、ベルナはふと嘆息した。

「私、本当に、王宮に潜入することになったのね……」

ネメシロたちに言いくるめられたベルナは、結局、犯罪行為に加担することになってしまったのだった。……つまり、宝玉の窃盗だ。

『――何、我ら四天王の力を用いれば、人間どもの警戒の網を抜けることなど容易い。あの聖女めの目を掻い潜ることも問題ではない。貴様は我らの指示に従いさえすればよい』

ネメシロは先ほど、彼女にそう告げた。

（あああ……でも、不安だわ。それに盗みなんて……まして国宝に定められるような貴重な品を奪うだなんて、どんな事情があったって、やってはならないことのはずなのに）

だが失われたものを本来の持ち主の元に帰すということも、同じくらい大切なことに思える。

それに、いつ魔力が暴走するかわからないものを放っておくことなど、彼女にはできない。

さらに、宝玉さえ手に入れれば、四天王たちは魔界に帰る。平和が訪れるのだ。

（……それからこれ以上、バスティアン殿下と敵対しなくても済むんだわ）

憧れの聖女様の生まれ変わりである殿下に、睨まれ続けて生きるのは、どうにも耐えられそうにないことである。

「そのためにも私、頑張らなくては……」

「――魔王様」
「きゃっ！」
と、ベルナは耳元で聞こえた声にはっと面を上げた。
いつの間にか、傍らにアマトルが立っていた。
「あ、アマトルさん」
「魔王様、どうしたの。布、ぐちゃぐちゃになってるよ……」
「え？　……あ」
手にした布――刺繍の作品を見れば、縫い目が滅茶苦茶になっていた。
赤い糸が下絵から乱雑にはみ出して、子どもの落書きのようになっている。
「嫌だわ、私……普段は、こんなもったいないことはしないのに」
考え事をしながら仕事なんてしては駄目ね、とベルナは自戒した。
「ねえ、魔王様」
「なんですか？」
糸を抜き取りながらベルナが返事をすると、アマトルは無機質な瞳を少しだけ揺らしながら、彼女に問う。
「魔王様は――アマトルたちが魔界に帰るの、嬉しいの？」
「……えっ？」

「ねえ、教えて。アマトルの欠片を取り戻すのを手伝ってくれるのは、アマトルたちを魔界に帰したいから、なの……？」

ベルナの袖を軽く摑んだまま、アマトルは重ねて問う。

じっとこちらの瞳を覗き込む彼の目は、ベルナの答えを真摯に待ち構えていた。

「あ、あの、私は」

「あのね！　……この前ね、剣に戻ったアマトルを、魔王様が手に取った時に」

彼は必死な口調でベルナを遮り、続けた。

「魔王様、アマトルを昔使っていた時のこと、少しでも思い出したり、した？　アマトルは、ね、とても懐かしかったよ。魔王様の手の感触――」

「あっ、あの！」

ベルナは、正直に告げた。

「ごめんなさい。私、あの時も、その……千年前のことは、本当に、何も思い出せなくて」

「……そう」

アマトルの目から、涙が一筋零れ落ちた。

彼はそのまま床に跪き、ベルナの腰に腕を回して、きゅっとしがみつく。

「アマトルさん……？」

「前にも言ったでしょ、ここはアマトルの特等席。なんでかわかる？　アマトルが、魔王様の

剣だからだよ」

剣だから？　――しばし考え、ベルナは理解した。

きっと千年前の魔王は、腰に武器（アマトル）を吊（つ）るしていたのだ。

だから人の形を取る今も、彼はベルナの隣で、彼女にくっついていることを望むのだろう。

「ねえ魔王様……最初の質問にも答えて。アマトルたちが魔界に帰るの……嬉しい、の……？」

言うなりアマトルは、ベルナの腹の辺りに頭を埋（うず）める。

「嬉しくないなら、アマトルの頭、撫（な）でて」

「っ……！」

ベルナは、どう答えればいいのか逡巡（しゅんじゅん）した。

嬉しさと寂しさがないまぜになったこの感情を、どのように表現すればいいのか。

それとも、『嬉しくない』と嘘（うそ）をつけば、うまくごまかせるのか？

口下手（くちべた）な彼女に、そんな器用な芸当はできなかった。

彼女は、アマトルの頭に伸ばした手を、中空で止めて、何も答えられなかった。

「……そうなんだ」

しばらくの時を置いて。頭を埋めたまま、アマトルは言う。

今までベルナが聞いたことのない――底冷えがする声音（こわね）で。

「頭、撫でてくれないんだ」

「え？」
「魔王様……アマトルたちがいなくなるの、嬉しいんだ？」
ふいに彼が、面を上げる。ベルナは、はっと息を呑んだ。
怒りとも悲しみともつかない、追い詰められたようなアマトルの表情。
その鋼色の目の奥に、深い濁りがよどんでいるのに気付いたからだ。
長い時間、汚れだけを投げ込まれた井戸の底に似た色の、深い、暗い――
「もういいよ」
そう言って、アマトルはベルナに回していた腕を解き、立ち上がる。
そのまま彼は、ベルナの部屋から出て行ってしまった。振り返りもせず、足早に。
ベルナは――
「……アマトルさん」
扉が閉まってからでないと、彼に言葉をかけられなかった。
（私、アマトルさんを）
傷つけて、しまった……。
ベルナはそれきり刺繍の手も止めたまま、唇を噛んだ。

第四章　さざめきに呪いあれ

その日の夜。
ベルナは窓を伝って屋根の上に昇り、ランプの明かりを頼りに本を読んでいた。

――「さあ、私と踊っていただけませんか、かわいい人」
王子はエレオノールの手を取り、優しく囁いた。
エレオノールが彼の問いに微笑みで答えると、音楽が奏でられ、二人の舞が始まる――

（……実際の舞踏会も、このようなものなのかしら）
彼女はそう思いながら、ページをめくった。
この屋根はベルナのお気に入りの場所だ。趣味の読書に浸りたくなると、彼女はここに昇る。
夜の澄んだ空気に包まれたこの場所は、ベルナの気持ちをいつも開放的にしてくれた。

――曲が終わると、王子とエレオノールはしばし見つめ合った。
鳶色の目を細め、王子は言う。
「愛しています、あなただけを」
エレオノールが驚く間もなく、王子は彼女の唇を――

「きゃっ!!」
そこまで読み、恥ずかしくなって、ベルナはつい本をぱたんと閉じてしまう。
（この本、今まで何度も読んだけれど）
彼女はドキドキしながら、また本をそっと開いた。
（いつもここで、顔が熱くなってしまうわ）
いつか自分にもこんな瞬間が来るのだろうかと、今まで幾度もベルナは思ってきた。
（もしいつか、舞踏会で踊ることができたなら、私もこんなふうに――）
ぼんやりとそう考え、慌ててベルナは頭を振る。
（いけない。私ったら、そんなこと、あるはずないのに）
明日の舞踏会には、踊りに行くのではない。
魔王として、配下の欠片を取り戻しに行くのだから。
（……アマトルさん……）

ベルナは、昼間のアマトルとのやりとりを思い出す。あの時の彼の、冷たく暗い瞳――
それまで無邪気で、ベルナを一心に慕う様子だった彼が初めて見せた、魔物然とした顔。
あれ以降、ベルナはアマトルの姿を見ていない。
しばしば四天王たちが、どこかベルナの知らないところで集まって、話をしているらしいことは、ベルナも知っていたが。
（私、アマトルさんに謝らなくては）
彼女はふと嘆息する。
「おい、貴様」
「きゃあっ！」
間近から聞こえたネメシロの声で、ベルナは飛び上がった。
気付けば夜闇に溶け込むような彼の姿が、すぐ隣にあった。
彼はしゃがみ込んで、こちらを見ている。
「ね、ネメシロさん……い、いつからそこに」
「貴様がその本を読んで、奇声をあげた頃からだ」
「す、すみません」
「フン！　魔王が人間の恋愛小説で一喜一憂か。世も末だな」
「うう……」

ぼろくそに言われて、さすがにベルナはがっくりとうなだれた。
「あ……そう言えば」
ベルナはネメシロに聞いてみることにした。
「ネメシロさん、アマトルさんの様子はどうですか？」
「ん？　アマトル？　奴がどうかしたか」
「その、昼間に私、アマトルさんを傷つけてしまって、それで……」
「フン、気にするな」
不安げなベルナを鼻で笑って、ネメシロは言う。
「奴は貴様あってこその存在だ。アマトルは千年前、我が授けた技術を元に、お前が作り出した魔剣……奴にとっては、貴様が親のようなものだ」
「そ、そうだったのですか」
それで彼は、あんなに自分を慕ってくれていたのか……と、ベルナは納得した。
「それに昼間の奴の様子を見ても、変わりはなかった。奴も気にしてはいまい」
「……だと、いいのですが……」
まだ心配そうなベルナを見て、ネメシロは不機嫌そうに咳払いした。
「あ、いえ。わかりました。すっ、すみません」
ベルナは彼に頭を下げ……それから、ふと気になったことを聞いた。

「あの、ネメシロさんが魔王に、アマトルさんの作り方を教えたのですか？」
「その通りだ。吹き渡る風に乗る鳥の王に、知らぬことなどあるはずなかろう」
ちょっと誇らしげな顔でネメシロは言う。
「最初に千年前の貴様と契約したのも、それ以来魔術を教えたのも、すべて我だ。貴様の過去の栄光は、すべて我の叡智あってのことと知れ」
どうやらそういった過去が関係して、現在彼は四天王のリーダー的存在となっているらしい。
「す、すごいですね」
「……その叡智が、これから役に立てばよいのだがな」
じろりとベルナを見ながら彼は言った。
「まあいい。貴様に伝えることがあってここへ来た。宝玉奪取の策がようやく立ったのでな」
「ほ、本当ですか！」
「そうだ、余さず話してやる。感謝して聞け」
そう言うと、黒い魔神はベルナに作戦を語る。
話を聞く間に、ベルナの目は徐々に大きく見開かれていった。
「――以上だ。この方法ならば、聖女めに気取られることもあるまい。ふん、貴様もこれなら満足だろう？　人間の命は損なわれずに済むからな」
「あの、確かに誰も怪我もせずに済みそうですが……でも、結局悪いことはするのですね……」

「『悪いこと』だと？　貴様、まだ人間気分が抜けておらぬようだな。善悪など、所詮人間の定めた利己的規準に過ぎぬわ！」
「そ、そんな……」
「黙れ、過日も貴様に言っただろう。一刻も早く、魔王としての自覚を持て、と」
ふんすとネメシロは鼻を鳴らした。
――魔王としての自覚。その言葉を聞いて、ベルナの胸にある疑問が浮かぶ。
彼女は、思い切って聞いてみることにした。
「あのう、ネメシロさん。また一つ、伺いたいのですが」
「なんだ」
「昔の――千年前の魔王とは、どんな人物だったのですか」
「決まっている。破壊を好み、血と殺戮を好み、人として生まれながらも人を嫌った真性の魔だ」
事もなげにネメシロは答える。
「うう、あ、あの、そうではなく」
だがベルナは重ねて問う。
「人間だった頃の……魔王です。ネメシロさんと契約したばかりの頃から、その、そんな恐ろしい人物だったのでしょうか……？」

「なんだ、そんなことに興味があるのか？」
「はい。その、なんとなく……」
変なことを聞いてすみません――と言うベルナに、ネメシロは眉をしかめた。
「……フン。貴様、そんなことを聞いてどうするつもりだ」
「え？」
「貴様が魔王としての記憶と力を取り戻せば、おのずとわかることではないか」
「そ、それはそうですが、気になって」
「答えは単純だ。そんなものは忘れた。今の我らに必要なのは人間だった頃の魔王でもなく、奴の過去でもない。魔王は既に我らの盟主であり、契約を交わした相手。それだけの話だ」
「そ、そうですか……」
しゅんとするベルナを見るネメシロ。
しかし言葉と裏腹に、その目からは、険しいものがだいぶ消えていた。
「……ただ」
と、ネメシロはやや時間を置いて続けた。
「今思い出した。我と契約した直後からしばらくの間は、奴は今の貴様と少し似ていた」
「えっ、似ていた……のですか？　私と？」
「むやみやたらと自己を反省し、他人を傷つけたがらぬところが、とりわけな」

「い、意外です」
（そんな方が、どうして魔王になど……？）
ベルナの胸中に別の疑問が生まれる。
が、そんな彼女を封殺する調子で、ネメシロは語気強くまくしたてた。
「だが！　そんな奴でも時が経てば魔として覚醒し、非道なる魔王と化したのだ。つまり今の貴様も、研鑽を重ねさえすれば、かつてと同じ魔の盟主としての存在になれるということだ！」
「そ、そんな研鑽重ねたく……！　な、ない、です……」
「フン、言うようになったではないか」
ネメシロはその場に立ち上がり、ちょうど羽を揺する鳥のように、ばさばさと身を震わせた。
「その意気で今後も挑め。いいか、あの――人間どもが勝手に『ウェヌスの涙』と名付けたところの宝玉を手に入れさえすれば、それですべて事はうまく運ぶ」
「そ、そうでしょうか……バスティアン殿下に討たれてしまうのでは」
「確定と言ったら確定だ！　そうして己を疑うから、勝利が遠のくことになぜ気付かぬ!!」
ネメシロの檄に、ベルナは身を竦ませる。けれども納得するところもあった。
（そうね。やる前からあれこれ悩んでいても、仕方がないわ。まずは、やれるところまで挑戦してみないと……！）
彼女は思い出す。亡き父もよく言っていた。貴族たる者、時に思い切りも大切なのだ、と。

ベルナはぐっと拳を固める。
「……わかりました。ありがとうございます、ネメシロさん」
「なっ……」
素直にお礼を述べたベルナに、ネメシロは、数歩後ずさった。
「え、あれ、どうしました？」
「だ、黙れ半端者！　少し石につまずいただけだ！」
「でも、ここ屋根の上ですし、石なんて……」
「うるさい！　我はしばし人の街の見回りをする。ついて来るなよ！」
そう言う彼の顔は、少し赤くなっているように見えた。――ベルナの目には。
「ふん！」
気迫の一言と共に、彼は鉤爪の足で屋根を蹴る。
瞬間、彼の身体は無数のカラスへと姿を変え、夜空を遙か彼方へと飛び去っていった。
「つ、ついて行くことなんてできませんよ……」
ネメシロの術を呆然と見ていたベルナは、ただぽつりと呟いたのだった。

そして——舞踏会当日の朝。

バスティアンは今朝もまた、王宮の聖堂を礼拝していた。

白を基調とした聖堂は日光をいっぱいに受け入れて、厳粛な美しさで満ちている。

奥に安置された巨大な十字架の前に跪いて目を閉じ、祈りを捧げるバスティアン。

この広い聖堂で、毎日欠かさず祈りを捧げているのはただ、彼一人だった。

（主よ。あなたが私に与えられた、魔王と戦うという試練——どうかそれを乗り越える力を、私にお与えください）

今日の舞踏会に、もしかしたらベルナデットたちが現れるかもしれない。

そうなったなら、自分はあの宝玉を守るために、彼らと戦わなければならない。

それは決して傷つかず、しかも彼らに対抗する力を唯一持っている存在である、バスティアンのみにできることである。誰かが肩代わりできることではないのだ。しかし——

あの日から胸中を苛んでいる疑問——あの戦いの中で聞こえた声がなんだったのか、なぜあの声を聞いて戦意を失ったのかという疑問への答えは、未だに与えられないままだった。

（……主よ）

彼は閉じていた目を開き――その碧眼に憂いの色を滲ませてから、再び目を閉じた。
（私は、正しい道を歩んでいるのでしょうか？　あの魔王は……ベルナデットは、私が討つべき存在なのでしょうか？）
バスティアンは心中に生まれた疑問をぶつける。しかし答えは返ってこない。
聖誕祭の前日以来、啓示を与えたあの声は、もはや聞こえてこなかった。
（あいつは、確かに魔王だ。それにあの様子から見て、もはや人間としての心は残っていないけれど――なぜこんなに、討つことへのためらいが生まれているのだろう。
（主よ……失礼しました）
彼はこれ以上考えるのをやめることにした。
（今宵の舞踏会で、何事もありませんように。……ついでに、あの舞踏会に集まるのと同じくらいの人数が、毎朝この聖堂に集まり、祈りを捧げてくれるようになったなら嬉しいのですが）
ふうと息を吐き、彼はゆっくりと立ち上がった。
「それは望むことすら不可能か。皆、己を飾り立てることにしか興味がないからな」
「あらティアちゃん、こんなところにいたの！」
女性の甲高い声が、愛称でバスティアンを呼ぶ。
背後からの声に、彼ははっと振り返り――そして、いつもの柔和な「王子」の顔で言った。
「母上。おはようございます」

彼は深く一礼する。そこに立つのは、彼の母・ルイーズ王妃だった。
真紅の衣を身に纏った彼女は年を重ねているとはいえ、かつて絶世とうたわれた美貌はまだまだ衰えていない。
「あなたったら、いつもこんな陰気臭いところにいるのねえ。ティアちゃんには、もっと美しくて華やかな場所が似合ってよ？」
「……母上。ここは神を祀る聖堂です。どうか敬意を……」
「そんなことより、ティアちゃん！　今日の舞踏会の話だけれどね」
バスティアンは、穏やかな微笑みを浮かべたままで閉口する。
そんな彼の様子を「聞きわけのよい息子」としか取れない母親は、今夜の舞踏会にどんな料理やワインが出るかだの、参加する貴族の令嬢の噂だの、とりとめのない話を休みなく語って聞かせた。
やがて彼女の話は、バスティアンの兄、アルベールに移る。
「今夜は、ねえ、『あの子』も来るのでしょう？　私、もう『あの子』がいるたびに仮病使うのもおっくうだから、今日は我慢して舞踏会に出ることにするわ」
「っ、母上！　兄上は……今日の舞踏会は、兄上の戦勝を祝うもので」
「何を言ってるのティアちゃん？　あんな醜い傷だらけの子、愛せるわけないわ。ああそうね、こんなに美しいあなたのような子を授かったことこそ、神様に感謝しなくちゃ……」

うっとりした口調で言う母親は、踊るようにステップを踏んだ。
こうなるともう何を言っても彼女が聞き入れないということを、息子はよく知っていた。
「母上。兄上が、傷だらけになっているのは――――」
バスティアンの重苦しい呟きは、誰の耳にも入らなかった。



やがて太陽は西の空に沈み、美しい月が空に昇る。
待ちに待った夜、舞踏会の始まる時間。そして、いよいよ――――
「時は来た！」
シャルトリューズ邸のエントランスで、ネメシロが声を張り上げる。
「いよいよ我らが王宮へ潜入し、失われた力を取り戻す時だ。愚かな人間どもの目を覚まさせ、天下に魔の存在を知らしめるのだ！」
「おー！」
「……おー」
勢いよく鬨の声をあげたのはウシュクとアマトルで、その横でベルナは元気なく手を上げた。
「声が小さいぞ、半端者が！」

「いえ、あの……こっそり行った方が、問題が起きなくてよいのでは」
「魔王様、心配しなくていいんだよ？　アマトルがいるからね！」
「あ、はい」
ベルナのドレスの裾をくいくい引っ張るアマトルは、無邪気な笑顔を浮かべている。
今までと何も変わらない、愛らしい笑顔だ。
――しかしあの日以来、まだベルナは、彼のことを気にしていた。
「ありがとうございます、アマトルさん。あの、私、頑張りますから！」
「だから、魔王様は心配しなくていいんだよ！　……全部、アマトルがやるからね」
彼は決意の籠もった目で言う。けれどもそれに、一抹の不穏さをベルナは感じた。
「では、手筈通りに行くぞ。ウシュク！　貴様は『門』を開き、例の場所に繋げ！」
「承知しました！」
ウシュクはネメシロ、そしてベルナに一礼し、台所の方へ去って行く。そして。
「ネメシロ様っ！　アマトルは魔王様にこっそりついて行く！　いいでしょ？」
「よかろう、悟られねばよいだけの話だ。例の変化を使え」
「わかってるよ。えいっ！」
言うなりアマトルの身体は銀色の光に包まれ、徐々に小さくなっていく。
呆然と見ていたベルナが我に返った時には、彼の姿は、小さな髪留めになっていた。

『へへ、こういうこともできるんだよ。アマトルを髪につけて行って、魔王様！』
拾い上げた手のひらの中で、髪留めは語る。
『もし聖女がまた襲いかかってきても、アマトルが守るからねっ』
「あ……ありがとうございます！」
ベルナはすぐさま彼を前髪につけた。
『むう……やっぱり、誉めてもらうには……』
「え？　どうしました？」
『えへへ、なんでもない』
アマトルが笑い、ベルナは首を傾げる。
「よし」
一方で、ネメシロはにやりと笑った。
「これで準備は整ったな」
「あ、あの……ネメシロさん」
ベルナは恐る恐る問う。
「ウシュクさんの力で王宮に潜入するというのは伺ってましたが、具体的にはどのような……」
「ネメシロ殿！　準備満タン整いました！」
「満タンではない万端だ。それはともかく」

台所からウシュクが顔を出すと、ネメシロはぐいぐいとベルナの背を押した。
「よし、行け魔王」
「あの、行くとは、王宮に、ですよね？　だ、台所から……？」
戸惑いながらも台所にベルナが向かうと、そこにいたのは――
「え……」
得意満面なウシュク。彼の横には、食器の洗い桶があった。
洗い桶の水面には、底が見えないほど深く暗い穴が口を開けている。
「こ、これはどういう……」
『心配しないで魔王様。これはウシュク様の、水棲馬の特殊能力』
「貴様、ウシュクがここへ来た時のことを忘れたか？　まあいいウシュク、此奴を突っ込め」
「はい！」
「え、あの、や、やめてぇえええ～っ!!」
叫ぶベルナ。
だがそれに構うことなく、ウシュクはベルナを軽々と抱き上げ、彼女を洗い桶に突っ込んだ！
開けっ放しにしていた口に、石鹸水の苦い味がいっぱいに広がり――
「げ、げぼっ」

ベルナは、あまりのことに気絶した。

「陛下！　陛下、起きてください」

「うー……ん、あら……お、お肉は……？」

幸せな夢から醒めたベルナが最初に見たのは、こちらを覗き込む魔物の茶色い目だった。

「きゃっ！」

悲鳴をあげて身を起こすと、水音があがった。

ベルナの身体は、半分近く水に浸かっている。ここは――

「ふ、噴水？」

聖誕祭の夜、ベルナがバスティアンに襲われた、あの噴水だ。

「はい、陛下！　わたくしの術で、洗い桶の水と、この地の水とを繋げました。わたくしが最初に参上しました時も、同じ術を使ったのですよ」

『ね、水棲馬の特殊能力』

髪留めに化けたままのアマトルの説明に、エッヘンと胸を反らすウシュク。

ベルナはゆっくりと自分の身体を見た。

ウシュクの術のお陰か、水に浸かっているのに、どこも濡れていない。

ベルナは少しほっとした。
「ええとここから、直接王宮のホールに向かうのですか？」
「その前に」
噴水の水底から黒い影が現れた。ネメシロだ。
「貴様のその格好をなんとかさせてもらう」
「え？　私の格好を、ですか」
「そうだ。貴様はこれから、舞踏会に参加している客を装わなければならぬ。その時に、そのようなぼろきれを纏っていては装うものも装いきれん」
「そ、そうですか……」
「ゆえに少し、手間をかけておいた」
言うなり彼はぴいっ、と指笛を吹く。すると――
「お、お待ちしており、ま、した」
茂みの陰から、男性が現れる。衣服から判断するに、どうやら王族付きの侍従の一人のようだ。しかしその目は虚ろで、口調はどこかたどたどしい。ベルナは思わずびくつくが――
「陛下、ご安心ください。先んじて、わたくし、このニンゲンを洗脳しておきました！」
「せ、洗脳？」
「はい！　わたくしが、先日街に来ていたこのニンゲンをこうやって、ぐりぐりと！」

ウシュクの伸ばした人差し指の先が、どろどろと変化し水になる。
（あ、あの水に化けた指で、本当に脳を洗ったから『洗脳』……!?）
ガタガタ震えるベルナを置いて、ウシュクは語る。
「ニンゲン、魔王陛下に捧げる『献上品』の準備はできましたか？」
「は、はい。あがが……ど、どぞ、こっ、こちらへ、あがががが……」
（だ、大丈夫かしら、この方……いつか元に戻るのかしら……!?）
ふらふらと、王宮の裏手へ回っていく侍従に、ベルナはおどおどしながらついて行く。
その姿は幸い、誰にも見られていなかった――――

一方その頃、王宮の大ホール。
聖誕祭の時以上に飾り付けられたそこは天界のごとく光り輝き、そこに集う人々の身なりもことのほか麗しい。
そんな中で、一際人々の注目を集める存在があった。
一人はこの国の第二王子、バスティアン。
彼は今日この日のために誂えられた白い夜会服を身に纏い、神々しいまでの美を放っていた。

そしてもう一人は――

「殿下、今日はお招きいただきありがとうございます！　栄えある場に参加できますこと、我がロートシルト家の誇りでございますわ」

「こちらこそ、ありがとうございます。カロリーヌ嬢」

恭しくバスティアンが礼をすると、カロリーヌは扇子の陰でうふふと満足そうに微笑んだ。

彼女もまた、豪華にフリルをあしらった深い緑色のドレスを纏い、この場の女性の羨望の眼差しを一身に受けていた。

（……母上が今朝、わざわざ聖堂にまで出向いてきたのは、彼女が来ることが理由か）

柔和な笑みを崩さないまま、心の中でバスティアンは呟く。

（どうやら今夜は最後まで、カロリーヌ嬢の相手をしろ、ということのようだ。仕方ない、これも王子としての務めだからな。しかし）

彼は視線を、ホールの奥の宝玉に移した。

（……よし、あれは無事だな。そして）

次いで彼は、ホールをぐるりと見渡す。

彼ら二人を取り巻く人々の中に、『彼女』の顔はない。

「……ベルナデットはいない、か……」

「ええっ!?」

バスティアンがうっかり漏らした呟きを聞いてしまったカロリーヌは、頓狂な声をあげた。
「ばっ、バスティアン殿下……もしや、じゅ、『呪殺令嬢』をお探しですの!?　なぜっ……」
「あっ……！　ああいえ、失礼」
（しまった。気を取られすぎたか）
己のミスに心中で舌打ちしながら、バスティアンはにこやかにカロリーヌの手を取った。
（……まったく。最近は暇さえあれば、あの魔王のことばかり考えている気がする）
毎晩の夢に出てくるだけでなく、現実でまで思考を乗っ取られるとは。
迷惑なことだ、などと内心零しながら、彼は「王子」としての口調で言った。
「さあ、あまり皆様をお待たせしてはいけませんね。音楽を奏でてください、始めましょう」
バスティアンはホールの音楽隊に命じる。最初の曲はメヌエットだ。
周囲の人々も、やがて思い思いにパートナーを選び、踊り始める。

「……あ、あのう……私の格好、おかしくないですよね？」
「おい、それを聞くのは何回目だ貴様？　しつこいぞ」
『大丈夫だよ魔王様！　すごく禍々しい感じで』

「わたくしは頭に角でも生えて、毛むくじゃらになったらなおいいと思いますよ！」

「あ、ありがとうございます……」

ウシュクに『洗脳』された侍従の用意したドレスを身に纏ったベルナは、四天王にせっつかれながらも、ホールにほど近い裏庭を進んでいた。

ダークブルネットの髪を結い上げ、細身のぴったりした紫色のドレスを纏い、真珠の首飾りを身につけたベルナの姿は、間違いなく美しいものだった。

元々の陰気な雰囲気も、身に纏う衣装と相まって、どこか近寄りがたい、『魔性の美』のようなものを醸し出すに至っている。

――のだが、それを的確に表現できる者が周りにいないので、ベルナはこの自分の格好を、たまらなく変だと思っていた。

（この格好、落ち着かないわ……妙に軽い素材のドレスだし、首飾りは重いし）

そこまで考えた後、ベルナは頭を振った。

（……そんなことを考えている時間はないわ！　いよいよホールに近づいてきたのだもの）

彼女は今、四天王たちと共に目的地の裏手に回っている。

そこから散開し、後は打ち合わせ通りに事が運べば、宝玉はアマトルの手に戻るはずだ。

と――次第に人々の笑いさざめく声が聞こえるようになってきた。

ベルナたちは、木立の陰にさっと隠れる。

「……いいか」

ネメシロはベルナたちに念を押す。

「これから我はこのホールの天井に潜む。ウシュク、貴様は内部の攪乱を。そして貴様は」

彼はベルナを指さして言った。

「アマトルを連れて先にホールの隅に紛れ込め。あまり人目につかぬ場所にな。それで我が『合図』を済ませたら、一目散にあの宝玉のところまで走れよ」

「わ、わかりました」

以前に聞いた話と同じ内容を確認し、ベルナは頷き——ふと、疑問に思った。

「あ、あのう、ネメシロさん。よく考えたら、別に私も共に行かなくても、アマトルさんだけ宝玉のところに行ければ、話はそれで済むのでは……」

ベルナの指摘に——四天王たちは一様に押し黙った。

「……さ、行くぞ」

「ちょっ、ちょっと待ってください！　なんだかおかしいです！　ほっ、本当にこれ、アマトルさんの欠片を手に入れるだけの話なんですよね!?」

『魔王様も、一緒に来て。アマトル、魔王様と一緒がいいから』

「で、でも……！」

『——嫌なの？』

「そ、そうじゃないですけれど」
「ええい、うるさいぞ魔王！　ここまで来たのだから覚悟を決めろ！」
「そうですよう！　魔王陛下が、完全体になったアマトル殿の傍にいないと――」
「黙れウシュク！」
ぴしゃりとネメシロが言った。
「いいか魔王。貴様、腑抜けた真似は許さぬからな。貴様の心臓が誰のものか、忘れるな」
「陛下、もしもひょろっちい今の陛下では対処できないことがあったなら、すぐに水をご用意くださいね！　僅かな水でもあれば、わたくし、すぐに参上できますから」
「わ……わかりました」
ベルナが頷くと、ネメシロとウシュクの姿は即座に掻き消えた。持ち場についたのだ。
（うう……な、何かはぐらかされているような気がするわ……）
釈然としないベルナだったが、髪留めになって今も頭上にいるアマトルが、心なしかうずうずしている気がしたので――
「と、とりあえずホールに近づきましょう」
『うん、魔王様。へへっ、二人っきりで行くの、嬉しいな』
前髪のアマトルににたりと微笑みかけてから、ベルナはそろそろと木立の陰から出た。
裏庭の暗闇は、ホールの大きな窓から溢れ出る光に切り取られている。

まずはこっそりと、窓から中を覗き込んでみる。と――

（うわぁ、綺麗……！）

彼女は、つい目を奪われてしまった。中ではちょうど、舞踏の真っ最中。オーケストラの奏でるメヌエットの調べに乗って、人々は楽しげにステップを踏んでいた。女性の纏う色とりどりのドレスが満開の花弁のようにくるくると回り、それを支える男性の優雅な動きと、音楽との調和で、ホール全体が満たされている。

（舞踏会に出ても、いつも俯いていたから……こんなに綺麗なものだって、知らなかったわ）

華々しい、という言葉の本当の意味を、ベルナは初めて知ったように思った。

そして――

（あっ……！　バスティアン殿下）

踊っている人々の中に彼の姿を見つけ、ベルナは、思わずため息をついた。

（すごいわ。やっぱり殿下は、どんな時でも輝いている人ね――）

彼は美しい。それは、あの聖誕祭の夜からよく知っていることだ。

けれど穏やかな微笑みを浮かべたまま、誰よりも華麗な踊りをしているバスティアンの姿は、これまでに見たどの姿よりも、素晴らしいものだった。ベルナの目には、眩しいほどだ。

（一緒に踊っているのは、カロリーヌさんね）

彼女がバスティアン殿下の相手を務めているというのは、何もおかしなことではない。

家柄も美貌も兼ね備えた彼女ならば、仮に王族の婚約者となったとしても当然だ。
（お二人とも、本当に綺麗だわ）
心からそう思う。けれども。
（もしあそこで踊っているのが、私だったなら――――）
ベルナはふと、踊っているカロリーヌの顔に、無意識に、自分の顔をあてはめているのに気がついた。バスティアンとベルナが踊るなど――そんなこと、あるはずないのに。
彼と彼女は、運命の宿敵だというのに。
（私、なぜ今……）
そう思いながらも、彼女は、踊っているバスティアンから目が離せない。
見ているだけなのに、胸がどきどきして、止まらなくなってきた。
カロリーヌ嬢に自分をあてはめることも止められないし、前の晩に読んだ恋愛小説の一節を、頭の中で反復することからも逃れられなかった。彼のことだけを、見ている――――
（やっ、やだ。私、これ、もっ、もしかして）
ベルナは、ごくりと喉を鳴らした。
（もしかして、これは――――殺意!?）
『聖女』バスティアンを見て覚えたこの感覚の名前を、彼女はまだ知らなかった。
（魔王としての殺意、かもしれないわ……！　だって、こ、こんな気持ち、感じたことがない

もの。こんなふうに、胸が痛くなったこと）

『……魔王様』

（それにカロリーヌ嬢と自分の首をすげ替えて見るだなんて、よく考えたらとても猟奇的だわ。こっ、こんな恐ろしいこと、今まで思ったこともなかったのに。やっぱり私、魔王として）

『魔王様！』

「はっ！」

アマトルの呼びかけに、ベルナはびくりと居住まいを正した。

「ごっ、ごめんなさい！　私、つい、ええと、あのっ、殺意が！」

『え、殺意？　それなら嬉しいな。でも魔王様、そろそろ先に進もうよ！』

「そ、そうですね。行かないと……」

アマトルの言葉に、ベルナは窓から離れようとして――

「ひいっ!?」

ふと、窓の中のカロリーヌと目が合ってしまった！

ベルナの顔を見た彼女は思い切り顔を引きつらせ、そのついでに、ドレスの裾を踏んで転んでしまっていた。

「いっ、いけない！」

ベルナは慌て、走ってその場を離れた。

「かっ、カロリーヌ嬢！　どうなさいました!?　怪我はありませんか」
「いっ、いえ殿下、わ、わ、私はだだ大丈夫ですの」
急いでバスティアンに助け起こされたカロリーヌ。
幸い怪我はなかったものの、彼女の心臓は、早鐘のように鳴っていた。
（いっ、い、今……今、窓の外に浮かんでいたあの顔は、間違いなくベルナデット……！）
暗闇の中にぼんやりとベルナデットの顔だけが浮いていた――ように、彼女には見えた。
長い睫毛をしばしばさせながら、カロリーヌは考える。
（で、でもあの陰気な呪殺娘は今日ここには来ていないようですし。まっ、まさか、生霊……!?）
いやそんなことがあるはずがない……呪いなど、あってたまるものですか！
「でっ、殿下、失礼いたしました。さ、ダンスを続けましょう」
「……はい。ですが、もしご気分が悪ければ、仰ってくださいね」
やや顔を引きつらせたままではあるものの、カロリーヌは根性でダンスを続行する。
バスティアンはそんな彼女に密かに感心しながら、内心、こう思った。

（……まさか）

彼はまた、群衆の中に『彼女』を探す。

（ベルナデット……お前、ここまで来ているのか……!?）

窓から離れた後、ベルナはそろりそろりとホールの裏手に回った。

そこにも庭と繋がる扉があるのだ。中の人々が行き来できるよう、扉は開け放たれていた。

ベルナはそっと、中に入る。

しかしさすがの彼女も、色々な意味で自分が有名人であることを知っている。

そういうことで、彼女は大きな柱の陰から、そっと会場の様子を窺うことにした。

『……！　魔王様、あれを見て。ホールの奥！』

こそこそとアマトルがベルナに囁く。言われるがままに見てみれば――――

（あ……あれが！）

ホールの奥にあったのは、『ウェヌスの涙』。

台座の上で、クッションに載せられ輝くその宝玉は、美しく、荘厳で、だがどこか禍々しい。

表面的にはただの紫水晶の塊のようなそれは、内部に小さな金色の煌めきがあり、あたか

も満天の星空のような趣きだった。
（なぜかしら、とても……懐かしい感じがするわ）
ベルナはしばらく、すべてを忘れてそれに見入った。
引き出しの奥に、幼い頃に可愛がっていたぬいぐるみを見つけた時のような——胸がときめくようで、どこか切ない気持ち。
（懐かしく思えてくるのは、かつての私……いえ、魔王があれを作ったからかしら）
眠っていた記憶が、徐々に浮かび上がろうとしているのだろうか。
そんなことを考えていたベルナを、近くで交わされている会話が、ふと現実に引き戻す。
「……いやぁまったく、今回も主役はバスティアン殿下に持って行かれてしまいましたなあ」
「本当に。ま、私たち老齢の者には、踊るなど体力の消耗以外の何ものでもありませんがな」
隅に立って話しているのは、既に高齢になった貴族たちや、食事をしている者たちだけだ。
（やはりバスティアン殿下は、社交界の中心なのね）
おそらく相当高位の貴族なのだろう、その老紳士たちの会話を聞いて、ベルナは思わずふむふむと頷く。しかし——
「いやいや、わしらのことではありませんぞ。この舞踏会、そもそもはあのアルベール殿下のために開催されたものだというではありませんか」
「はあ、……あのつぎはぎ殿下のために？」

「しーっ！　その渾名は言わんでおいた方が……」
「いやしかし、最近若い者の間ではその呼び名が――」
アルベール殿下の話題になった途端に、貴族たちの口調が嫌味なものに変化する。
（……確か前に兄様が、アルベール殿下は身体中に傷跡がある、と言っていたわ）
貴族でありながらかなりの軍人気質の兄は、それを男の勲章だと誉め称えていたように思う。
だが、どうやら社交好きの貴族の間では、彼の身体の傷も……あるいはその無骨さも、忌み嫌われる性質のようだ。
「そう言えば伯爵は、お聞きになったことがありますかな？　殿下が、つぎはぎになった理由を」
「ああ、バスティアン殿下が関わっているという、あの？」
（……え？）
『聖女が、関わってる？』
ベルナとアマトルの興味が一致する。二人はしばし、老貴族たちの会話に耳を傾けた。
「あの十三年前の革命の時ですな。なんでも当時、海向こうのブリタニアに亡命する途中で、アルベール殿下とバスティアン殿下の乗った馬車が、あの暴虐王の軍隊に捕まったそうで」
「なんと、お二人ともよくご無事でしたな！　連中、野犬か何かのように獰猛だったと聞いて

おりますが」

「実際そうでしてな。あの馬車に乗っていて、生きて帰ってきたのはあのお二方だけで……いや、無事だったのは、バスティアン殿下だけだったそうですな」

（バスティアン殿下だけ？）

それを聞き、ベルナの脳裏に、はっとよぎるものがあった。

（もしかして――）

「不思議なことにバスティアン殿下は傷一つ負わず、その代わりに馬車を守っていた兵士たちと侍従が全員切り刻まれて……ああそれに、アルベール殿下に、ほら、顔の真ん中に大きな傷がありますでしょう。あれは殿下が、バスティアン殿下を庇ってついたとか、なんとか」

「わしが聞いた話ですと、バスティアン殿下は生まれてこの方、傷一つ負ったことがないんだそうですなあ。いやはや、どういう運命が関わっているのやら」

「ふふっ、前時代的な言い方をすれば、『神のご加護』というやつですかな」

「神がもしいるなら、不公平なことですな。お二人の仲が悪いのも、道理というものだ」

ははは、と貴族たちは高らかに笑った。

けれども――柱の陰でそれを聞くベルナの心中は、穏やかではなかった。

（殿下に……そんな過去があったのね）

バスティアンだけ傷つかなかったのは、きっと、彼が聖女の生まれ変わりだったからだ。

彼が『光』の力を「自分の意志で」使えるようになったのは、ほんの数日前。
だがその力は、彼がこの世に生を受けたその時から、彼を密かに守っていたのだろう。
（――きっと、その馬車が襲われた時も、バスティアン殿下をあの『光』が守ったんだわ）
自分がアマトルで彼に斬りかかった時のことを思い出しつつ、彼女は考えた。
しかし聖女の『光』は、聖女自身は自動的に守るが、それ以外の人間の命までは保証しない。
人々が斬り殺され、実の兄までもが傷つく中、自分だけ無傷だった、その時のことを――
自分を守って傷ついた兄が、戦争に勝つという功績を残した今でも、社交の場で受け入れられていないことを、バスティアンは、どう思っていることだろう。
（もしかして、殿下が普段は『仮面を被っている』などと仰っていたのは）
そうした口さがない噂から、己を守るためだったのではないだろうか？
（考えすぎね、私）
ベルナは小さく頭を振った。
（人様の会話に聞き耳を立てるのも、失礼なのに。詮索までするのは、恥ずべきことだわ）
父の高潔な教えを胸に、彼女が自戒する一方で――
『……ふうーん、そうなんだ。今の聖女の奴、そんな目に遭ってるんだな』
アマトルが呟く。
『ねえ、魔王様。そのアルベール殿下って、あいつかな？』

「え？」

『ほら、こっちに近づいて来る』

ベルナはその言葉に視線を巡らせ、すぐに、周囲から頭一つ飛び抜けた人影を見つけた。

舞踏会だというのに将官用の黒い軍服で固めたその姿は、いかにも厳めしく、威容だと言えた。しかも顔の中央に、大きな傷跡がある。きっと彼が、そのアルベールだ。

「ああ、噂をすれば。伯爵、少し移動しましょうか」

「そうですな」

そそくさと老貴族たちは退散してしまう。近くを通るだけで席を立たれてしまうことの辛さをよく知っているベルナは、アルベールのその様子に、心を痛めた。

（……私もあのような感じね、いつも）

彼女は柱に手を置いたまま、しばらく俯き――――

「……マドモワゼル」

「は、はいっ!?」

唐突に真横から話しかけられ、びくっと身を震わせた。

いつの間にか、気配も音もなく、すぐ隣にアルベール殿下が立っていた。

「え、あ、う……」

とりあえず彼女は唸った。

女性としてはそれなりに高身長のベルナが、見上げなければならないほど、彼の背は高い。
その目は何を考えているのかわからない漆黒で満たされ、ベルナは今にも逃げ出したくなる。
（けれど……それは失礼だわ！）
見つかってはしまったが、『呪殺令嬢』出現に騒ぐ者はまだ誰一人いない。
それにどうやら、アルベールはベルナのことを知らないようだ。
そう思って、ベルナはドレスの裾を摘み、礼儀正しく挨拶することにした。
「こ、こここんヴぁんわ、アルベール殿下」
「……怒っているのか」
「えっ!?　いいえ！　ちっ、違います！」
（アルベール殿下にも誤解されるなんて……）
ベルナはがっくりする。……だが。
「……俺に挨拶をしたのは」
ひび割れた唇を動かして、アルベールは言う。
「あなただけだ。鋭い目のマドモワゼル」
彼は視線を動かした。ホールの中央へ――今なお踊っている、弟の元へ。
「……この場に必要なのは、きっと。バスティアンだけなのだろうな」
「えっ……!?」

「……では。ゆっくりしていけ」
唐突に会話を打ち切って、アルベールは、別の場所へと移動していった。
こちらに話しかけてきていたのか、それとも後半はただの独り言だったのかすらよくわからない。弟を見る彼の目の色も複雑で、その心境を測るのは、難しすぎた。
（……なんだか、不思議な方だったわ……）
ベルナはぼんやり考える。かたやアマトルは、そんな彼女を置いて――――
『そっかぁ……うふっ、ふふふ！』
小さく笑っていた。人間に化けている時なら、肩をぷるぷると震わせていることだろう。
「あ、あの、アマトルさん？　どうしました？」
事態が摑めぬベルナは、そっと問う。
『え？　うん、あのね！　アマトル、ついにとってもいい方法を見つけたんだ』
「方法……？　なんのですか？」
『えへへっ、教えない！　教えない、教えない、魔王様でもお楽しみ♪』
歌うように語る彼は、久々に非常に上機嫌だった。
（アマトルさん……そうね、きっともうすぐ欠片が戻ってくるから、安心しているんだわ）
この前彼を傷つけてしまったことをまた思い出し、ベルナは、きっと宝玉を手に入れようと決意を新たにした。そして――――ちょうど、その時だった。

「……あら？」
メヌエットが終わり、最初の舞踏が終わったのと――――
（……！　合図だわ！）
ネメシロの黒い羽根が、音もなくベルナの足元に落ちてきたのとは。

曲が終わり、バスティアンはカロリーヌから身を離すと、ふわりと笑って言った。
「カロリーヌ嬢。素敵なひと時を、ありがとうございました」
「いいえ、殿下！　私こそ、光栄でしたわ」
深々と一礼し、カロリーヌは言う。
彼女が満足そうにしているのを見て取って、バスティアンは心の中で、ふと一息入れた。
（よし。これで「王子」としての義務は果たせた、が……）
彼は三度、群衆の中に『彼女』を探した。
（やはりベルナデットはいないのか）
彼はそう考え、自嘲した。
（……ふっ。こうして何度もあいつの姿ばかり探していると、まるであいつに会いたがってい

るようじゃないか。さすがは私の『運命の相手』……か？）

運命は運命でも、殺し合う運命だが。彼がそこまで考えたところで――――

「もう、殿下！　聞いていらっしゃいますの!?」

「……っ！」

ぷりぷり怒っているカロリーヌの姿が目前にあって、彼はしまった、とまた思った。

「っ……も、申し訳ありません、カロリーヌ嬢」

「まったく殿下、今夜はずいぶんと『心ここにあらず』ですのね！　この私の言葉を無視なさるだなんて、殿下もお人が悪いですわ」

目を閉じ、ふん！　とそっぽを向いたカロリーヌは、顔の向きはそのまま、ゆっくりと目を開けて――――

「あ……あれはっ!?」

驚愕に顔を思い切り歪めた。

ただならぬ様子に、バスティアンも視線を動かし――絶句する。

「……な!?」

さすがの彼も、目を疑った。

ホールの外から大量の鳥が、無理やり中へ入って来ているのだ！

「う、うわああ！　なっ、なんだこの鳥！」

「こらっ、入るな！　外へ出ろ、外へ！」
衛兵たちが急いで締め出そうとしているが、鳥たちは雪崩をうって中へ侵入し、まるで一羽の巨大な鳥のように、まっすぐにホール天井へ向かう。
彼らの羽ばたきが、シャンデリアの蝋燭の火を、ことごとく掻き消した。
途端にホール全体が、暗闇に閉ざされる。
「きゃっ、きゃああ！」
「なっ、何事だ!?」
突如としてパニックになる舞踏会場。
その中でバスティアンは、冷静に事を判断しようとしていた。
「落ち着いてください！　鳥が入ってきただけです！　今、明かりを……」
シャンデリアの蝋燭に火をつけようとする者も現れた、が。
「うわぁっ、水が!?」
「なっ、なぜこんなところに!?」
次いでホールにある水という水が、ことごとく噴出した。
それはまるで猛る蛇のようにうねり、火という火を食らい尽くしている。
お陰で火は次々と消えていき、明かりはなかなか回復しない。
あまりに現実離れした光景に、ついに気絶する者まで現れる中で——バスティアンは、その

諸手に『光』を灯した。
（……すぐに出せる便利な明かりがあって助かったが）
そんなことを考えつつ、彼はホールの隅から宝玉へ向かって走る影を――見つけた！
「ベルナデットぉおお！」
彼は叫び、その影を追った！
名を呼ばれた途端にびくりと震えた、彼の宿敵を。

会場は、阿鼻叫喚の巷になっていた。
「ちょ、ちょっとこれ、アマトルさん！」
『どうしたの、魔王様？』
ドレスの裾を持ち上げて、必死で走りながら、ベルナは頭上のアマトルに話しかけた。
この暗闇に乗じて、宝玉を手に入れる。それが、ネメシロたちの立てた作戦なのだ。
――しかしこれでは、やり方があまりにも派手だ。
「こ、これ、やりすぎではないですか!?　なんというか、最初の話では」
と言いつつ、彼女はぴょんと倒れたワイングラスを飛び越えた。

「もっと、こっそりやる予定だったというか……！　これでは、私たちが騒ぎを起こしたということがっ、バスティアン殿下に絶対に悟られてしまうではないですか！」
『いいんだよ、それで！　だってそうしないと、アマトルが困るもーん』
「よっ、よくないですよう！」
「――ベルナデットぉおお！」
横から聞こえたのは、怒り狂ったバスティアンの声。
ベルナはぞくりと背筋に寒気を覚えながらも、決死の覚悟で走り続けた。
ここまで来たら、もうやるしかないのだ！
「ベルナデット！　魔王！　お前……性懲りもなく、何をするつもりだ！」
真後ろを追走しながら言うバスティアンに、ベルナは振り返らずに涙目で答えた。
「ち、違うんです殿下！　これも世界平和の……魔界に帰っていただくためのことなんです！」
「何をわけのわからないことを!!」
苛立った口調で、彼は『光』を撃つ！
ベルナのほつれた髪の一筋が、『光』に撃たれて黒焦げになった。
「きゃっ、きゃああ！」
『魔王様、焦らないで！　あそこまで行けば、もう大丈夫だから！』
そう、しかし、宝玉はもうベルナの目と鼻の先だ。

（なっ、なんとか、あそこまで辿り着ければ……！）

ベルナは全力疾走しながら、一心に視線の先の、紫色の煌めきだけを目指して――

「っ、きゃッ！」

倒れていた椅子に蹴躓いて、つんのめった。彼女はそのまま、前のめりに床に倒れる。

しかし。

『魔王様……』

瞬間、彼女の頭から、髪留めから人へと変化したアマトルが飛び出す。

細い身体をするりと伸ばし、彼は大きくジャンプした。

『魔王様……いってきます！』

「あっ、アマトルさん！」

挨拶と共に、銀髪の少年は宙を駆け――

「よっと」

優雅にくるりと一回転し、宝玉のすぐ傍に、着地した。

流れるように速い彼の動きを、もはや誰も止められない。

アマトルは『ウェヌスの涙』を、むんずとその小さな手で摑んだ。

彼の目が、少しだけ潤む。

「おかえり」

懐かしそうにそう呟くと、彼は顔を真上に向け、大きく口を開けた。
摑んだ宝玉は、ゆっくりと、その大口に押し込まれていく。
「っ、な……!!」
バスティアンが『光』を放とうとするが、それももう遅い。
宝玉は、アマトルの口の中に、完全に収まってしまった。
彼は、ごくりとそれを飲み込む。
直後、彼の身体は紫色の光に包まれた！
「っ、す、すごい……！」
ベルナは思わず、目が釘付けになった。床から身を起こすことも忘れ、彼女は見入る。
光に包まれたまま、アマトルの短い髪が、肩までするすると伸びていく。
胸の三日月型の石が輝き、膨らみ、完全な球になった。それと同時に、彼の等身が伸びる。
十歳前後の子どもらしい身体が、見る間に成長し――
光が消えた時には、アマトルの外見は、衣服はそのままに、十四、五のそれになっていた。
「……ふうっ」
静かに息を吐き、彼は自分の広げた両手を――次いで、全身をしげしげと見つめる。
「やった……」
彼は、やや低くなった声で呆然と呟く。やがてその表情が、ぱぁっと明るくなった。

「やった！　やったやったぁ!!　アマトル、大復活ーっ！」
彼はその場でぴょんぴょんと飛び跳ねる。
小鹿のようにしなやかな足で、何度も床を蹴っている。
「見て！　魔王様。アマトルの姿！」
彼は長くなった髪をさっと掻き、もう片方の手を腰にやり、ベルナを見てにっこり笑った。
「元に戻ったよ！　力もどんどん溢れてくる……これでアマトル、もう誰にも負けないよ！」
「アマトルさん！」
（よかった……！）
これがアマトルの本当の姿。
成長した――いや、元に戻った彼の姿に、ベルナは不思議な懐かしさを感じると共に――
（……あら？）
なぜか、どこか身震いするような気配も感じた。
「……っ！」
「おっと聖女、動くなよ。お楽しみはこれからだ」
一方で『光』を放とうとしたバスティアンを声で制し、天井から降り立ったのはネメシロだ。
「アマトル殿、陛下のところへ！　そうすればきっと、陛下は記憶を取り戻されるはずです！」
続いて、ボウルの中からにゅるりと現れたのはウシュク。

「えっ……!?」
彼の言葉に、ベルナは驚愕した。
「う、ウシュクさん！　それって……！」
――しかし。
「……駄目だよ」
ベルナの言葉を遮ったのは、アマトルだった。
声音鋭く、何者にも口を挟ませずに、彼はゆっくりと頭を振った。
「駄目だよ、ウシュク様。ネメシロ様も……結局魔王様に頼るんじゃ、駄目だ」
「えっ……？」
戸惑うベルナ。ネメシロとウシュクも、訝しげな様子だ。
「だって、ね……それじゃ、誉めてもらえないんだもの」
そう言うと、アマトルはさっと視線を巡らす。
そう遠くない位置に、彼は事態をじっと静観している、軍服の男――アルベールを見つけた。
途端にアマトルの口の端が、細い月のように、にいいっ、と吊り上がる。
「ふふふ、アマトルは……アマトルはね。魔王様の一番になるんだ。誰にも負けない、一番に」
彼はその場で静かに両足を曲げる。
「だから――ね、アルベール」

その身体がぼん、と軽やかに跳んだ。
その動きの目にも留まらぬ速さに、誰も、バスティアンでさえも、反応できなかった。
美少年の身体のまま、魔剣はアルベールの顔面にその手を伸ばし――
「――その身体、ちょうだい」
アマトルの手が、触れる。刹那、激しい紫電が、ベルナたちの視界を奪った。

第五章　復活の大魔王

その場にいた全員が、動くことができなかった。
跳んだアマトルがアルベールの顔に触れた瞬間、激しい光が暗闇を裂き、目を灼いた。
くらんだ目が、ようやく薄暗い視界を取り戻した、その時には。
「……」
ただ、無言のアルベールだけが立っていた。
彼はその手に、禍々しい長大な剣――アマトルを握りしめている。
握りしめたまま、ただ、じっとそこに立っている――
アマトルもアルベールも、一言も声を発さない。
（何……？　何が起こったの？　なぜアルベール殿下が、アマトルさんを握って――？）
アマトルの真意がわからず、ベルナは呆然としていた。そして。
「兄……」
バスティアンの声は、掠れていた。

「兄、上……？」
「バスティアン……」
弟の呼びかけに、アルベールが答える。彼はかくんと面を上げ、こちらを見やる。
だがその瞳孔には、妖しい紫色の光が灯っていた。
「……バスティアン……絶望しろ」
アルベールはアマトルを、すっとバスティアンに向ける。
「お前の絶望する顔を、俺は、ずっと前から見たかった」
「……ッ！」
バスティアンの顔が、すっと青ざめる。
それを確認したアルベールの口の端が、にいいっと吊り上がり――――
『なんてねっ☆』
アマトルの声と共に、彼は首をこきっ、と傾げた。
「アマトル!!」
憤怒の形相で叫んだのはネメシロだ。
「アマトル、貴様ッ、何を勝手な真似をしている!? 己の役割を忘れたか！」
ネメシロは数歩前に出て、叫ぶ。
「完全な姿の貴様を魔王の手に取らせ、覚醒を促す――それが貴様の役目だったはずだ！」

「そ……それってつまり！　わっ、私を騙して……!?」
ベルナが聞いていたのは、アマトルの欠片を取り戻すというところまでだ。
彼女の向ける非難の視線に、しかしネメシロは頭を振る。
「そうでもせねば、我らの宿願は果たせぬ。魔界の解放も……千年前の魔王との、契約も……！」
「ネメシロさん……」
語る魔神の表情がいつになく悲壮に見えて、ベルナはかける言葉を失う。
その彼女の横に、静かに、ウシュクが歩み出た。
「アマトル殿は千年前の陛下がご自身の手で創り上げた魔剣。ですから、力を取り戻すきっかけとしては、最善だったはずなんですがねぇ」
彼はぽりぽりと頬を掻く。
「アマトル殿、何やってるんですかぁ。こんな勝手なことをされては、聖女じゃなくてもキレちゃいますよ？」
『ふうん。ネメシロ様たちはわかってくれないんだ？　アマトルのすごさをさ！　でも……』
と、アルベールに自らを構えさせながら、アマトルは言う。
『ねえ、魔王様っ！　魔王様は、誉めてくれるよね？』
「え……!?」

『やっと、やっと誉めてくれるよね？　ああっ、そうか！　口ですごいって言ってるだけじゃわからないよね、ごめんねっ！』

言うなり彼はアルベールに、ぞんざいに片方の腕で自らを振らせる。

アマトルの刃が銀色に閃き――――

「っ……!!」

刹那、ベルナは背後から聞こえた崩壊音に、振り向き、戦慄した。

アマトルの斬撃は飛び、遙か後方の空間を切り裂いたのだ。

王宮のホールの壁に、巨大な刃で刻まれたような傷が走っている。

暗闇の中で今なお慌て逃げ惑っていた人々が、さらなる恐怖により大きな悲鳴をあげる。

『……ふふっ』

満足げな声が聞こえた。

『これでわかったでしょ？　アマトル、すごく強くなったんだよ！　すごいでしょ？』

アルベールの口の端が、また不自然に吊り上がる。アマトルが微笑んでいるのだ。

ベルナは彼に、答えられない。口が震えて、話せないのだ。

それまで黙っていたバスティアンは、きっとベルナを睨んだ。

「……お前が……指示を、出したのか」

唇を噛みながら、彼は唸るように言う。

「……っ、違います！　私、アマトルさんにこんな……！」
『ああっ、待って！』
と、アマトルの声が彼女を制止した。
『待って、待って待って、魔王様！　まだだ、まだこんな程度じゃあ足りないよね？』
瞬間、アルベールの身体は手にした刃を閃かせた。煌めく銀の軌跡が中空に文字を刻む。
『仕上げはこう……っと！』
こつん、と剣の切っ先が床を軽く突く。と――――
「……っああ!?」
剣の切っ先が触れた箇所から、紫色の光が波紋のように広がり、ホール全体を包み込む。
その光に触れた途端、混乱の最中にあった人々が、ばたばたと倒れ伏していく。
事態を理解できないでいた貴族たちも、突然の闖入者に銃を構えようとしていた兵士たちも、盆を持ったまま右往左往していた給仕たちも――皆、同様に。
まるで切り倒された木のように、棒立ちになったまま、目を開けたままで、次々と。
カロリーヌも、王妃も、国王も、悲鳴もあげずに倒れ伏していく。
やがて――ホールで無事に立っているのは、ベルナたちだけになっていた。
ベルナはただ、目を大きく見開いたまま、呆然としていた。
『えへへへ。アマトル、絶好調だね。魔界にいた時と同じくらい、かな？　わかんないや。と

にかく今なら、なんでもできそうだよ』
その耳にはただ、アマトルの嬉しそうな声だけが届いていた。
（……っ、倒れた、方たちは）
彼女は混乱する思考を、なんとか繋ぎ止める。
（息は、しているわ。亡くなっては、いない。だけど……だけど）
早くなんとかしなければ、命の危険があるかもしれない！
震えるベルナの横で、風と水の四天王が、アルベールに……アマトルに近づいて行く。
「アマトル、いい加減にせぬと……！」
『ああもう、まだ怒ってるの!?　……ネメシロ様たち、邪魔だよ』
乱暴に言い放ったアマトルは、またアルベールに自身の刃を閃かせ、文字を宙に刻んだ。
刹那――ネメシロとウシュクの姿が、ホールから掻き消える。
「えっ……！」
『ふう、これでやーっと静かになったね』
ひゅう、とアルベールの口から息が漏れる。
彼の指が、つううとアマトルの刃を撫でた。

『アマトル、結界を張ったんだ。邪魔なネメシロ様たちは、外に追い出しちゃった。二人とも、いっつも口うるさいんだもん。魔王様を一人占めしたい気分の時だってあるのにさぁー』

アルベールは右腕のアマトルを、切っ先を下にしてガンと振り下ろす。

刃はわずかに床に刺さり、固定され——人間の姿へと変化した。成長したアマトルの姿に。

美少年の姿となったアマトルは、気持ちよさそうに伸びをしてから、ベルナに微笑みかけた。

「ねえ、魔王様！　アマトル、やっと本当の姿に戻ったから……本音で話していいよね？」

「え……？」

この状況の中で、まるで世間話でもするように気軽なアマトルに、ベルナは怯える。

けれども彼は構わずに、うふふと笑ってから言った。

「あのね、アマトル……ずっと不安だったんだ。千年前に魔王様のお役に立てずにやられてしまってから……欠片を奪われて、半端な姿になってしまってから。魔王様に見捨てられたらどうしようって。嫌われていたらどうしようって」

「わ、私はあなたのことを嫌ってなど……！」

「わかってるよ！　そう言ってくれるよね。魔王様……今の魔王様、とっても優しいもんね」

俯いたまま動かないアルベール、歯噛みしているバスティアンを置いて、アマトルはゆっくりとベルナに歩み寄る。

「でもね。正直アマトルは、ちょっと残念だったんだ」

「え……？」

「だって魔王様が何をすれば喜んでくれるのかわからなかったから。それで、どうすれば、誉めてくれるかわからなかったからさ。最初はネメシロ様たちの言う通りに、アマトルが魔王様の力を呼び覚ましてもいいかなって思ってた……ふふふっ、でも、もっといいやり方、アマトル思い出したんだ！　少し遅くなっちゃったけどね」

ベルナとの距離が数歩に縮まったところで、アマトルは立ち止まる。

「完全体のアマトルは、金属と、それを使って争う人間の心を支配できる。千年前は、よくやってたんだ。アマトルの結界の中に人間の軍隊を閉じ込めて、心を操って同士討ちさせるの！」

彼は虚空を見上げ、笑う。

楽しかった遊びを語る幼児のように、あどけない目で。

「本当、面白かったよ～！　今まで仲間だなんだって薄っぺらいこと言ってた連中が、アマトルの力でいがみ合って互いにザクザクザクザク死ぬまで刺し合ってるのとかさ！　結界の外に出て、はっと我に返った奴が、自分がやったことに気付いて急に取り乱して、自分で自分を殺しちゃったりとかさ！　それでね……アマトルがそうしたらね、魔王様はよく……」

ふいにアマトルはベルナを見る。

「誉めてくれたんだ。よくやった、って。だから今度も――ね？　言わなくてもわかるでしょ？」

「アマトル、さん……！」

こちらを見たアマトルのどろどろの目――濁りを湛えた瞳に、ベルナは背筋を凍らせた。

あの無邪気な顔とは程遠い、あまりの不気味さにベルナは思わず顔を伏せる。

あれは魔物の顔。純粋な悪意に満ちた、人の恐怖を甘露のように味わう魔物の顔だ。

（……こうなることは、わかってたはずだわ……いつかは、こういう日が来るって……！）

彼女は、震えながら思った。

（本当なら、わかってたはずなのに。私、私……何もかも、甘く見てたんだわ）

ただ流されるようにここまで来てしまった自分を、ベルナは愚かだと思った。

けれどもそんな彼女の様子をまるで気にせずに、もはや強力な魔物として力を無尽に振るうアマトルは、楽しそうに言葉を重ねている。

「ねえ、魔王様！　本当にこのアルベールって奴は拾い物だったね。こんないい肉体があったなんて、全然知らなかったもんね！　あの噂話してた連中は、お手柄だったなあ。切り刻むのは、最後にしてあげようっと！」

「……ふざけるなっ！」

強く床を踏みしめながら、バスティアンは叫ぶ。

その手から清らかな『光』を放ち、彼はアマトルを襲う！

だが地の四天王は軽やかな身のこなしでそれを避けると、憎悪の目で聖女を見た。

「うるさいっ、邪魔するな！　今、せっかく魔王様と二人で話してたのに！」
「黙れ、お前の好きにさせてたまるか！　神の託宣のもと、私は……私は！」
「はぁ？　神だってさ！　よく言うよ。千年前に魔王様をあんな卑怯な手で倒しといてさ！　何が神だ。何が聖女だ！　アマトルが魔王様のことをどんなに大切にしていたか、千年間、魔界でどんな気持ちだったか、わかりもしないくせに！」
ひらりと少年の身体が飛ぶ。彼は空中で再び魔剣に戻ると、アルベールに自らを握らせた。
『……だからお前を、絶望させてやるよ。千年前のアマトルみたいにさ』
途端にバスティアンは、くっと歯噛みする。
『ははっ。どうしたの？　聖女様？』
アルベールの身体をくねくねと操って、アマトルは挑発する。
『アマトルはここだよ～？　どうして何もしてこないのさ？　いつもみたいにその神様から授かったビカビカを撃てばいいじゃない？　ねぇ？　ねぇ？』
「くっ……！」
『ひゃはははは！　見てよ魔王様、こいつの顔！　理解が早いのだけは誉めてあげようかなぁ』
「ど、どういうことです……？」
震える声でベルナが尋ねると、アマトルはアルベールの身体を借りて、ばっと両足をクロスさせ、ポーズを決めた。

『ふふっ、わかんなかった？　この男なら、聖女と同士討ちさせるのにぴったりでしょ！』

「あっ……！」

ベルナの口から、呆けた言葉が飛び出る。アマトルはアルベールの顔でにこっと笑う。

『こいつは聖女の肉親で、しかも聖女はこいつを苦手に思ってる。こいつ自身も、聖女の奴に対して「黒い気持ち」を抱えてたみたいだし？　乗っ取るのは簡単だったよ？』

「くっ、っ……！」

バスティアンの顔が、これ以上ないほど悔しそうに歪む。

彼は己の唇を、血が滲むほどの勢いで噛みしめた。

その手に、強烈な『光』が宿り、激しく輝き――しかし、ほどなくして消える。

『あはははは、そうそう、そうだよねぇ！　こいつの身体はもうアマトルのものだもんねぇ！　だからお前が無理やりこいつを攻撃したらさ、きっとこいつの身体も焼けちゃうよぉ！』

魔剣はくるくるアルベールの手の中で踊った。

『うふふふ、ふひひひ！　きっとこいつの身体がもっと傷だらけになっちゃうよ！　いや、真っ黒によく焼けたら傷跡なんてわからないかなっ？　ふひひっ、ウェルダンだよ、ウェルダン！　ウェルウェルダンダン、うぇるだんだぁ～ん』

はしゃいだアマトルの声と共に、壊れた操り人形のようなステップをアルベールは踏んだ。

『これで魔王様は誉めてくれるよ♪　これで魔王様はアマトルが一番だって言ってくれるよ！

だって今までそうだったもの、アマトルが頑張ったら誉めてくれるもの！　それで……』

彼は突然楽しげに歌うように語るのをやめ、じっとベルナを見る。

『それで千年前のことも――許してくれるよね？　魔王様、本当は怒ってるんだものね……？』

感情の乱降下。アルベールの片方の目から、つうと涙が零れた。

（……っ……！）

その泣き顔を見て、ベルナは、臓腑が凍りつくように感じながらも、ようやく理解していた。

彼女が、アマトルのことを思い出せなかったこと――彼が魔界に帰ることを、悲しまなかったこと。

それが、千年前に魔王を救えなかったという彼の中の自責の念とあいまって、彼は狂気を孕んでしまったのだ。いや、最初に会った時から、もうおかしくなっていたのかもしれない。

すべては、魔王のために――

（……私の、せいなんだわ）

ベルナがもっと、はっきりと感情を言葉に表わせていれば。もっと余裕があったなら。

四天王たちに負けないだけの、力強さを持っていれば。

こんなことは、起こらなかったのかもしれない。そう考え、目の前が一瞬真っ暗になる。

他方で、アマトルはベルナを見て――いや、もう彼の目は「ベルナを」見てはいないのかもしれないが――あはは、と嬉しそうに笑う。

『魔王様が、早く聖女を殺せ、だってさ！　うん、わかった！』
彼はひゅんと自らをアルベールに翻させ、構えさせた。
『それじゃあ、聖女……』
アルベールは、突きの構えをとった。
『今からさっさと……』
彼の足が床を蹴り、達人のごとく鋭い突きが、バスティアンに迫る。
『死ねぇえええっ!!』
咆哮と共に、アマトルの刃がバスティアンにぶつかる！
しかしそれは、彼の身体には届かない。
聖女の力が溢れる『光』の壁となって、彼の身を守っているのだ。だが。
『あはは！　焦げてる！　お前のお兄さんの身体が焦げてるよぉ！　焦げ焦げだねぇ！　びじゅじゅじゅじゅうううううって音立ててさぁあああ！』
「っ……く！」
バスティアンが何もしないうちから、アマトルに支配された兄の身体は『魔』と認識され、神の力に灼かれている。
『ほらほらほらぁっ、早くその光を引っ込めなよ！　それとも、それって自分の意志で引っ込められないの？』

アルベールの肌に新たな傷が刻まれていくのを間近でまざまざと見せつけられ、バスティアンの瞳に絶望の陰が差す。
その光景が網膜に焼きついた瞬間、ベルナは――――
（私は……！）
心の奥底で、何かがトクンと動いたのを感じた。
（私はこのまま、ここで見ていればいいの？　――いいえ！　そんなわけないわ）
ぐっ、と彼女は奥歯を噛みしめた。
（ここで私が戸惑って、挫けていても、なんにもならない……！）
かつての彼女なら、あるいは、ここで泣き叫んでいただろう。
けれども、ここまで進んできた彼女のここ数日の経験が、彼女を少し強くしていた。
今のベルナの心で何よりも勝っているのは、恐れではなく、決意だった。
（やる前から駄目だ、なんて思っていたらいけない……）
両足に力を籠める。
（それなら、私が……）
彼女は、ぎゅっと両の拳を握った。
（私が、なんとかしなくては!!）
きっ、と眼前を睨む彼女の瞳に、強い意志の光が灯る。

ベルナは意を決し、辺りを探った。そして――

「ええいっ！」

咄嗟に近くに転がっていたワイングラスを、アルベールに投げつけた！

『……っあ!?』

カシャン！　ベルナの投げたグラスは、軽い音を立てて彼の顔面に直撃し、割れる。

不意をつかれ、彼の……アマトルの動きが止まった。

「殿下！　今のうちです、こっ、こっちに!!」

「……ベルナデット……？」

「急いで！」

ベルナはその隙に、強くバスティアンの腕を引っ張り、駆け出した。

バスティアンは僅かに逡巡した後、彼女についてホールを出る。

『……あれ、魔王様？』

アマトルはしばしそれを追うこともなく、呟いた。

そして、割れたグラスで新たについたアルベールの顔の傷をそっと撫で、指についた血を、じっと見つめていた――

「はぁ、はぁ」

ベルナとバスティアンは立ち止まり、息を吐いていた。
彼らが辿り着いたのは、王宮のエントランスホール。そこには、大量の人間が倒れていた。
使用人、貴族、その従者――気絶しているだけとはいえ、見ていて気分のよい光景ではない。
アマトルの張った結界は、王宮全体に作用していたのだ。
いや、このまま彼を放置していたら、いずれはこの国全体が結界に閉ざされてしまうかもしれない。完全体になったアマトルの力は、あまりにも強力だった。
（ひどい……早くなんとかしないと）
王宮の扉を開けようとしても、それはびくともしなかった。
「……ベルナデット」
彼女の後ろで、静かにバスティアンは言った。
「お前……一体、何がしたいんだ？」
振り返ったベルナに、彼は余裕のない顔で詰め寄る。
「お前は魔王なんだろう!?　お前の配下がしでかしたことは、すべてお前の望みの通りじゃないのか？　なぜ……私を助け出した！」
「私はっ！」
ベルナはきっぱりとバスティアンに言った。
「私は、確かに魔王の生まれ変わりで――いずれ、世界を滅ぼすのかもしれませんけど。今は

まだ、何もできないんです。この前も、四天王の皆さんが戦っていただけなんです。それでも」

かつ、こつ、とゆっくりこちらに近づいて来る足音が聞こえる。

逃げ出したくなる気持ちを抑えつつベルナはそちらを向き、見据えながら、続けた。

「それでも私は……いっ、今の私は、こんなこと望んではいません！　それにアマトルさんを止められるのはきっと、私だけなんです。だから……アマトルさんに、話をつけます。私にしかできないことだから、私がやるんです！」

「お前……」

バスティアンは半ば呆然として彼女を見た。ベルナもまた彼の目を見る。

二人はしばし、そのままじっと見つめ合う。

「……わかった」

彼はそう言って、ゆっくりとベルナの隣に並んだ。

その表情が、あの傲然とした笑顔――「王子」ではなく、「聖女」としての顔に変わった。

「手助けしてやる。ただ、勘違いするなよ。私はお前を助けるわけじゃない」

彼の諸手に、力強い『光』が宿った。

「兄上を……王宮の皆を救うために、一時的に仕方なく共闘してやるだけだ。いいな？」

「はっ……はい！」

ベルナが、大きく頷いた時。

『あっ、魔王様！　よかった、ここにいたんだね！』
楽しげな声と共に、アマトルがやって来た。
彼はアルベールに己を構えさせ、ふふふと笑ってから告げる。
『いきなりいなくなるから、心配したよ。ちょっと待っててね。すぐ終わらせるから！』
「……まっ、待ってください！」
バスティアンの前に歩み出て、腕を広げ、ベルナは声を張り上げた。
「アマトルさん、もうこんなことやめてください！」
『……え？　……どうして？』
あどけない声が、エントランスに響く。
『魔王様、そこどいてよ！　聖女をいたぶれないよ！』
「そんなこと、しなくていいんです！　わ、私は……」
ベルナはその三白眼にありったけの力を籠めて、叫んだ。
「私は、アマトルさんにこんなこと、して欲しくありません！　アマトルさんは間違ってます、というか、ええと、こんなこと……やったら、いけないと思います」
『え、え……っ!?』
素っ頓狂な声が、戸惑いに変わる。
『ま……魔王様、何言ってるの？　もしかして、勝手なことしたから怒ってるの？』

「おっ、怒っているのではないです、アマトルさん。今まで本当にありがとうございました。でも、今すぐアルベール殿下と……倒れている方々を元に戻してください！　お願いします！」

ベルナはきっぱりとアマトルに言った。彼女の姿を、バスティアンはじっと見つめている。

アマトルはベルナの言葉に、しばし口を閉ざした。

永劫のようにも思える沈黙が、その場を満たす。

ややあって、アマトルは深く長く、呆れ返ったかのように息を吐いた。そして、口を開く。

『魔王様……どうして？　どうしてそんなこと、言うの？　――ありがとう、はもう、聞き飽きてるんだよぉお！　アマトルが欲しいのは、誉めてくれることだって言ったでしょ!?』

「えっ……」

『魔王様は……』

きりきり、と奇怪な音がする。それはアルベールの口元から聞こえていた。歯ぎしりだ。

彼の身体を借りて、アマトルが歯ぎしりしているのだ。

『魔王様は！』

涙声でアマトルは絶叫した。

『魔王様はそんなこと言わない！　アマトルのことを誉めてくれるもん！　やめろなんて言わないよ！　アマトルが間違ってる、なんて……』

アルベールの腕が、思い切り剣を床に叩きつける。

それだけで床に巨大な亀裂が走り、紫色の雷光がちらちらと舞った。
『そんなことを言うのは！　魔王様じゃない!!』
「アマトルさん！」
ベルナは呼びかける。しかしもはや、彼女の言葉は届かない。
『そっか。そっかぁ……わかった』
こくこく、とアルベールの首が頷いた。
『魔王様、おかしくなっちゃったんだぁ』
「えっ……？」
ベルナとバスティアンの驚く声が重なるが、アマトルはそれに構わずに、歌うように言った。
『だってアマトルは今まで、魔王様のことばっかり考えてきたんだよ？　そのアマトルがすることなんだから、魔王様は嬉しいはずでしょ？　聖女が絶望して死ぬのが望みなんだよね？　ねえ、そうでしょ？　そうでしょ？　……そうだよね？』
「……ベルナデット、まずい。私に任せろ、下がれ」
バスティアンが低く囁く。
『ねえ、じゃあさ、もしも、違うっていうなら……』
アマトルの声がけろりと言う。
『アマトルが、魔王様を――殺してあげなきゃね』

うふふ、と笑い声が混じる。
「なっ……!?」
『アマトルが魔王様を殺せば、魔王様は目を覚ましてくれる。それでもう一回転生し直して、今度こそ、きっと強い力で生まれてくれる。それで……アマトルを、誉めてくれるんだ』
それはとても道理とは呼びがたい、滅茶苦茶な論理だ。だが、アマトルの中では正論なのだ。
『魔王様を殺して、魔王様を助けるなんて……アマトルは働き者だなぁあ!!』
アルベールの身体はアマトルを高く振り上げ、勢いをつけて振り下ろす。
人智を超えたその動きは、魔剣が操っているからこそ可能なものだ。
そのあまりの速さに、咄嗟にベルナは動けない。
（やられる……!?）
ベルナはぎゅっと目を閉じた。――だが。
『ぎゃあっ！』
閃光が剣に炸裂し、アルベールの身体はたたらを踏む。
「……私を忘れていたか」
ニヤリと笑いながら、バスティアンが言う。
「先ほどはつい動じてしまったが……その気になれば、お前にだけ『光』を当てることくらい、私には造作もないことだぞ」

彼はどうやら、指先に『光』を集中させて放ったようだ。
その目には完全に元の生き生きした色が蘇っていた。
「ベルナデット、お前は下がっていろ！　こいつは、私がなんとかする」
『……！　ふざけやがってぇえええ！』
咆哮をあげ、アマトルはアルベールの肉体全体に紫電を走らせた。
瞬間、エントランスに、わらわらと人影が集まる。それは、銃や剣を手にした兵士たち。
全員意識を奪われた虚ろな目で、じっとベルナたちを見つめていた。
『ふふっ。今のアマトルなら、これくらい簡単だよ。言ったでしょ？　戦う人間を操れるって』
そう言うアマトルは、きっとニタニタ笑っていることだろう。
『全員！　魔王様を狙って！　綺麗に真っ赤に染めたげて！』
「う、あー……」
了解、ともとれない声をあげ、兵士たちは一斉にベルナに狙いをつける。
「まずい！」
バスティアンは舌打ちした。
いくら兵士たちが銃で撃ち、斬りかかって来ても、彼には『光』があるから平気だ。
だがベルナは――！
「っ……！」

一方ベルナは、急激に頭が冴え渡っていくのを感じた。
彼女は先ほど交わした会話――ホールに潜入する前、ウシュクと交わした会話を思い出す。
――僅かな水でもあれば、わたくしはすぐに――
（……そうだわ！）
彼女は振り返る。数歩先に、机に飾られた大きな花瓶があった。
花が活けられている。ということは！
「撃、てーっ……」
間延びした声と共に、兵士たちが引き金に手をかける。その瞬間に。
「――ウシュクさん!!」
水の四天王の名を呼びながら、彼女は花瓶を倒した。
高価な花瓶は無数の破片になって散らばる。
花瓶の中の水が床にぶち撒けられ、飛沫が宙を舞った。
そして、その水は眩いばかりの光を放ち――
「はーい、こんにちはー!!」
水飛沫と共に現れたのは、鎧の男――水のウシュクだった。

「ウシュクさん！」

ベルナは満面の笑みを浮かべた。

「陛下、お呼びくださり光栄です！　いやぁ、何もできない顔して瞬時にわたくしを召喚するとは、なかなか……とっ！」

ウシュクの身体が、瞬時に水に変化する。

その水は盾となって、ベルナに向かう無数の銃弾を受け止めた。

直後、彼は元の鎧姿に戻る。

「だっ、大丈夫ですか!?」

「もちろんです陛下！　……やれやれ、あなたもバカですねぇ。単なるニンゲンの武器など、わたくしに効くはずがないのに」

ウシュクは、アルベール――アマトルの方を見て、言った。

その顔は変わらずのほほんとしたままだったが、目には妖しげな光が宿っていた。

彼の額から、まるで水面を割るように、銃弾がぽろりと零れ出る。そして。

「……その通りだ」

水の『門』を通って、こちらにやって来た人影がもう一つ。

不機嫌そうな顔をした、ネメシロだ。
「ネメシロさん！　来てくれたんですね」
「……フン。まさかこのようなことになろうとはな。だが、咄嗟に我らを呼び出す機転を見せた、その点に関してだけは誉めてやる」
そう言ってそっぽを向くネメシロは、それでも、どこか嬉しそうだった。
『ああっ、ウシュク様にネメシロ様！　何してるの？　どいてよ！』
アルベールの身体を乗っ取ったままのアマトルが、『光』を掻い潜り、目の前に立っている。
ウシュクも、ネメシロも、敵意の籠った視線で彼を見ていた。
「よくも計画をぶち壊してくれたな。我の算段に従えば、こんな大ごとにせずとも済んだものを……。しかも魔王の命まで狙うとは、どういうつもりだ？」
『魔王様に、もう一度生まれ変わり直してもらうんだよ！　わかるでしょ？』
「フン！　魔王が永らえることを最も望んでいたのは、貴様ではなかったか？」
『そうだよ。だから、魔王様を助けるために魔王様を殺すんじゃない！　そうしないと、誉めてもらえないんだもの』
狂った同志を、ネメシロは不快そうに目を細めて睨んだ。
「……此奴が転生するまでには千年もの時を要した。これ以上の手間は、賛同しかねる」
『裏切り者！』

アマトルは、短く吐き捨てる。
「アマトル殿、あなた、何を話しているのですか？」
まったく意味がわからないのですが、とウシュクは問う。
「魔王陛下は、ここにいらっしゃいます。そして、臣下であるあなたもわたくしも、そのお傍にいます。それで、なんの不服があるんです？」
『ウシュク様は、平気なの？　魔王様が誉めてくれないのが、平気なの!?』
「平気ですよ、もちろん。全然平気ですねえ」
ウシュクは当然のように言った。
「だって、わたくしの命は、陛下に救っていただいた命ですから。何があっても陛下のために、わたくしは生きるんです。二度目の生とは、そういうものでしょう？」
『……バッカみたい』
ウシュクの言葉を、しかし、アマトルはため息と共に一蹴する。
『いや、違うね。本物の馬鹿だ。ネメシロ様も、ウシュク様も……魔王様も、何もわかってない。何が魔王様のためになるのか、全然わかってない!!　アマトルの気持ちだって……！』
アマトルから、ドス黒い気が発散される。
強い悲しみや憤怒の籠もった、腹の底を抉られるような、不快な気配だ。
「よせ、アマトル」

と、ネメシロは腕組みをして言う。
「貴様、まだわかっていないようだな。――貴様が張ったこの支配結界は聖女の結界の力を弱め、貴様の力をかつてと同等にしている。だが、それは――」
「ここにいる、わたくしたちだってそうなんですよぉ」
ネメシロとウシュク、二人の身体から、すさまじいまでの魔力が噴出する。
ベルナとバスティアンが、思わず後ずさるほどの強い魔力だ。
ベルナは、思い切って彼らに言った。
「ネメシロさん、ウシュクさん……」
彼女は頭を深く下げた。
「お願いします……助けてください！」
「魔王陛下、それは」
激しい青い光を纏ったまま、ウシュクはガラス玉の目で問う。
「それは、ご命令ですか？」
「え？」
「ご命令ですよね？」
「え、あ、と……」
ベルナは一瞬戸惑い、そして――頷いた。

「いやっほぉおおおう！」
　ウシュクは飛び上がって喜んだ。
「ご命令！　陛下のご命令ですよネメシロ殿！」
「ふん……そうだな。千年ぶりになるか」
「どれだけ待ったことでしょうね！　こういうのをニンゲンは『感動的』と呼ぶのですよね、ねっ！　ネメシロ殿！」
「痛っ、痛い！　小突くのをやめろ馬鹿者！　行くぞ！」
「はい、そうしましょうねぇ！」
　言うなりウシュクがふっと頭を下げると、彼の頭が揺らめき、変化する。
　鎧姿はそのままに、彼の頭部は人間の青年のそれから、馬の頭蓋骨へと変化した。
　次いでネメシロの姿が宙に浮かぶと、彼は瞬時に巨大なワタリガラスに変化した。
　額に第三の瞳を持ち、金の冠を被った、恐るべき魔神の姿だ。
『……ウシュク様、ネメシロ様……』
　アマトルの声が一瞬怯み、そして、叫ぶ。
『面白い……やってやるッ！』
「こちらの台詞だ!!」
　カァ、と一声高く鳴いたネメシロが、黒い突風を呼ぶ。いや、それはもはや嵐だ。

猛り狂った風は触れるものをことごとく黒く腐らせながら、アマトルに迫る！
アマトルはアルベールの身体ごとそれをなんとかかわした。
だがその時には、ウシュクがすぐ隣に迫っていた。
「愚かな我が同志よ」
ウシュクの口から漏れたのは、今までとは違う、重々しく恐ろしい声。
「我が凍れる腕で、永久に眠るがいい!!」
彼の突き出した両手の間に、青白い光の球が現れ――爆ぜる。
『ぐあああっ！』
アマトルの刀身が、そしてアルベールの腕が、白く凍てつく。
もはや今までのように、自在に動くことはできない。
エントランスの天井も、床も、ネメシロとウシュクたちの撒き散らした滅びによって、瞬く間に破壊されていった。
倒れている人々が何も被害を受けていないのは、ひとえに、バスティアンが『光』を集中させて守っているからに他ならない。
（すごいわ）
ぽかんと口を開けたまま、ベルナは心中呟く。
（これがネメシロさんたちの、四天王の本当の力――！）

ベルナは心の奥底で、この光景を見て喜んでいる自分を感じた。――と、その時だ。
『ぐぅぅ……うっ！』
アマトルは唸り、そしてアルベールの凍てついた腕を無理やり動かす。
『……動くな！』
彼は叫んだ。その切っ先を、アルベールの首元に突きつけながら。
「やめろっ！」
瞬時に彼の意図を理解したバスティアンが、絶叫した。
『ふふっ。なんだかこのままじゃ、アマトルは殺されちゃいそうだしさぁ。その前に』
アマトルがほくそ笑んでいるのが、声だけでわかる。
『またいいこと思いついたんだっ。やっぱりお前が今ここで、大人しく死んで。でないと……ひょっとしてこの後、いくらネメシロ様たちが強くても』
と、アルベールの身体は飛び退り、ネメシロの風を避けながら言う。
『はずみでアマトルが、お兄さんを殺しちゃうかもぉ？』
「……！」
『聖女』の目に、恐れの色が浮かぶ。
『えへへ、最初からこうしてれば早かったんだね！』
魔剣はさらに笑う。それは絶対的優位に立った、見下しの笑いだ。聖女の絶望が嬉しいのだ。

突然のことに、ベルナはどうすればいいのかわからない。バスティアンは――

「……っ」

彼は、小さく唸った。そしてゆっくりと視線を、操られている兄に向けた。

次に、今なお倒れている人々に。――最後に、ベルナに。

その目がいつにも増して清らかな青に輝いているように見えて、ベルナははっとした。

「ベルナデット」

「は、はい」

「……私はこれから自殺する。後は頼んだぞ」

「えぇっ!?」

驚くベルナを尻目に、彼は懐から護身用の拳銃を取り出し、構える。

銃口の向く先は、彼自身のこめかみだ。

「……こうすれば、一番早く事が済む。幸い、自殺の仕方くらいは知っている」

聖女の『光』は、それが他者からの悪意である限り、常にそれを弾く。

けれども、自分自身への攻撃は――

「で……殿下！」

ベルナは必死で叫んだ。

「殿下っ、駄目です！　そんな、自ら命を……！」

「ふっ、魔王のくせに聖女の心配をするのか？　お前は」
彼は言う。ただその目は、どこか穏やかに微笑んでいた。
「兄上と、王宮中の人間と……ついでに、お前の命。それを救うために必要なのが、ただ一人、私の命なら……安いものだ」
今までに見せたどの表情とも違う、美しい笑顔で彼は言う。
（殿下が自分を犠牲にして、それで皆が助かるなんて――）
その姿になぜか、ベルナは強い既視感を覚えた。
儚げながらも強い意志を秘めた、聖なる存在。
そんな「彼女」が、こうして自らを差し出そうとする姿を、ベルナは確かに――
（どこかで、見た）
そう思った途端に、心臓が、かつてないほど、どくんと大きく鼓動した。
「かつて……私を守って、死んでいった者たちも。その時傷ついた兄上も。私の命がこうして使われたというなら、満足してくれるだろうしな」
彼の目には、過去の忌わしい記憶が浮かんでいるのだろう。
「……じゃあな、魔王ベルナデット。お前は……思っていたより、ましな奴だったのかもな。人間を、惨い目にだけは遭わせてくれるなよ」
「殿下……！」

バスティアンの指が、ゆっくりと引き金にかかる。
『うふっ、ふふふ……そうか、聖女は自殺できるのか。それなら話は早いね、ねっ、魔王様』
アルベールの身体を借りたアマトルの口の端が、にぃ～っと細い月のように吊り上がる。
ネメシロたちは突然の事態に動けずにいるようだ。
そうだ、彼らにとってみれば、聖女には死んでもらったほうが都合がよい。
けれど、ベルナは、それでいいのか？　――いいわけがない。
それはベルナの中に生まれた、ほのかな想い。
彼女自身も気付かないままに息づいている、想いが導いた結論だ。
（――助けなくては）
心の奥から、言葉が湧き上がってくる。湧き上がって、喉の奥からせり上がってくる。
『さよなら、聖女サマ……お前の魂は、ちゃんとアマトルが壊してあげるから』
アマトルが言う。
バスティアンの指に籠められた力が、徐々に強くなる。彼の目が、閉じる。
「っ、駄目です、殿下！」
ベルナは思い切り頭を振り、そして駆け出した。
一歩ごとに、胸の鼓動が速くなる。
この状況を、己の力で、なんとかしたいと思った。

自分にしかできないこと、それは、今この瞬間にしなければならないことだ。
そして、何より――――何より、強い想い。
「私は……」
ベルナの口から、勝手に言葉が生まれ出た。
「私はあなたを、失いたくない!!」
ベルナは叫んだ。想いの丈を、迷うことなく、腹の底から。

刹那――――
どくん。彼女の心臓が、一際激しく脈打つ。

「っ……!」
ベルナは、よろめいた。目の前がくらりと歪む。肺腑に吸い込んだ空気が、熱い。
手足の先がしんと冷たくなり、それなのに、意識はどんどん冴え渡っていくようだった。
「あ、あ……」
視界がさらに歪む。網膜に映る光景がぐるぐると回転し、溶け合う。
周りにあるすべてが、ベルナ自身を構成するすべてが、ことごとく混沌へと還っていく。
石を投げ込まれた湖面のように、心がゆらゆら揺れ、何か今までに覚えたことのない感情が、

奥底から静かに浮かび上がってくる。
（……ろ……）
全身の血の流れに乗って、得体の知れない黒い力が、ベルナの身体を巡る。
（……きろ……）
彼女の中の様々な感情が、力の波に押し払われ、押し潰され、消えていった。
（起きろ……）
それと同時に頭の中で、一つの言葉が輪唱のように重なり、何度も何度も響く。
（起きろ！　起きろ！　起きろ！　――私はここにいる!!）
「うぁあああああああーっ！」
胸を突き上げる衝動のままに、ベルナは叫ぶ。
その瞬間――彼女の中の、『ベルナデット』が消えた。

「すぅ……ふぅうー……っ」
『彼』は、千年ぶりに外界の空気を吸い、吐いた。
久しぶりに取り戻した身体は細くたおやかで、かつての彼の力強い姿とは程遠い。
けれどもそんなことは関係ない。魂の内より滾々と溢れ出る魔力が彼の全身にみなぎり、指

の先にまで満ちていた。

「――――アマトル！」

彼は叫ぶ。

王宮のホールを揺らし響いた声に、その場にいた全員が動きを止めた。

低く、威厳に満ち、雷鳴のように恐怖を煽るその声は、しかし、年若い少女の声だった。

「……ベルナデット？」

バスティアンは銃を下ろして振り返り、思わず誰何の声をあげた。

目の前にいるのは、間違いなく、彼の知る少女だ。……そのはずだ。姿形が大きく変わっているわけではないからだ。

だがその纏う風格は、かつての少女のそれとは遠くかけ離れたものになっていた。

纏め上げていたはずのダークブルネットの髪はいつの間にか下ろされ、風もないのにゆらゆらと揺れている。

彼女が一歩歩くごとに、黒い炎が床を焦がし、静かに空間を侵食していった。

緑色の瞳は爛々と輝き、吐き気をもよおすような殺気が、彼女の全身から放たれていた。

そして何より、今まで俯きがちだった顔を上げた、悠然たるその姿はまさに――――

「魔王陛下！」

人間の姿に戻り、ウシュクが平伏する。その隣でネメシロもまた人の姿となって、彼女に



跪いていた。

（魔王……やはり、貴様の力は……）

――なるほどな、と人知れず呟きながら。

「アマトル」

『魔王、様……？』

周囲の驚きなど意にも介さず、魔王はただ静かに、アマトルの元へと歩んで行く。

表情をぴくりとも動かさず、ただ眼前を見据えながら。

ネメシロの風で腐った床も、ウシュクの術で凍てついた床も、気にも留めずに彼は足を運ぶ。

その威容に、何者も、その場を動くことすらできない。

「アマトル。何を戸惑う。私の顔を見忘れたのか？」

『そんな……！』

剣の柄に嵌め込まれた石から、涙の雫が零れ出る。

『そんなわけないよ、魔王様。やっと……やっと、会えた……』

「ならば――」

嬉しさにむせぶアマトルの声を遮り、魔王は両手を前に突き出し、拳を作った。瞬間。

『うぎゃぁあっ!?』

ただそれだけのことで、彼の手中から暗闇が、焔のように揺らぎ噴き上がる！

光を呑み込むその「闇」は、アルベールの身体ごと、アマトルを吹き飛ばした。

魔王が一息も入れずに行使した、強大なる魔の力。

その衝撃は空を裂き、王宮のガラスを叩き割り、耳をつんざく残響を残す。

およそ人間の身ならば不可能なその力に、バスティアンだけでなく、四天王たちも息を呑む。

衝撃でアルベールの手がアマトルから離れ、魔剣は中空に放り出される。

「……ふむ。小娘の肉体では、これが限界か」

魔王は淡々と、しかしどこか苛立ったような声音で言った。

「操られている男の頭部ごと、吹き飛ばすつもりだったが」

不服そうな言葉を漏らしつつも、アルベールがどたりと仰向けに倒れるのと同時に、魔王は、魔剣の柄を握りしめていた。

「アマトル。服う者には乳と蜜を。逆らう者には血と禍殃を。それが、千年前より変わらず私が下した唯一絶対の規範だ」

魔王は無表情だ。しかしその瞳で憤りの炎が、激しく燃え上がる。

「貴様は逆らったな。一時の感情に酔い狂い、私に手向かったな？　――誉めて欲しい、だと？」

『……は、はい……ごめん、なさい……』

魔剣から聞こえる声が震えている。

魔王は右手で柄を握ったまま、左手をゆっくりと、剣に嵌められた宝玉へ伸ばす。

この宝玉が、アマトルの力の源であり、本体だ。

それに触れたまま、魔王は口を開いた。

「だがアマトル。貴様は私のためにと愚を犯した。よかろう、その望み通り……貴様ほどの愚か者には、褒美を与えてやる」

左手が宝玉に触れる。

「――私の手で、楽にしてやろう」

言葉と共に、魔王はその手に「闇」を集中させる。

彼の「闇」の力は破壊の魔力。ありとあらゆるものを拒絶する、災厄の力だ。

なんの抵抗もなく、宝玉に、ぴしぴしと細かい亀裂が走った。

『――ああっ！』

瞬間、アマトルは何かに気付いたかのような声をあげた。

バスティアンの耳に届いたその声は、子どものような、無邪気な声に戻っていた。

『魔王様！』

アマトルの声――憑き物が落ちたかのように可愛らしい声が、響く。

『魔王様、そうか。……そうだったんだね、わかったよ!!』

魔王は緑色の眼を揺らめかせたまま、黙っている。

『そうだ……魔王様は、いつも一緒にいてくれた。ただの剣だった頃から、大切にしてくれた』

アマトルは、かつての魔王と共に過ごした、遠い日々を思い出す。

彼こそ、魔王が作り出した最高の魔剣。

人間だった頃から愛用していた剣と、宝玉を合成させて作った、人工の魔物――

『命をくれたのは魔王様。いつだって、大事にしてくれてた。それなのに忘れていたのは――魔王様を疑っていたのは、アマトルの方だ。どうして、忘れてしまっていたんだろう……』

ありがとう――それが、アマトルが遺した最後の言葉だった。

ぐしゃ。魔王の手が、宝玉を砕いた。

大きな破片――取り込まれていた『ウェヌスの涙』と、粉々の小さな破片を残し、アマトルは、この世を去った。

アマトルの刀身から、紫色の光が消える。

それを見届けた後、魔王はゆっくり身を翻し、ネメシロとウシュクをその視線の先に捉えた。

「ネメシロ。ウシュク。厳命を下す」

魔王は厳かに手を前へ突き出すと、こう述べた。
「聖女を討つのは、私自身の手だ。――私以外の手で討つことは許さぬ。よいな」
「はっ！」
魔神たちは主君の命に、深く額ずく。
次いで魔王は、視線をバスティアンに――聖女に向けた。
いつか、遠い昔に――こうして対峙したことがある気がする。
その冷たい眼差しに戦慄を覚えながらも、バスティアンもまた、既視感を覚えていた。
「聖女、貴様は」
魔王は手を伸ばした。少女の小さな手のはずのそれは、どこまでも大きな手に見えた。
（私は）
バスティアンは息を呑む。
（この光景を、どこかで……）
彼がそう思った一瞬、魔王の瞳の中に、憤りとも憎悪とも異なる色がよぎり――
「……っ！」
（まただ……！）
刹那、バスティアンの足はよろめく。
かつてベルナデットの屋敷で、あの声を聞いた時と同じように。

（なんだ？　なんだ、この感覚は……）
彼は宙を仰いだ。意識がふわりと遠くなっていく。
（私は、何を思い出そうと――――!?）
ふっ、とバスティアンの身体から力が抜ける。
同時に魔王もまた、その場にばたりと倒れ伏した。

――雨が、降っている。見えるのは曇り切った空だけ。鼻腔を、煙と、血の臭いが突く。
バスティアンは自分が、泥の中に佇んでいるのに気付いた。
視線の先に、誰かがいる。
漆黒の鎧を身に纏い、折れた大剣を手にしたまま、流血し仰向けに倒れている男。
そしてその傍らにしゃがみ込み、男をじっと見ている、神々しいまでに美しい少女――――
バスティアンは理解した。これは、千年前の光景だ。
（あの男が魔王。あの少女が、前世の私……？）
彼は動かず、ただじっと二人の様子を見ていた。
「……っ。あ……」
魔王が唇を動かす。灼き切られた喉はもはや言葉を発することも能わず、息が漏れるだけだ。

魔王の頬を、聖女の手が、そっと撫でる。

「……××」

聖女は、鈴の音のような儚げな声で、名を呼んだ。

その名を、バスティアンはなぜか聞き取れなかった。だがそれが、今はもはや失われてしまった、魔王が人だった頃の名前だということだけは、不思議と理解できていた。

「××、お願い。もし、生まれ変わることがあっても、私を――」

彼女の声が震えた。その頬を、涙がつうと伝う。

「私を許さないで。――決して、許さないで……」

（……あ）

それはあの時――ベルナデットと屋敷で対峙した時に聞こえてきた声。

（あの声は、あれは……千年前の聖女の……私の声、だったのか）

聖女の涙が、魔王の顔にぽつりと落ちる。

魔王は、聖女の名を呼びたいのか、何度も口を動かした。

その彼の姿を、聖女はただじっと見つめていた。

やがて魔王は、深く長く息を吐く。その目から、光が消える。そして――

「……はっ！」
バスティアンは身を起こした。そう遠くないところに、ベルナデットが倒れている。
「おい……おい！　ベルナデット！」
ぺちぺちと頬を叩くと、ベルナはむにゃむにゃ口を動かしながら目覚めた。
「うーん……お、お肉……」
彼女は寝ぼけたことを呟いてから――はたと辺りを見渡した。
「あら？　わ、私は一体……」
「……助けたんだよ」
バスティアンは、苦笑と共に言った。
「お前が、みんなを助けたんだよ、魔王のくせに。……まあ、しでかしたことの尻ぬぐいをしただけだがな」
「え？　わ、私が……？」
彼女はきょろきょろと自分の周りを見回す。どうやら、何も覚えていないようだ。
「フン！　半端者にしては上出来だ。一時的にとはいえ、かつての力と記憶を取り戻すとはな……誉めてやろう」

と、いつの間にか傍らに立っていたネメシロがベルナに言う。
「だが、また元に戻っているようではまだまだだ。力を意図的に使えるようになるまで徹底的に教育してやるから、ありがたく思え」
「陛下……やはり陛下は、陛下だったのですね！　見事なお手並みでした！　あっ、聖女めは誤解しないでくださいよ。陛下はアマトル殿の討伐をしただけなんですからねぇ！」
事態がわかっているのかいないのか、ウシュクは胸を張る。
「皆さん……」
皆を確認した後、ベルナは向こうの床に転がる大剣と、砕けた宝玉にそっと近づいた。
もはや物言わぬそれを見て、ベルナはつい足が竦む。けれど。
「……アマトルさん」
ベルナは大剣を手に取ると、そっとその柄に頬を寄せた。冷え切った金属に、自分の熱を分けるように。
「ありがとうございました。……今まであなたは、本当によく戦って……私を守って、くれました。あなたは、魔王の――最高の配下です」
それは心の中から、迸り出た言葉。そっと身を離し、アマトルを床に安置する。
その刀身は、どこか、穏やかな光を反射しているように見えた。と――
「兄上!!」

聞こえてきたその声に、ベルナははっとアルベールのことを思い出す。
彼は未だに床に仰向けに倒れ伏していた。バスティアンに続き、ベルナも彼の元に駆け寄る。
「兄上！　兄上、しっかりしてください！」
「……バスティアン」
彼は既に目覚めていた。傷だらけだが、その黒い眼には、もう紫色の光は宿っていない。
「あ……兄上。こ、これは……」
「……よくわからんし、何も言わん。すさまじいことが起こっていたな。ただ一つ、訂正する」
身を動かさぬまま、淡々と彼は弟に語った。
「バスティアン。俺は、お前が嫌いだ」
「……！」
「だがそれは、この顔面のせいではない。……お前を怨む気持ちなど、微塵もない」
驚くバスティアンを置いて、アルベールは言う。
「お前はいつも俺に、妙な遠慮をしていた。俺が共にいると、お前はいつも辛そうな顔をしていた。それが、嫌いだっただけだ」
ふう、と彼は息を吐く。
「お前が持つものが羨ましかったのは確かだ。その心を、何かに利用されてしまったようだが」
兄の目が、弟を見る。その目には温かい光が灯っている。

「バスティアン。迷惑をかけたな」
「兄上……！　いえ……とんでもありません」
バスティアンは頭を振った。その目に、涙を滲ませながら。
（よかった……！　本当は、お二人の仲はよかったのね）
ほろりと貰い泣きしながら、魔王は微笑んだ。
「ベルナデット」
バスティアンがくるりと踵を返し、ベルナを見る。
その目がどこか優しい光を湛えていて、彼女の胸は高鳴った。
（やだ、私、また殺意が……!?）
どぎまぎしているベルナを置いて、王子は語りだす。
「これでお前が魔王であることは、はっきりしたわけだ。しかもお前は結果的に多くの人間を巻き込み、王宮を破壊した。それは到底、許されることではない」
「はっ、はい……！」
極刑を覚悟し、ベルナは畏まる。だが。
「っ！」
ぽん、とバスティアンの手がベルナの頭に載せられる。
「だからこれからは、聖女として、私がお前を監視することにする。そうすればお前も、そこ



の四天王たちも、そうそう突飛な悪さはするまい。な？」
そう言って、彼はぱちんと片方の目を閉じた。
「で、殿下……！」
ベルナの頬が、ぼうっと熱くなる。
「……おい、顔を赤くしてまで怒ることないだろう」
「え!?　ち、違います、これは……」
彼女は、バスティアンに答えを返そうとして――――
「たっ、大変だーっ！　王宮が滅茶苦茶に壊されてるぞ！」
いつの間にか意識を取り戻していた人々の叫びに、声を掻き消される。
「真っ暗なホールの中で、みんな倒れているぞ！」
「エントランスが滅茶苦茶だあ!!」
「時価五億の花瓶が粉々だぁーっ!!」
あちこちから、悲鳴や驚愕の声が聞こえる。
「おお！　ここまでの混乱を呼ぶとは、さすがは陛下……魔王ベルナデット陛下、ですね！」
「そっ、そんな！　こんなに大騒ぎになってしまうなんて……」
ウシュクの言葉に、ベルナは、今さらになってぞっと冷や汗を流す。すると――――
「――ベルナデット……だと？」

周囲で慌てていた人たちが、一斉に彼女の方を見た。
ベルナデット・ド・シャルトリューズ――『呪殺令嬢』！
「え、あ、あの……」
視線にいたたまれなくなったベルナは、とりあえずお辞儀をした。
「こ……こんばんは」
「ぎゃあぁぁあーっ！」
途端に人々はパニック状態になり、我先にと逃げ出した。
「大変だーっ、ついに呪殺令嬢が王宮を侵略したぞーっ！」
「今日が世界の終末の日なんだーっ！」
「近くにいると死ぬぞ、逃げろーっ!!」
数分後、他に誰もいなくなったエントランスで、ぽつりとネメシロは言った。
「……早く慣れろ」
「むっ、無理ですーっ！」
こうして、『呪殺令嬢』ベルナデットの伝説に、また新たな一ページが加わった。

終章　戦いはこれからだ

――新年を無事に迎えた黄金宮（ル・パレドール）の小部屋。

陽光で満たされたそのサロンで、貴族たちは今日もまた集まって、会話を楽しんでいた。

「――それでですな、これはあくまで噂（うわさ）なのですが……なんでも例の舞踏会（ぶとうかい）で、見た者がいるそうなのですよ」

「ラコスト男爵（だんしゃく）、見たというのは、まさか……!?」

「ええ。なんとあの『呪殺令嬢（じゅさつれいじょう）』の生霊（いきりょう）が、首だけで空を飛んでいたそうですぞ！」

男爵の言葉に、話を聞いていた人々の何人かが悲鳴をあげる。

最近の社交界は、例の舞踏会の噂話と、『呪殺令嬢』にまつわる怪談（かいだん）で持ちきりだ。

「首だけで窓の外を飛び回り、『中に入れろ』と呻（うめ）いておったと……私の友人の友人から聞いた話ですがな」

「こっ、怖いですわ！　それではもしやあの事故も、舞踏会に呼ばれていなかった『呪殺令嬢』の怨念（おんねん）が呼んだ、呪（のろ）い……!?」

「私は令嬢が宝玉を摑んで、バリバリ噛み砕くのを見たという者を知っておりますぞ」
「私は令嬢が巨大化して、王宮を丸ごと一呑みにしていたのを見たという者を……」
貴族たちは背筋を凍らせながら、噂話に花を咲かせている。と、そこへ――――
「クックック……」
底知れぬ深淵より届くかのような、低くしゃがれた笑い声が聞こえる。
貴族たちはびくりと身を震わせ、一斉にそちらを振り返った。
そこに立っていたのは、彼らと同じ貴族の、令嬢。
顔の半分を黒い羽根扇子で隠した彼女は、ゆっくりとこちらに近づきながら、なおも笑う。
「ククク……失礼。そのお話……」
彼女が、扇子をぱっと外した。
「……詳しく聞かせていただけませんか？」
ニタリとした微笑み。睨め上げるような三白眼。長いダークブルネットの髪。
「ひっ……！」
ラコスト男爵たちは、一斉に腰を浮かす。
「でっ……出たぁあああああーっ!!」
『呪殺令嬢』ベルナデットの姿に、人々はクモの子を散らしたように逃げて行った。
「あ……あら？」

ただ一人取り残されたベルナは、がくりとうなだれた。
「ああ……またやってしまったのね、私……」
まず愛想よく笑いながら近づいて、それから噂話を訂正していこうと思っていたのだが——やはり今日も、うまくいかなかったようだ。
「何をやってる、ベルナデット」
「あっ……バスティアン殿下！」
現れたのは、彼女の『天敵』。バスティアン・レスタック・ド・フォルキデだ。
「せっかく私がここのサロンにお前を紹介してやったのに、まったく成長していないな。それとも魔王だから、人を怖がらせるのが楽しいのか？」
「そっ、そんなことありません！」
「……だろうな。知っている」
にやにやと笑うバスティアンに、ベルナはちょっと膨れてみせた。

——王宮の事件から、数週間の時が流れた。
結局あの事件は、公的には「集団パニック」と「突発的な事故」ということで処理された。
いかに人間の理解を超えた事態が起ころうと、人間は、自分たちの知っている範囲で物事を理解しようとする生き物なのだ——と、ネメシロはぼやいていた。

一方で、いくつかの真実に様々な尾鰭がつく形で、『呪殺令嬢』の噂は以前よりもさらに広まってしまった。人々の誤解が解ける日は、さらに遠のいてしまったようだ。

しかし幸いあの時命を落とした者はなく、『ウェヌスの涙』も無事に回収された。

ネメシロによれば、アマトルが死んだことにより、宝玉はただの石に戻ったらしい。

アルベールも、見事に回復した。彼は今は立派に、執務に復帰しているそうだ。

王宮の内部の復旧は、時間はかかるが、着実に進んでいる。

人々は穏やかな生活を取り戻していた。そう――――小さな変化を除いては。

「おい貴様。何を聖女と慣れ合っている」

ぼすっと頭に手を置かれて、ベルナは身を竦めた。

「ネっ……ネメシロ、さん」

「どうやら、今日はこの場所にもはや人は集まらぬようだ。ならば好機よ。今こそ聖女を討て！」

「いっ、嫌です！」

「何を言う。貴様が『聖女は自分が殺す』と厳命を下したゆえ、従ってやっているというのに」

「そっ、それは私の命令ではなく、その、魔王の命令であって……」

「おや、そうなのか。私はもうやる気十分だぞ」

手元で『光』をびかびかさせながら、不敵にバスティアンは言った。
「陛下！　朗報です!!」
と部屋の花瓶の水の中から現れたのは、水のウシュクだ。
「火のギンレー殿が、あと少しで人間界に到着するそうです！　四天王の中で最も獰猛なギンレー殿が加われば、もはや陛下に敵はありません！」
「え、えぇえっ！　そ、そんな……」
今も大変なのに、さらに魔物たちがやって来たなら、一体どうなるというのか。
――しかし、ベルナの胸には、強い想いが生まれていた。
（私が本当に魔王だというなら……魔界のことは全部、私がなんとかしなくては）
もう二度と、あんな事件を起こしてはならない。
魔界の力で人々が傷つくことがないよう、自分が人々を助けられるようにすること。
さらに――バスティアンも、四天王たちも、そしてベルナ自身も納得できる、平和的な解決策を見つけ出すということ。
それが、今のベルナの夢。ベルナが望むことだ。
（どうすればいいかわかるまで、私、魔王で居続けるわ。……辛いかも、しれなくても）
それでも、頑張れそうな気がした。

そしてバスティアンもまた、思うことがあった。
（……聖女と魔王は、憎み合う仲ではなかったのかもしれない）
あの時幻視した、千年前の出来事。
あの光景を見て、バスティアンは胸の内に疑問を膨らませていた。
聖女と魔王は――なぜ、戦ったのだろう。二人に、一体何が起こったのだろう？
（もしそれがわかったなら……転生体の私は、前世の聖女が果たせなかったことをすればいいはずだ。例え、神託を裏切ることになったとしても……）

――しかし、バスティアンの思惑を、今のベルナは知らない。
「さあ魔王、行け！」
「来い、ベルナデット！」
無理やりネメシロに背中を押され、ベルナはバスティアンに向かってつんのめる。
「い、嫌ぁ～っ！」

――魔王ベルナデットの受難は、これからも続きそうだ。

END

あとがき

こんにちは、甲斐田紫乃です。
このたびは、『大魔王は笑わない!!』をお手にとってくださり、ありがとうございます！
タイトルの略称は『大魔王』、『大笑い』、もしくは『はわない』でよろしくお願いします。
この本で少しでも笑っていただけたならば、何よりの幸せです。

ちなみに本編未読の方のために申しますと、表紙にいる全体的に暗黒っぽい雰囲気の少女は、こちらに「親愛の情の籠もった微笑み」を返しています。
見た目と中身のギャップの激しい主人公ということで、書いていて楽しかったです。

それからベルナ以外のキャラクターも、書くうちに色々な面が見えるのが面白かったです。
バスティアンは改稿を重ねるうちにだんだん王子っぽくなっていったのでよかったのですが、例えばウシュクはどんどん頭が悪くなっていき、最終的にはとんでもないバカになりました。

アルベールは、出番が少なめでしたが、いつか機会があればまた書きたいキャラクターの一人です。色々と語ってみたいです。彼の趣味とか……。

キャラについて語ったところで、謝辞に移ります。

担当編集様、今回はこれまで以上に本当一つにお世話になりました！　色々とお手数をおかけしました。ここまで来られたのも、ご助力あってのことです。これからも頑張ります！

吟先生、素晴らしいイラストの数々、ありがとうございます！　最初にベルナとバスティアンのデザイン案をいただいた時から、心を躍らせていました。表紙イラストも本当に美麗で、しかも本編に登場する四天王がこっそり全員登場していることが、とても嬉しかったです！

そしてこの本に関わってくださったすべての方々、家族と友人に、心からの謝意を述べます。

最後に、メインタイトルの「大魔王」は千年前の魔王のことで、サブタイトルの「魔王サマ」はベルナを指すという、どうでもいい情報を述べつつ――

また近いうちにお会いできることを、心から願っております。

甲斐田紫乃

■ご意見、ご感想をお寄せください。
《ファンレターの宛て先》
〒102-8431 東京都千代田区三番町6-1
株式会社エンターブレイン
B's-LOG文庫編集部
甲斐田 紫乃　先生・吟　先生

B's-LOG BUNKO
B's-LOG 文庫

■本書の内容・不良交換についてのお問い合わせ。
エンターブレインカスタマーサポート：0570-060-555
（受付時間 土日祝日を除く 12:00～17:00）
メールアドレス：support@ml.enterbrain.co.jp

か-6-04

大魔王は笑わない!!

～起きてください、魔王サマ～

甲斐田紫乃

2011年9月27日 初刷発行

発行人　浜村弘一
編集人　森 好正
編集長　森 好正
発行所　株式会社エンターブレイン
〒102-8431 東京都千代田区三番町 6-1
（代表）0570-060-555
発売元　株式会社角川グループパブリッシング
〒102-8177 東京都千代田区富士見 2-13-3
編集　B's-LOG 文庫編集部
デザイン　永野友紀子（Zapp!）
印刷所　凸版印刷株式会社

本書の無断複製（コピー、スキャン、デジタル化）等並びに無断複製物の譲渡及び配信は、著作権法上での例外を除き禁じられています。また、本書を代行業者等の第三者に依頼して複製する行為は、たとえ個人や家庭内での利用であっても一切認められておりません。

ISBN978-4-04-727518-8
©Shino KAIDA 2011　Printed in Japan

定価はカバーに表示してあります。

オトメ革命! B's-LOG文庫フェスタ

おかげさまで、B's-LOG文庫が創刊5周年!
日頃のご愛読に感謝の気持ちをこめて、プレゼントフェスタを開催中!

【プレゼント詳細&応募要項】

〈フェスタ対象書籍〉

2011年9、10、11月のB's-LOG文庫新刊

※本フェスタの帯がついている書籍

応募券5枚で1口

応募者全員にプレゼント!

「創刊5周年記念小冊子」

書き下ろし番外編などが満載の小冊子がもらえる!!

今年は2種類!!

<賞品コース>

Aコース 「恋する王子」「闇の皇太子」「双界幻幽伝」「海が愛したボニー・プランシェ」ほか(予定収録)

Bコース 「神の獣と天の華」「イノセント・スター」「ダブル・コントラクト」「お庭番望月蒼司朗参る!」ほか(予定収録)

※内容は変更になる場合もあります。

<応募方法>

フェスタ対象書籍のオビについている応募券【5枚1口】を郵便はがきに貼り、次の項目をご記入のうえ、以下の宛先までお送りください。

1:郵便番号 2:住所 3:氏名 4:電話番号 5:性別 6:年齢 7:職業 8:B's-LOG文庫へのご意見・ご感想 9:希望する小冊子のコース

【宛先】

〒102-8431 東京都千代田区三番町6-1

エンターブレイン

「ビーズログ文庫"オトメ革命!"フェスタ」係

※ご応募には5枚の応募券が必要です。5枚1口であれば、対象書籍の組み合わせは問いません。

※複数口の応募は可能ですが、ハガキ1通につき1口のみの応募受付となります。

応募〆切 2011年12月20日(当日消印有効)

《注意事項》 ●応募券はコピー不可。●必要事項の記入漏れ、応募券の不足、文字が判読できない場合、応募を受理できません。●応募券を切り取った後のオビは、賞品が届くまで保管してください。●賞品の発送は2012年4月予定。また、発送先は日本国内に限ります。●応募者の個人情報は、弊社のプライバシーポリシー(URL:http://www.enterbrain.co.jp/)の定めるところにより、取り扱わせていただきます。

<お問い合わせ先>

エンターブレイン カスタマーサポート

TEL:0570-060-555

(土日祝日を除く12:00~17:00)

E-MAIL:support@ml.enterbrain.co.jp

9784047275188

ISBN978-4-04-727518-8
C0193 ¥560E

1920193005608

発行：エンターブレイン

定価：本体560円＋税

［大魔王は笑わない!! ～起きてください、魔王サマ～ ］

鋭い目つきに不気味な笑い声――誰もが怯える"呪殺令嬢ベルナ"の実態は――ただの口下手で内気な少女！　そんな彼女が聖誕祭で、神々しい笑顔のバスティアン殿下に「運命の相手です」と囁かれ、思わずドキドキ♡　でもその直後、「お前、人間ではないな？」と突然『光』を投げつけられ、「魔王を討つ！」――ってそれ私のこと!?混乱するベルナをよそに、空から鍋から『配下』が続々登場！　どんなに怖がられても、自分は人間だって信じてたのに――(泣)!!　爆笑必至の新・魔王ファンタジー！

B's-LOG BUNKO